

川柳雑詠

主幹・麻生路郎



新春特輯號
第八卷第一號

線海南は方恵

官幣大社 住吉神社

○元且初辰(本日ハ特ニ金幣授與)
○四日福の餅神事

官幣大社 大鳥神社

○濱寺公園驛ヨリ直營バスアリ

別格官幣社 阿倍野神社

○阪堺線宮の上下車

厄除 方違神社

○堺東驛ヨリ約三丁

厄除 もす八幡

○もす八幡驛ヨリ約五丁

厄除 あびこ観音

○元且ヨリ一週間開運厄除祈禱

○高野線あびこ前、軌道線あびこ道下車

車電海南

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆の伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全



文苑

選句機械……………
 詩的研究の第一線に立て……………
 川柳難解を吃る……………
 時評難解を吃る……………
 支那の元旦……………
 難解史句……………
 火華……………
 續川柳家戸籍調べ……………
 支那の聲……………
 編輯の窓……………
 壺(表紙)……………
 地……………
 朝除る金……………
 モダン徒然草……………
 ブボン穴……………
 歩みつ……………

加藤文辭……………
 尾崎海洋……………
 高峯柳兒……………
 水谷鮎美……………
 大西孝之介……………
 天王寺支部(公二)……………
 路郎生(六三)……………
 杭全町メモ……………
 白濱湯崎……………
 句會の横顔……………
 梅田支部(觀月)……………
 橋本綠雨……………
 大島壽明……………
 岡田三面子……………
 朝田新水……………
 朝田新水……………
 朝田新水……………

松盛琴美人……………
 水谷鮎美……………
 松丘鮎美……………
 伊藤綠之助……………
 伊藤綠之助……………
 伊藤綠之助……………
 安西杏三……………
 安西杏三……………
 安西杏三……………

高橋かほる……………
 福田山雨樓……………
 中島鐵雨……………
 岩崎柳路……………
 橋本綠雨……………
 橋本綠雨……………
 橋本綠雨……………
 橋本綠雨……………
 橋本綠雨……………
 橋本綠雨……………

關本雅幽……………
 關本雅幽……………
 關本雅幽……………
 關本雅幽……………
 關本雅幽……………
 關本雅幽……………
 關本雅幽……………
 關本雅幽……………
 關本雅幽……………
 關本雅幽……………

龜井花童子……………
 龜井花童子……………
 龜井花童子……………
 龜井花童子……………
 龜井花童子……………
 龜井花童子……………
 龜井花童子……………
 龜井花童子……………
 龜井花童子……………
 龜井花童子……………

長谷川一徹……………
 伊藤新愚……………
 伊藤新愚……………
 伊藤新愚……………
 伊藤新愚……………
 伊藤新愚……………
 伊藤新愚……………
 伊藤新愚……………
 伊藤新愚……………
 伊藤新愚……………

森井石竹……………
 藤井石竹……………
 藤井石竹……………
 藤井石竹……………
 藤井石竹……………
 藤井石竹……………
 藤井石竹……………
 藤井石竹……………
 藤井石竹……………
 藤井石竹……………

楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………

楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………
 楊井二人……………



粒 上野錦水 山本丹路 (三)

光 蛭子省二 近藤飴ン坊 安川久流美 前田五健 (四)

近 武耀抄 大島濤明 相元紋太 佐々木三福 長崎柳秀 (四)

同 作柳樽 誼勝女子 縫愛吟 子女 是ス枝女 白よし 梅 乃女江 房柳 子女 (三)

一路集(募集句)

初 酒 雪 川上三太郎選 (五)

小 鳥 麻生霞乃選 (五)

各地柳壇 伊藤縁之助共選 (五)

西關 中堅作家は語る 中見光路 (五)

低徊趣味へ 布部幸男 (五)

演説會から戻つて 山本雨選 (一)

川柳も結局は人間 ロンドン象張子の虎 長崎柳秀 (六)

盃を傾けつゝ 壩口塊生人 (一)

作句ミ選句に就いて 阿部閑生 (八)

句は人格の反映 川柳はよろし 森雞牛子 (九)

清靜聖への一路 高橋かほる (三)

年寄は駄目 竹内多聞 (三)

無産者の立廻の句に 大久保大夢子 (三)

名句の洗禮 三條東洋鬼 (三)

創作 懸賞川柳發表表 大石文久 (三)

獎勵 懸賞川柳發表表 (五)

近作

麻生路郎

失業者ただつきあひの賽をなけ
双六の泊り珈琲を入れませう
よい春にされて松竹梅をうけ
きつちりさ坐れば春の酔ごち
ねまきから餘所ゆきにするお元日
お元日女房の聲に子等の聲
飲みに来いさ云ひく春を留守にする
十二月剃刀持つて怖わがらせ
懸取を押し流すほご降れよかし
君に壽像に春よ輝け
蘆村を懐ふ(三句)
その子等は一に一足すこご知らず
鉛筆はみな削られて岳父は亡矣
乃木さんに似たる姿も今更に





川柳塔

松盛琴人

○ 方針も淋しすぎて五十分過ぎ方針を考へてれば火種つき鶯のやうに麗人生きてゐる自然の子何いふ事のあるべきぞ慾の負傷岡辰帳も間に合はずダーミなつたのを悪友見逃かさず激すれば紳士的にご會社側

○ 高橋かほる

こないだの禮を云ひ合ふ鳥の内皆横顔のラツシユアソーよ呑みにゆく踏切新潟行きがゆき竹ごまの廻うてる様に子がすねる

掛け茶屋の猫今月はみもちなり話だけでも嬉しい事を老後聞き幕切の台詞をまねる道具方

○ 龜井花童子

苦も知らず幸福な犬箱に居る餅みんな徹びる暖かさに浴し爪一つ客間にあつて詰じられる盲目の子にも正月親しまれ下女の死を歎くがやうに犬靜か玄關の落葉を掃いて老ひを知り

○ 長谷川一徹

處女なのか知らねぞ小黴いたましくもう用がなくなつたので來ぬのなりあの時に時雨が來ずば他人なり拾錢の萬歳を出てバスを待ちマリ投げは止める家主ミ書いてある

○ 水谷 鮎美

父の暇青い棕櫚の蠅たゝき古型の父の時計は光つて居散髪が目立ぬ父ミなりにけり太陽を射るもの父の蹴ひかる

福田山雨樓

肩掛を膝までたらし朝の戀
女房もつかまつてゐる櫓へ暮れる
義妹が國を出て來てからのめ
ごら猫の毛が汚れてる風が吹く

關本雅幽

酒の息月が氷つてゐるもよし
階級も地位も娘は乗り越す氣
まあくご握り潰しにかゝるなり
理事者共に智恵を貸さうか或日フ
外套の影の黒さがつきまごひ
父母の手を取り銀閣寺金閣寺

伊藤愚陀

太股へ脂切つたる顔描く
乳くびの痛む女給よ酒をつぐ
失業都市へ嗅覺は犬に似て
情痴の風景にリップステイツクが折れてゐた

松丘町二

憤り疲れし身にも初日の出
底深き微笑の人は廻れ右
蓄音器街の野分に嘆きゐる
嘘つき共には眞實すぎる冬の姿だ
父よ故郷よ三十の子さなりにけり

中島鐵洲

その上に犬出迎へる暮向き
まだ呪ふ力もありて年を越し

住田亂耽

自尊心をタクシー早く捨てすぎた
影のない灯を持つ春の夜のサロン
油繪に塗りこめられた巡羅兵
時計臺に聳ゆ近づく學期末

朝田新水

悄然一人さまよふアスファルト
氣がつまる様に思はれモガミ居る
燒増をする程美人さは見えす
玩弄視されないうまでも落ちぶれて
唯バシの爲めに働く女も居
境遇に別に研究ばかりして
夜勤もうよれば手當の事ばかり
ひこころの景氣を女からも聞き
誰にでもしてた約束だったのか
捨て鉢ならぬお汝さ呑むか
葬式の列を奇怪に思ひける

伊藤緑之助

○ 岩崎柳路

三味線を教へ亭主は旅に居る
毛生液の空瓶もあり芥捨場
モデルふご覗かれて居る事を知り
嫁ぐ前メイ牛山の木も讀み
それ程の客でも無しご糞盆
カルタ會ラデオは無駄に鳴り續け

○ 出口雨町

羽根蒲團あゝ十八の夢深き
嫁したさて丸髻に結ふ人ならず
プロの手で機械が動く世が動く
下女一人へして緊縮したつもり
笑はせて居ればお金になつてゆき
經を讀む聲も職業じみてゐる
降る雪はふらしておいて餅を焼く
雪の朝くちびる赤き君も居る
酔ひ痴れて出たに淋しき月一つ
涙は流すものよそのための涙よ

○ 北山悟郎

麗人の一語くを婦人記者
勝手元のぞけば問屋さは見へず

○ 安西杏三

三十にして父に及ばぬ事を知り
解消もいゝが腹の子を何さする
恐ろしい言葉ばかりが口が出る
盃が一つ自慢を未だ續け
滯るは禮狀ばかり宵寝する
愛の巢がおかしい程に子がふえて

一徹先生に

童心になり切つてのぞく顯微鏡

○ 橋本綠雨

人柄をおしまれてゐるカルモチン
宿替に所もはつきり云へぬここ
工場の閉鎖に空は晴れてくる
肥汲みが點滅燈にうつりけり

○ 三好計加

秋の花貫へばカマキリ匍うてゐる
共鳴したので飲まず氣だらう
スケツチに美人はよけて通るなり
休んでるご頭の上で鳴子鳴り
薬焼く煙りを牛もよける氣

○ 木村晃卓

君が俺がの中に奥様つゝましい

夢にまで我れ貧しさのまゝなりし
世が世ならあんな者に鼻をかみ
貧乏もよいこの話うまがあひ

病妹臨床

咯血を知らすかほそき手でまねき

勅題

壯嚴を感じ社頭の雪へ立ち

楊井 二南

公然と養ふこころを憚かられ
うつかりしてゐた玩具屋のかご
寝るこころにして正月を恐れない
でほちんの藝者に客があるかいな
我がこころが書いてあるので本を買ひ
風よそんなに押しして呉れるな
日曜の朝つばらから借りられる

森 石竹

悼芦村翁

ロンちやんを抱き上げてゐる翁の靈
若き血のよしなきわれをやせさせる
こほろぎよふろふきの味聞かそかの
ごみ舟を押しわくひこのたくましき

生活戦線に朝もやを衝く
美しく食へる女が羨やまし

社頭雪

雪明り社務所は炭に手をかざし

元旦

實に春の静けきものに軒の幕

中見光路

放つ矢がないでもないがまあ止そう
傳道へ酔聲あけた草津節
合槌を欠伸に代へたこは知らず

蘆村翁を悼む

蓮の座に孫の居らない背が冷え
親の轍ふむ修身の聲が冴え
念押しして辻で別れた嘘と嘘
けろりつこ丁稚フォークを皿へ置き

生田翠夢

二階借り煙突のみが見えてゐる
逢ふために来たこは女信じてす
かいだけば昔のまゝの女なり

藤岡櫻果

検事局の廊下で

知つた顔なんでも来たかを聞きかねる
身を落す元の主人も口がなし
入れ方も教え指サツク賣る

◇ 櫻井圓角

少數は自然と清う固まれり
御無沙汰の本へ頁をめくるのみ
元旦のしたくも出来て産氣づき

◇ 中澤濁水

秃筆を恐縮で借る女先生
共稼きれいに切れて夜具を縫ひ
誰々が来たか忘れた二日酔
貰ひ手がありませうか之母の世辭
要談の恰度出會つた散髪屋
仲裁は趣味の話を先づはじめ

◇ 越中今雨

逢ふて来たことも知らず母案じ
ダンサーの足大根に似ればさて
うらやんでるのに聞けば失業者
孝行はしてゐるませんか孝子云ひ

親方の一言一句臺詞めき

◇ 平井蒼太

ふつとまたあなたの顔を描いてゐた
草されば土のほひのあたゝかく
まつかなるすろうす憶ふ眞冬朝

◇ 須崎豆秋

山高帽コロくこけてお元日
一生の幕切れヨイヨイになり
ハンドルの冷たさ交叉點の冬
タクシーの走つてる間にお正月

◇ 西村明珠

大人なら指さすまいに初日の出
青寫眞せからしい子が側に立ち
實印を一つおしたる年の暮
明日は明日今日は今日と酒をのみ
はしやいでゐる子の方へこはい顔
眞鍮の煙管疊に投げ出され
二等車で重役金を借りに行き
正月のそこらこらに柿の種
守り札氣樂な時に下けたまゝ
子の寝顔明日は何して泣くのやら

◇ 片桐 靈 壺

要するに銚子を出せば黙るなり
大法螺で通す元氣も失せてるる
隙間 風 あゝ金の世や く
大輪の菊を咲かせて 理に疎し
中年の英語はかなし 假名をふり

愛の巢を訪ふ

御兩人は今日もお留守でございます

敏腕家S氏東京轉住

名刀を大東京にひつさけて
熱心に禮拜に來て居ねむれり
妊娠の女房を蹴つて出は出たが
街の子ミキヤツチボールをして別れ

◇ 阿部 閑 生

見て巡る來世の奈良の佛たち
後ろから見れば猫背の蘆舎那佛
天平の佛のまぶたちさみだら
妻の禮子の禮うけてお元日
吾妹子の稚煮嚙み切りあへずかも

◇ 日野 華 水

所かまわすつるはしの水道課
時々の事ですけれご妻ご伯父
五拾圓の金に飽いてる會社ゴロ
何くわぬ顔へ冷めたい飯をつぎ
言付入 そうかく膳を出し

◇ 熊本 黄 蛾

酒ぐせを案じて旅の留守を縫ひ
貧しさを別に小供ははゞがきき
子の目にもはつきり見すほらし父よ
稚兒姿化粧くづれもなかつた

◇ 池田 雪 峰

妻のなき淋しさを知る大晦日
便箋もきれた女も逃げた
文明か知らねご電車今日も轢き
さうすればいゝか知らん大晦日

◇ 元 旦 河野 双 車

子のまろき顔から春は明け初める
淋しさにかむれば足の出る布

新婚のK君

春はよきダブルベットの春はよき
集金を去なし火鉢が冷えてゐる

◇ 喜多 春秋

藝をする虎へパチンコ鞭がなり
新舞踊青い光へひざまづき
よく弾く妓顔に大きな痣があり
凝つた肩讀んでゐる子へ持つてくる
しんみりミ女給に嘘を聞かせけり
賣れぬ妓ミ賣れぬ妓夢の話する
鈴蘭燈耳輪が通るモガが行く

◇ 杉谷 專治

金を見つめて女工部屋の午前二時

兄の退營

舉手の禮母うろくミすがりつき

◇ 中野 裸人

親の眼に人相の悪い男が來
こぢあけてはいればたばたあミがあり
金にならないうまいだんざり

標札があるので米を置いて來る
電話では一寸のんだミ云ふてゐる
家を出たのも嫁の仕業になつてゐる
おみきだけで我慢をしるミ笑はれる

◇ 西田 艸樂

漬物の石まで積んで越して行き
今賣つたマツチで引越禮に來る

◇ 上野 錦水

そば屋からすし屋に逃げた出前持
肥料屋のポスターがある大地主
紺緋着せて記念に一つ撮り
退校に叔父かつがれた事を知り
看板の娘にされて嫁き遅れ

◇ 山本 丹路

妹は素直に嫁にゆくミ云ふ
目ざましが忠義顔して起すなり
道化役者は一人になるが嫌いです
懷疑虚無主なき蜘蛛の巣ミなりぬ
淋しさが細い肩からミんできた



選句機械

麻生路郎

昨年は一九三〇年を無闇に振り廻はしてよろこんだが、今年も三一年を云々するのだらうか。紀元二千五百九一年の方は曆の外には使ひ道がないのだらうか。と安煙草の煙りにむせながら僕は片手落ちな世間ををかしがつてゐる。今年もエロやグロは相當流行るだらうが、尖端は少しく鈍端になつてもいいし、百パーセントは盈つればかくる世の慣ひといふから九九パーセントを流行らせた方がよくはないかと思つたりしてゐる。

それにしても僕は今年も選句機械で終始させられるのではなからうか。もういゝ加減に選句機械を辭してもいいのではなからうか。大火鉢に手をかざしたまゝ考へ込んでゐる。

思へばもう長い間の選句機械である。その間には度々機械に故障が出来てもう少しで廢棄されそうになつたこともあつたが、緊縮の餘慶にいふ譯でもあるまいがそれをさうにか修繕して辛末柳壇の今日でも矢張り機械としての存在をゆるされ、一句々々懸命になつて句の選分けに酷使されてゐる。これも國産品の つほい機械が多い時代は止むを得ないこと、諦めるより仕方があるまい。それにつけても機械を、もう少し大切に取扱つて貰はないと早く傷みが來はしないか。機械自ら案じてゐるのである。そこで機械の取扱方を少しく知らせることにせう。

先づ機械の能率が悪くなる點から云へば、投句用筆が決つてゐる時には必ず規定の投句用筆を使用して貰ひたい。紙の切れつばしや無闇に長つたらしい紙などは機械がデリケートに出来てゐるればるほご故障を生じて能率を減殺させることになる。それから誤字や脱字や當字なども機械に狂ひを生じ

る原因なる場合が多い。だらしな文字もいけない。文法上の間違ひなきは一時機械の手が止まる。特に天爾遠渡なきは氣をつけない。齒の回轉が滑らかに行かぬ。

それから同じ材料を二つの機械へ投げ込む無定見な作職人もあるが、粗悪な機械ならいざ知らず、少しく優良な機械は例令選分けても南洋や支那向きの輸出品扱ひしてゐるのである。大抵の場合にはハネになつて屑屑の手に渡される。

摸擬品なきは、まだ多少見直せるものもあるが、くすねて来たものなきは機械は直ぐに空廻轉をするから駄目なことは知れきつてゐるのに萬一を僥倖せうとするのは滑稽である。尤もこれは専門店では全然無い云つてもいいが、場末や夜店なきではちよい／＼みかける。場末や夜店では出来具合によつて景品が附くので景品欲しさに、胡麗化し物を擔ぎ込むことが多いやうに見られる。

夜店や場末の品なら、それも仕方がないが、専門店でも時々無印品を送りつけて選句さされることがある。景品がつく場合にもそれも仕方がないが、無印品の選分けは、ただ善悪を識別するだけであるから、何も優良な機械を酷使しなくても出来る仕事だがそれを敢てさせられるので機械は少からず無味乾燥と侮蔑を感じさせられるのである。いゝ機械に選分けさせる以上は個々の特徴によつて細かく選分けさせ、その特徴をますます顯著な状態に誘導するまでの機械の能力を信じて貰はねば、機械に舶來も和製もあつたものではない。

和製品になるさたゞ機械の好き嫌ひによつてのみ選分けるのであるから、途方もない選分けをやつてゐる。尤もそんな機械は選分けることにだけ興味を持つてゐるのであるから選分けられてゐる方こそいゝ災難だ云はねばならない。

こんなことをダラ／＼喋つてゐるに、選句機械さいふものは實に苦駄らないものやうであるが、そうした酷使される世界中にあつて選句機械が感じる歡喜についても少しく述べて置かねばならぬ。

先づ第一は選句してゐる際に、飛び抜けていゝ製品を選句した時である。そして引き續いてそうした製品を送り出す作職人を見出した時には無上の喜びを感じるものである。しかしながらいつまでたつても優秀品を製しないで、満足してゐる職人を見るに齒車に搔ゆさを感じる。つらく按ずるまでもなく、いくら優秀な選句機械でも、よく百年の壽命を保つものではないから、不快な製品の横顔に一種の悲哀を感じながら機械自身も遂に埃まみれになつて、工場の一隅に廢棄の涙を流すのに過ぎないのだと思ふ、さういふか無常を感じないではゐられぬ。

南無精進一路柳運久。



關西 中堅作家は語る (其の一)

訪はるゝも柳人訪ふも柳人、一九三二年の柳壇へ何を語らんとするか。記者の衣襲奇襲に麻胡つきたる人々堂々たる應接振りに新米記者を煙に巻きたる人々もあれば、天下の記者を跣足で蹴飛ばす名記者もありて、興味津々たるものがある。新春劈頭の好讀物たるは、いさゝか編輯局同人の誇りとするところである。(編輯局)

低徊趣味へ

布部 幸 男

記者 安井ひろし

印刷所の御主人である布部幸男氏は、年末殊に御多忙の中を特に西木屋町照月に記者を招じられ黄昏るる京の街を見下し南座のフットライト背に心ゆくばかり語られた。

私の川柳の始まりは十八才の時で明けて三十一ですから満十二年になります。日出柳壇にはじめて投句した

年賀狀入れるたんびに夜が白み

こいふのが福造氏選で天にぬけたのです

それから川柳が面白くなつて、藤井好浪

君等「擬寶珠」こいふ剣花坊派の雑誌を

出した、松窓氏等「紙衣」を出し、

對照「紙魚」川柳街こいふように關係して來ました。

「京」はたゞ同人に祭りこまれたこいふ

だけであまり深くはいつて居ませんで

した。

京都の川柳界は相變らず振ひません。

川柳街、京、紅椿、京番、糸瓜會、木馬

會、等澤山の例會がありますが、顔ぶれ

はいつも同じでいつこゝう新味もなく、例

會會費の上げ高で雑誌が維持されるこいふような状態です。

私は川柳會以外に川柳があるのだこい

ふ事を考へて居るので、以前のようにな

んでも天をこつてやらうこいふような氣

もなく、此頃はここの例會にもあまり

り顔を出しません。

京都の例會の内では糸瓜會が、川柳街

の新人や「京」の青村氏等の主宰で幾分前途があるのこ、木馬會が水原、影像の人達、大島無冠王氏なきによつて、新生面を開拓して居る位で結局京都柳界は京番の様に各雜誌の支部組織の所謂合理化に壓倒されるのではないかと思ひますよ。

私は賣名家や暗中飛躍する連中がきらいですから、たゞ一人すきな低徊趣味の句をつくつて行くのではないかと思ひます。

氏は、この頃哥澤に熱心で、大學出の師匠芝彌三氏について大いに其道に研讀されて居る。「私には、哥澤の氣分と川柳の氣分がびつたりして居るように思へます」と語られ「酒をのまれば話の出来ぬ私なのですが今日は大分話しました。もう、哥澤の會の時間なので……」と惜しくも美聲をきゝもらすしお分れた。

演說會から戻つて

庄 萬 よ し

記者 松 盛 琴 人

私の擔當は大阪市民 三百萬の利害を双肩

に荷つて東奔西走する庄健一氏だ、朝出れば鐵砲玉の様に行衛不明となるお尋ね者だ。何時廻り會はれるかと窮餘の一策、萬よしの店で呑みながら夜通し待たうと言ふ、とても素晴らしい名案が功を奏して、市會議員であり全國大衆黨中央執行委員關西事務局事務長、

記者撮影の萬よし君と愛嬢



兼川柳雜誌社同人宣傳部長等々、江戸から長崎迄ありさうな肩書を持つ万よし氏が演說會から疲れて戻つた處を首尾よく生け捕つた。早速僕は使命を果たすべく川柳に對する氏の感想を叩く。「ヨシツ」とばかりで氏は得意の雄辯を振るつてくれた。以下記す處の演說体なるは氏のカラーが出てゐると思ふので其まゝを描寫した。

A 無産運動から見た川柳

川柳はつまり其發生期に於て被壓迫階級より見たる權力階級の側面描寫であり、實狀暴露であつたのである、其流れを汲んで川柳に生きてゐる私の川柳觀は、現在の社會組織、政治組織、文化組織等に絶大なる矛盾を感じ初めたのである。川柳による社會の側面觀を暴露が自然に成長して經濟政治組織の側面的描寫を現實暴露にまで到着した事は、數のまぬがれざる歸趣である、文藝的に於て川柳は、政治的に於て無産運動は、僕の餘生の全力を盡して極力進展せしめなければならぬものと覺悟して居る、それが自然的でもあり且つ僕に於ては有意義なる結論である。よ自から固く信じてゐる。

B 昭和六年の川柳

川柳が社會の客觀狀勢の反映である以上一九三一年の柳界は其社會狀勢の反映であらねばならない、將に資本主義崩壞期に入つた一九三一年は當然中産階級の没落を招致するに同時に資本家と勞働者の對立狀態を高めて之を深刻化するであら

う、從而柳界の傾向もプロミブルミの對立を餘義なくせられるのではない？斯く推理を進めて行く處に自然過度時代に於ける印象派新理想主義、エログロ、レビユー等々渦巻く激流に泳ぎ廻つてゐる各派は、自づから解消せられて、古典派ロマンチックを含むプロジョア一派ミあらゆる新傾向を打つて一丸ミせる、プロレタリアの一派ミに分類清算せられるのではないか、少なく共其傾向が一九三一年度に於て鮮明に發展するであらう事は豫言するに躊躇せぬのである。

元氣旺盛なる万よし老の雄辯は中々盡きない時は正に今日と明日の境を越えんとしてゐる餘り長座は禮でないと最後に氏の大切なる一粒種の愛嬢敏子さんと並んでもらひ平和なる氏の笑顔をカメラに納めて失敬した。

(一九三〇、二、二二)

川柳も結局は人間

山本 雨 迷

記者 松 丘 町 二

「人ミして最も尊敬すべき方ですね。路

郎先生はよく私を叱つて呉れますよ。永いことお逢ひせぬので近いうち一度お目にかゝりたく思つてゐます」語るは「たまむし」の主盟雨迷氏。如何にもスポーツマンらしく中肉長身。朗らかで明るい場所は野村ビル地下室の食堂。午後六時「結局川柳も人間ですね。そして教養が出來てゐない人間が川柳を作つたつて、

それは川柳でも何でもなく、川柳みたいなのを作る單なる馬鹿だ。そしてやつぱり苦勞してきた老境の人の句が本當のものに思はれる。最近日車さんの「何でもない秋風」こいふ句をみてさう思つたんです。此人にして始めて領ける境地でせう。」

眼鏡を拭いて氏は語りつゞける。「ある一派の人々は川柳をほんの餘技に、精々紅茶か食後の果物位の氣で生活の氣休めに文字の遊戯を試みる。我々は我々の川柳に向ふ時自分の精魂を傾注する。即ち川柳に對ふ時は川柳そのものを生活するそこに彼ら遊戯派川柳ミ根本的に相容れ

ないものが生れるのです。要するに川柳も上手に作らうなんて意識して作つてちや駄目ですね。」

新年號には何か御計畫でも、ミ訊くミ「いやよその雑誌がそれ／＼趣向を凝らすやうだから、自分のミこは何もしないこミ、それが「たまむし」の計畫ですよ。」ミ哄笑。

女の子ばかりで、こいふ氏は三人のよきお父さんだ。それから隣の卓球俱樂部で鮮やかなこころを暫く拜見。午後九時雨中自動車を駈つてからの三時間は雨の夜にふさはしい愉快さであつた。

ロンドンの

象ミ張子の虎

長崎 柳 秀

記者 福田山雨樓

十二月六日の午後大阪醫科大學へ柳秀博士をお訪ねした。

もう十年もこのまゝ勤めてゐられたら從七位に叙せらるゝかも知れぬ一介の判任官であるところの、官等意識病患者が正五位の

勅任教授の前へ罷り出たときは、流石に胸のごよめきを禁することが出来なかつた。

しかし、博士はいとも平民的な御様子で何等の虚飾も見榮もなく、只の一川柳家として心よくお會ひ下すつたのと、博士の部屋の一隅に今朝雨の中を御登校になつたと見えて、濡れた蝙蝠傘がひろげたまゝ、乾かしてあつたその一風景の爲めに、自分の胸の動悸は妙に静まつて、人間柳秀先生の視野を横切ることが出来た。

十二月四日の大朝紙上に、新ロンドン市長就任行列中のインド人區域を代表した象四頭が群衆中で赤い張子の虎に驚き暴れ出して重傷輕傷多数を出したミ報じてあつた。そも／＼あの記事である。

私(博士のこ)は珍らしい事件だなあ、と人並に吃驚してその日たま／＼醫大に來られたH博士にその話をしたところ、H博士の觀察は流石に鋭かつた。曰く、「象が張子の虎に驚くなんてこゝは嘘だ、第一象は熱帶動物であるし、虎は寒帶動物であるから兩者が舊知の間柄であらう筈がなく、從がつて象が虎を恐るべきも

のだミ印象してゐる筈がない、恐るべき研究室に於ける柳秀君



ものだミの印象がないのに驚く道理がない、それは恐らくライオンの誤りであら

う」

「ミ見事に横鎗を入られた。この横鎗には私も痛く感心させられて、家庭に歸つてから、新聞も馬鹿な事を書くものだ、ミ淳々ミ講義をした。のみならずその翌日の書教授連中の會食の例亦々象の印象説を持ち出して、H博士の見識を物語つた。ミころが大學には更に英邁なるミ博士が居つて言つてこれを否定されて

「昔のこはいざ知らず近世インド當りでは、山深く虎が棲息してゐる時々象に乗つて虎狩に行くものである。だから象は虎に出逢つたこを驚くのは決して不自然でも矛盾でもあり得ない、即ち新聞は事實を報道してゐるのであるミ信すべきだ」

この新學説には流石に私もギヤフンミ參らざるを得なかつた。ミ苦笑しながら語られた。

それから色々川柳に付てお話を伺つたが、その中で

「私は川柳を作り出してから、社會のこゝミ世間のこに對して今迄違つた見方

をするやうになつた。そして深く世の中のことを考へるやうになれた」

「此頃は宅で一人留守居しても決して退屈をしない、川柳を作つてゐればひきりに時間が経つてしまふ」

としみ／＼告白された。先生は固辭するの
にわざ／＼門までお見送り下すつた。
實に人間の感心する先生である。

盃を傾けつゝ

堀口塊人

記者 出口雨町



誰の作だか忘れたが、「
標札の時雨れる中に見當
らす」といふ句をしみ
／＼味は、されたのは昨

日のこと。此の日十二月六日の宵は天候もさして悪るくなく、北天下茶屋の交番所で所在を確かめて訪れたのは堀口塊人氏のお宅である。奥さんのお取次で早速上げて戴だくと氏は方に愛盃を傾けて居られる所。記者もすゝめられるまゝに盃を貰つて、し／＼御意見を叩く。

「川柳の文壇的進出いふことはです

文壇から認めて貰ふやうにするここではなくて、川柳をして文壇がさうしても關心せねば居られないやうな存在たらしめることなんです。私はそれについて常に思つてゐるんですが、あの子規の偉大さは誰の力にも頼らなかつた事です。つまり文豪夏目漱石が「ホト、ギス」に寄稿したのではなくて「ホト、ギス」が文豪漱石を生んだんです。番傘が今日多數川柳家に支持されてゐるのも獨力同人木位で進んでゐるからだとも信じてゐます

これはあまり感心出来ません。一けしまあ川柳の今の状態では止むを得ません。其から話は變りますが貴方をマルキストと聞いてゐるのでお話しするのですが、僕はこれに労働運動に經驗を持つてゐるんです。大体資本家は今の無産黨なごの言ふやうなケチな悪事をやつては居ないんです。もつ／＼大きな悪事をやつてゐますよ。「眞理の春」にしても未だ／＼資本家の悪辣さを知らな過ぎます。しかし僕は内容的にはプロレタリアであるつて役割(職業的)はプチブルでも云ふ

んですか、ミに角、思想的に現在の僕は貴方ミ立場を異にしてゐます」高見が次から次へに進展してゆく所を、記者は長居をわびてお暇した。氏の愛嬢の「アン」「アン」に送られながら。

(寫真カッパは塊人君)

作句と選句

阿部 閑生

記者 安西杏三

北濱二丁目の會社の應接間で閑生氏は語られる。

「川柳は俳句や短歌に比べると何うも個性が出にくいやうに思はれます。此れは川柳が他のものに比して表現が自由であるからではないでせうか。恰も野球や庭球に六つかしいルールがある爲めに却つてフラインプレーが目立つて云つた譯ではないでせうか。

川柳は久良岐三劍花坊が川柳の新運動を起した頃投句をしたが其後中絶して居たのを「たまじし」の創刊當時から再び始めるやうになつたのです」云はれる丈に

句は人格の反映

森 鷄 牛 子

記者 丸 山 公 二



名にしれふ大大阪の工業地帯煙突林立し空氣も黒き西九條の一角から、故而笑子翁愛用の鐵筆をふるひ、沈滞せる現柳壇に異彩を放つ關西柳界の痛憤兒 森鷄牛子氏を社命に依つて訪ふ。

明るい電燈の明るい二階の一室で、メ

ンタルテストですなアこ火鉢をさすつて笑ひ、こりやうつかり喋舌べられない)ミ云ひながら眞顔になつて私は論客ですこ前提して柳界に對する感想を意氣あたる可らざる勢で左の如く語られた。

「私は新聞記者當時より川柳を初め故而笑子氏と、家庭的に師弟關係を結び媛柳にたてこもつてゐた。處が而笑子翁の死後始めて、柳界なるものに着眼すると、川柳社會進出を醜惡な手段で企てゝゐるのに呆れた。例へば(と聲を高めて)番傘が帝國主義をふるひ、小人数で和やかに川柳を楽しんで居るグループを攪乱するが如き行爲は、餘りにエゴイズムで柳界の痛と云つても然りである。かゝる行爲を避けてこそ、健全なる柳壇が成立するものであると確信するのである。」

とて滿々たる 不平を述べ、論鋒漸く鋭く新米記者たる僕は聊さか面喰つてしまつた。氏は更に語調を強めて曰く。

「句は人格の反影なり」

をモットーとし句の善惡は第二として要は人格が第一である。私のグループ或は雜誌が貧弱であつても眞面目に時代に適合した句をとり、柳界淨化のために、多少なりとも貢獻したいと思つて三味紳柳を刊した」ミ語る氏の顔面は紅潮を帯び舌端火の如く、終りに臨んで、職業的川柳家の撲滅を高唱して、冷へた茶に咽喉佛を動した。そして話しはつきる事なくあらゆる方面に及び、漫畫川柳に至るや「漫畫川柳は川柳を向上せしめない飽くまでも川柳は詩であり且つ又主であつて漫畫は從である。素文の如き漫畫は川柳を墮落せしめるものである」ミ斷定した誠に氏は三味紳柳誌、十一月號)所載の如く無産闘士のタイプを持し又一面家庭に於ては夫人亡き後を幼き一兒を愛撫して

中々利犀な見方をされてゐるご感心した「句を作るのは上手だが選は拙な人ミ句は拙だが選の上手な方ミ句も選も上手な人ミがあるやうに思ひます。勿論句も選も拙な人もある譯ですが。そして句は巧みだが選は拙だミ云ふ人はごちらか云へば技巧的で表面的であり、句は拙だが選の巧みな者はまあ苦吟遅吟の人に多いやうです。それより前者よりも後者の方が表現的でなく肉面的に眞面目にものを見て行く傾向がありますから伸びる可能性は後者に多い譯だと思ひます。又選は單に好きだミか嫌いだミか云ふのでなく句の價値の問題でありますから誰が選をして佳句は佳句でなければならぬ筈だミ思ふのですが共選等を見ますと一方には三才に抜いて居るのに他方では没にして居るミ云ふやうなのを往々見受けま

此れ等は選者がお互に會合して大いに研究すべき問題ではないでせうか。」

話は中々盡きすそれから 灘萬の二階に行き約一時間半有益な時を持ち得た 事を感謝しつゝお別れした。

獨身を徹するの士であるかたはら川柳に奮闘されつゝある人間鶏牛子の姿を見る時涙ぐましく感ぜられて我が柳界に氏あるを矜りこするに共に只々その健在を祈つて已ない次第である。

(寫真カットは鶏牛子君)

川柳はよろし

高橋 かほる

記者 松丘 町二

「かうぞ二階へ」二階は床の間の棚の上に數百の博多人形——大阪の真ん中ごも思へぬ靜かな住居。かほるさんは語る。

「初め路郎先生ご 縁附さんごが来やばつて、勧められましたんねん。這入れば窮屈やご思つていやや云ひましたんやけご、さうくく……。それからさうつご。

え、雜誌は「川柳雜誌」しか見せん。時並疲れてもう止さうかご思ひまんねだけんごさていよくごなるご、やつぱり未練が出まんね。來年はちつご馬力をかけまひよ。自信のある句つて、さうだんな古い句はだんくいやんなります。でも松江で出來た「花道は相合傘の幅に出來」

なんか好きだんな。一つ句でも作りまひよか。」

嬉しいごこに出された硯箱は、その爲に準へられた小さなのが二つ。めい／＼に靜かに墨を磨つて、筆を濡らして、出たのが

逢曳の三丁程は無言なり かほる

スケッチへ鳥はちつとあて呉れ、同

雨がほつりと逢曳の別れきは、同

鳥二羽風に吹かれてゐるばかり、同

あとは對座吟として地方柳壇へ。——それ

から餘の話。繪の話。嘗ての松江行きの話。芝居の好きは云ふだけ野暮。活動は、五六年観ないとのこと。結論「やつぱり川柳はよろしおまんな」

辭して歸りかけに「出雲の神社へ御禮詣りをせればいけませんよ」と云へば「さうだんなア」とかほるさん。

清、靜、聖への一路

竹内 多聞

記者 福川山雨樓



南海線住の江驛で降りて北へ二三丁後戻りするご電車々庫がある多聞氏の御宅はそのす

ぐ西側で、夜のごこゝてしかごはわからなかつたが、一面の野ツ原に取り圍まれた一軒家ご云つたやうな、もの靜かな環境である。

「この間大阪東京間の定期飛行に同乗して、空の神秘ご快味ごを満喫しました。

同機には歐訪飛行で有名な阿部中尉も同乗してゐられたので大いに意を強くしました。東京から更に日光一圓の風光を探りましたが日光の紅葉のすばらしさには全く驚きました。紅葉ご云ふものに對して感じがすつかり變つたやうな氣がします。それはごても雄大な、明媚な自然でした。特にあの秀峰男體山ご中禪寺湖ごのコントラストには得も云はれぬ妙味を感じました。」

一人で旅をして、深く大自然の懷に抱かれたごきはごき、人間の小ささを感じるごこはないが、又このごきはごき生命の力強さご歡喜ごを感じるごこも少ないご思ひます。」

自然を讚美し自然に隨喜する氏の舌端あやしくふるえて盡くるごこを知らない「近頃川柳をさほつてゐるので何れお叱

りを受けることゝ豫期してゐましたが、僕は一方に俳句にも精進してゐるし、雑誌「工人」の編輯にも關與してゐるので、實は多忙に追はれてゐる次第です。こうして同志と胸襟を開いて語り合ふことは喜びに堪えませんこれを機會に新たな精進を續けることに致します。」

こう云ふ結論に達して來るに、まるで眠れる獅子を起しに行つたやうなものだ來るべき新春に於ける氏の活躍を括目して待たう。(寫真カットは多聞君)

年寄は駄目

大久保 大夢子

記者 安西 杏三



「柳誌も川柳雜誌や番傘位續くさいのですが何うも水續きしませ

んね。假令發刊しても永い間には熱が無くなつて來るし經濟上にもつまつて來るのでせうね。句が集つても經濟上柳誌を維持して行くに云ふ事は中々困難なのでせう。某氏の如きも隨分金を使はれたや

うですがね。併し矢張り人の問題でせううんごす抜けた人が出て來ればよいのですがね。」

ゆつくり語られる大夢子さんも次第に熱して來られた。

「私のやうな年寄はもう駄目ですよ。何云つても若い人達には及びませんよ」謙遜されて居るが投句は毎月續けて居られる處を見るに何うして熱心なものだ餘り御邪魔してもご思つたので約三十分の後六時過ぎ辭して歸つた。

(寫真カットは大夢子君)

無産者の立場の句に

三條 東洋鬼

記者 出口 雨町

十二月十二日の夕、神戸榮町五丁目なる「ふあうすと川柳社」の三條東洋鬼氏の居を叩く。都合よく氏は御在宅とあつて、直ぐ二階の應接間に通され總べてが清楚な感じの中を藤椅子に落着く。

「句の新舊についてですか。そうですねに角私は新しいといふこと自体がすでに好きです。内容と表現に關しての新

しさについては色々異見もありませうが、所謂新酒を盛るには新甕が必要だと思ひます。謂ふ所の「新興川柳」について云へば、「川柳人」が比較的好きです。「氷原」のやうな高踏的なものはさうでなかなかア。私はやはり、無産者の立場の句に強きつけられます その意味で、

寫眞は東洋鬼君



貴方や町二さんの句を嬉しく拜見して居ます。貴方の方では原稿料の問題なきありませんか。一体雜誌社が先輩から原稿をいたゞいても頂戴出來ないやうなものがあつた場合なき、原稿料制度でしたら探否がしよいと思ひます。群小柳誌についての感想つてですか。さア最近さうも廣く眼を通して居ませんので何ともお答へ

出来ませんなア。番傘がいつも投句家の多い事を誇つてゐますが、むしろあれは好ましくない妥協じやないでしょうか」と大凡そ二時間餘に亘つて御熱心なお話を承まはりお宅を辭退した。

名句の洗禮

大石 文久

記者 福田山雨樓

大阪の支爾梅田驛から程近いA馬場でサーピス百パーセントの女給軍を尻目にかげら柳壇のスプリンター文久氏と逢ふ。尤もスプリンターと云つても陸上競技のそれではなくて、モボであり、江戸ツ子であり、努力家であり、運動家であるところの文久氏の全体から、僕の第六感に映じた姿であることを斷つておく。

氏は語る。

「僕は川柳に對して大變真まれた環境にある。こゝを感謝してゐます。句會に缺かさず出席の出来るこゝも職業の關係で家庭の理解に幸ひされてゐるわけです。結婚したのは二十二才のときでしたが、全く川柳に結婚したやうなもので、若しあのとき今の妻に結婚してゐなかつたならば

恐らくそれ限り川柳を止めてゐたであらうと思ひます。」

モボ文久氏がそんなに早く結婚されたことは少々面喰つた。(その實僕は氏より二年前に結婚してゐるのだが)

「われ／＼はまだ勉強時代ですから、うん／＼多作し多讀しなければならぬと思ひ

モボ百パーセントの文久君



ます。ま／＼迄も作句中心で進まねばならぬと念じてゐます。しかし句云へば八九年前の番傘には非常にいゝ句が多かつたやうに思ひます。抒情味を開かされた水府氏、寫生調を唱導された五葉氏なきの句には何時迄たつても教へらるゝものが少くありません。この間も水府氏の柿

の種の句に付て、塊人夢路氏に熱論を闘はしたのですが、水府氏があの永い柳壇生活に於て終始一貫その句風を變へられず、しかも、常に新しい美を發見して行かれるところに心から頭の下るのを覺えます。」

氏の水府禮讃は奥ゆかしい限りであつた。

句會の話になる。陸の織田海の高石だ「これから句會へ乗出さうと云ふ若い作家によく話すことなんですが、たゞ漫然と句會へ臨んだのでは到底いゝ句が出来るものではない。少くもその日の晝から名句の洗禮を受けて頭の準備をしてからねばならぬと思ひます。」

スプリンターは胸一つの争ひである氏が「古篇新酒」の見地から常によりよき句への精進を續けてゐられる點には敬服の外はない。

僕は幸ひ氏におない年であるから、柳壇的には僕の方が大分立ち遅れの新參ではあるが、これから先きまちらが長く川柳を續けるか、この熱に燃えた好敵手と一二年で競争をして見たいと思つてゐる。

近作柳樽

路郎選

毛が抜ける氷囊がけた頃思ふ
 禮云へば自信ありけに醫師笑ひ
 病みほけミ云はれ秤へのせられる
 いつそもう酒やめたらミ他人が云ひ
 洋服屋結局見舞云うて去に
 夫の氣妻の氣子の氣春近し
 尋六を出て苦學しやう術もなく
 エロに笑へぬ程の逼迫

女工思へらく

ダンサーになれば重役搾れさう
 紹介所やつこころへて來た寒さ
 父の咳今日から寒くなるしるし
 ウェトレス學士風情ミけなしたり
 出來合ひにきめて服屋をさびしう出
 他人の事だからあきれた振が出來

神戸志郎
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 豊橋 枯骨
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 愛知 巧笑
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 大阪 喜由
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同



有り餘る金

加藤文辭

紀文は今日も江戸町二丁目の大松屋で月見の宴を張つてゐる。松ヶ枝太夫はもとより寶井其角、幫間の二朱判吉兵衛其他大勢の藝者幫間が取り巻いてゐる。その宴席へ梯子の上り口にある板を放しすすり毀ち大きな饅頭を一の臺にのせて持つて來たものがある。これは紀文の友達からの贈りものであつた。並み居る連中は其の巨大なのに臍をつぶした。やつとのことで紀文の前へかづいで來た。大勢して饅頭を割つて見ると、其中から常の饅頭が澤山に現はれた。此の一個の大饅頭の爲めに費した代金は七十兩であつた。此饅頭を蒸す大釜は特別に拵らへたものである。諸道具、蒸籠の類まで新規に調達し、その夜俄かに持ち込む爲めに二階の上り口は、悉く板梁



チボも見のがしてくれたボーナスだ	薄情は領分だけの雪を割り	嬉曳が来そうにできて冬構え	獲物があるのか家鴨泳がす	袈裟かける身にありくミ刀痕	君それは本當かいミ慾を見せ	妾への執着病床を放すまじ	車夫そこを行つたり來たりして温め	唯一の見榮は子供に着せるだけ	衣すれの音が翼の音に似て	卒業に琴の花のミ日本式	地玉子の札を残して空家なり	よう獨りだつたミ思ふ失業者	言譯をせずに桃割ゆれるのみ	住み込みで夫婦が別に働いて	親類ミ親類僕の事でもめ	腰掛のつもりでゐるたに養子ミは	許婚雲の動きを遅しミ見	意味もなき笑ひを赤兒から奪ひ	永病のいまだつてまだ愛してる	
大和	同	同	金澤	同	同	大阪	同	同	金澤	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
勝二	同	同	白雨	同	同	卯三	同	同	木偶人	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

を毀ち、即時大工數十人でその跡を修繕させ
た。

紀文はその返禮とあつて彼の友達の昵妓京
町藤屋のあづまの許へ蒔繪の小畫一匣を取
出してあづまに贈つた。あづまが此小匣を開
いて見るとその中から豆蟹が數百四方へ這
出した。その豆蟹の甲羅には女郎と客との定
紋が比翼形に畫いてあつた。この蒔繪こそ當
時名代の梶川だつた。紀文は零落しても豪奢
の風を忘れなかつた。すなはち其の下駄の鼻
緒を切らして困つてゐると通りかゝつた
髮結床の男がこれを直して呉れたといふの
で紀文は知る邊から合力して貰つたばかり
一兩を秋から出してその男に與へてやつた

感想 二つ

出口 雨 町

天満橋の京阪前から南へ昇つて行く坂で
ある。それが又とてもひどい泥道だつたので
折から通りかゝる圓タクを避けるべく跳び
退いた時、私は懐にしておいた原稿や川柳雜誌
の校正刷をバラ／＼と落してしまつた。そ
うした私とは没交渉に——自轉車が走る、人
々が行き交ふ、風が吹く、小學校の女生徒が
通りかゝる。——私が泥／＼糞した校正刷を拾



葉書一枚着いたさだけで縁が切れ
ネクタイへふさ首くくる日を思ひ
死んだ眞似したまゝ蜘蛛は殺された
赤い屋根彼さ彼女 玩具箱
聴診器心もそつこ盗ませる
折詰 は妻 禮服の疊み賃
折詰を孝行らしく迎へに出
金ほしい爲めの根氣を褒めて呉れ
渡初め以前に渡つた事も聞き
減給さ 反對に酒うまくなり

霧社蕃暴動記事を見て

蕃人の自滅評議もあはれなり
そひさけてお呉れお呉れ秋の夜
ネオン燈廻れば暗い僕の家
巢をしてもよいけご雀借家だよ
落ぶれてお経のうまい父さ棲み
御近所を集め十六ミリの夜
錢無しの眼へ鯛焼屋湯氣をたて
一割はごくぢやご女使者に立て
米を磨ぐ妻に聲かけ先に寝る

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

ひ上げてゐると、二人の小さい彼女も手傳つて呉れた。その時この光景を腫物のやうにして通り過ぎたのは大手前の女學生だつた。それから私は歩き乍ら自問した。「何が彼女をさうさせたか？」と。そして私は自答した「それは現代の教育制度ではないか」と。

○

南海線の岸の里で下車して不朽洞へ行く途中、すい分せまい路次があるが、もと／＼これは通路ではなかつたのが、つい近くて便利なものだから、誰が通るともなくいつしか道にしてしまつた。或る夜のこと、私とすれ違ひに通つた夫婦らしいカツアルのつぶやきを耳にした。「こゝに一つ電燈があつたらよいのんなア」「ほんまになア暗うて足元わからへんわ」と。

そこを通り抜けた時私はそうした話を何故か聞き捨て難いものに思へた。そうだ。始めに行動があり、然る後に思想があつた。

モダン徒然草

尾崎海洋人

何にしるドンと突きあたれたんである。今先き飲んだピチアフェルミンが腸の中でクルクルと三四回廻轉した程……。



米俵輕々持てゝまだ嫁かす
まゝごごに女の方の大膽な
嬉しさご一緒に羽織脱いでゐる
戀の灯ミ淨土の灯ミを並べたり
親切な夫に女飽いてくる
祖母の居間無氣味に通る午前二時
漸くに女晴々しく笑ひ
完全に處女の誇をもつて逝き
細工して心の底を見られたり
その話俺の産れぬさきのこ
戀はかく悲しきものよ京人形
大晦日家主の頭撲りたし
チャルメラが聞ゆる秋を獨り居る
真中に坐れば家財一目なる
見榮を飾つて錢をさられた
むせかへる都の塵を吸ひ生きて
新妻の鍋を下した火が遊び
交際家ある日の妻の淋しまれ
威信上なき云つたがあの暮し
亦倅家出したなき平氣なり

長野 有爲郎
同 同
堺 荻郎
同 同
大阪 さだを
同 同
郡山 右月
同 同
大阪 夕鐘
同 同
京都 無冠王
同 同
大阪 四五磨
同 同
松本 らつば
同 同
朝鮮 如空
同 同
大阪 柱枝
同 同

「ヤイ、ジンギをしろい」僕は其のポルトゾ
インの廣告の様な顔をして居る男に怒鳴つ
たのである。僕は今先ツき聞いて来たジンギ
なるものを振廻したのであるが……

「カヤツ 僕は貧血しそになつた。男の顔が
仁丹の小粒に成つたり、關東煮のコンニャク
になつたり、プア、タマラン……だが男は
喋々と語るのである。

「おひかへなすつて、おくんねエせえまし、
親方さんが、お身内さんが存じやせんが、御
言葉に甘えまして屋根棟三寸 お貸しなすつ
ておくんせえまし。あつしや關東の者で御
座んす、關東、關東と云ひましても廣ふござ
んす、關東はお江戸でござんす、江戸と言ふ
ても廣ふござんす、江戸は八百八町、火の見
櫓も八百八本。親分さんと言ひやア他にやご
ざんせん×××の身内で×××と云ふシ
が……ネイ野郎でござんし、おひかへなさんし
……」

「プア」と僕は今度こそ眞に貧血してし
まつたのであるが、後でなぐられた此頭を、
押へて言ふことにや

「滅多に歩るくもンぢやれい」



外人が微笑んで行く子守唄
今日も亦フライのにはひ靴をぬぎ
金故に心にもない嘘をつき
質屋から冷たい金を握つて來

母なき家

蚤ひこつ飛んだでみな騒ぎやう
父も寝てる弟へ柿を握らせる
身の上をきいてやるのにおごらされ
滿洲の夕陽へ牛車拂らす
容れられぬ秀才も居る安カフエー
結極は叱られに來た里の母
分別が他人の戀を微笑しぬ
戀しかりし人に會ひそな道へ出た
親類を恨んで金を貯めてゐる
手を借つてまでも二人を裂かんさす
爭議團何んにも知らぬのも混り
失業のこのごろ子供よくなつき
許すゆるさぬさてお互に生き
版古も履歴書も秋雨に打たれ
大奉仕特價ばかりの百貨店

氣毒な病人の話

中野 裸人

靜かな芝居に男の靴と分の厚いなめやかしいフェルトとがぬいであつた。

その赤い鼻緒のフェルトにちつと見惚れてゐた出前持は一吋手をふれて見たが、誰も居ないので兩方の足をのせてみた。非常に氣持ちがよかつた。

二三歩あるいて見た。

彼の心臓はぎき／＼した。足がわな／＼とふるえた。彼は何もかも忘れた。

それから彼は自分の下駄にはきかへて咳拂ひを一つすると、「今日は」と大きな聲でぞ鳴つた。

B

往來の方の窓を開けて私は外を見た。荒い横島のモスを着た女が二人西の方から來る一人は桃割れ、二人は耳かくし、どう見てもまた二十歳を越して居ない。

ぶら／＼と遊び半分歩いて居ると、夏の薄着をすかしてうか／＼はれる、はち切れきうな肉付きとが彼のたましひをうばつた。

彼は我を忘れ、女が見えなくなるまでじつ



エロありて女給らしくも見へてゐる
 婦女界の通りに出来て不味いパン
 休職に其存在を忘れられ
 兄弟の生れ故郷が皆違ひ
 茸山にたれが落した赤い紐
 挨拶のはや丁寧が他人じみ
 錢よんで居る間本當の顔で居る
 大阪の廣さも母は知らず住み
 借りに来て鯛の匂ふ茶をよばれ
 耳つゝむ二人語らず北が吹き
 燈明へ人に來られて黙禱す
 卒業へ嫁入箆筒買うてやり
 氣が變りねすみも猫も可愛ゆくて
 お母さんこゝは夫の勧め先
 就職の今朝を出て行く靴のつや
 バスガール憐れ師走の風邪をひき
 バイブルに戀をせよこは書いてなし
 失業の眼に二人連氣樂さう
 ラツシユアワー皆緊縮の顔ばかり
 疑へば雪の白さも疑はれ

同 鳥取 同 青水
 同 大阪 同 あきら
 同 明石 同 了念
 同 大阪 同 失名
 同 奉天 同 登美坊
 同 神戸 同 可村
 同 大阪 同 日々城
 同 神戸 同 三霞
 同 大阪 同 英郎
 同 神戸 同 不然

と見て居た。それから彼はぶらりと外へ出た
 ふと目をやれば南の辻を曲つた電柱のかた
 はらに二人の若者が立つて一人がボン／＼
 と手をならしたので振り返つて見ると、さつき
 の女が笑ひ乍ら男の方へ走つて行つた。彼は
 もうたまらなくなつたので見向きもせず早
 足に歩き出したが彼は結局強烈なアルコー
 ルの御厄介になつてしまつた。

「ズボンの穴」

高峰 柳 兒

「みんな集れ」班長の聲に晝の食事が終つ
 たばかりの初年兵、入營より約一ヶ月過ぎ
 た或る日の班内のことだ。みんな班長を中心
 に輪に圍んだ「みんな見る」班長の端には同
 輩のテーが居る「テーのズボンの修理した手
 ざわを見る、この様に見たところをよくやらね
 ばいけない」班長の聲にテーのズボンを見る
 と膝のこの穴が上手に縫つてある、テーは
 得意然として居る、膝のふくらんだこの穴
 は仲々仕難なのだがテーは穿いたまゝツギ
 を當てたのが褒められる原因だつた、斯くし
 て夜になり、點呼用意、點呼、消燈等の喇叭が
 次ぎ次ぎと鳴つた、毛布にもぐり込まんとし
 たテーのズボンは膝から下へはごうしても



養女まだ何にも知らず塗つてゐる
 雨に怯え風に怯えて施療院
 夕刊賣これが子供の生活か
 姿見へ五人の母さなり了り
 目薬をさして敲首おそれたり
 生傷の絶えぬ土工の息づかひ
 日曜は床の氣笛も親しまれ
 戀すれば及川道子にも似たり
 無産黨收支が餘りハツキリし
 美容院尖端さいふ顔にする
 銀行へステッキボーイ待たされる
 提灯で見るミコホロギもなくなり
 今朝の素直さそつと告げたし
 繪にもなき野風呂の父の月明り
 沖へ出る舟弟は病んでる
 口でこそ言はねぎ女惑してる
 大根は干からぶ戀は熱しきる
 時計よお前は根氣よく生きてゐる
 聲の小さきこども女は快く
 紅燈よお前自覺を何時捨てだ

同 登ヶ池 同 愚 寵
 同 姫島 同 二 竹
 同 吳 同 落 葉
 同 神 同 浪 人 街
 同 島 同 天 痴 人
 同 三 島 同 素 萌
 大 阪 山 茶 花
 島 根 專 路
 大 阪 海 洋 人
 愛 媛 英 賀 夫
 大 阪 捨 男
 京 都 鐵 漿
 大 阪 し ぐ れ
 東 京 桐 郎

脱げなかつた。ズボン下まで妙に引つる様だつた。

晝間寝められたズボンの縫方がズボン下まで縫付けてしまつたのである。

日向ぼこ

阿部 閑生

正月が来ても正月らしくない味氣なきの中に、雑煮を食はうとする間際にまのあたり想ひ起すことが一つある。

赤ん坊の時、自分よりも肥立ちのよい姪のために、掌で片方の乳房を押へてゐて、片方の乳首に吸ひついて追つつかず母乳の半分を奪はれて、餅のそつぷで其の不足を補はれたといふ。何でもないが自分には極めて可憐味のある一事で、その所爲か今も海苔捲きにしても、あべかはにしても、餅は一段と好物ではあるが、特に雑煮の餅を鼻の先までもつて来た時に、この追憶はよみがへるのである。

◇

最も興味の深い指導文字として眞先に讀まれた「月評」が本誌から消え去るといふ豫告は、讀者の胸へ可なり淋しい響きを傳へたに違ひない、共選の結果に見ても、一句の玩



きしや降りに断りきれぬ合傘ぞ
 肺を病む身を金が見限る
 塵紙の端へ女工の戀なりき
 剃刀ののこほれ齒に似た學士なり
 花瓶廻せば心が廻る
 大和路は鐘から明けて鐘に暮れ
 不景氣に五千もやつてふられざる
 一人子へ貝元氣なれ元氣なれ
 兎に角も大きな拂ひから待たせ
 時雨るればレヨンの帶氣にかゝり
 金持へ金で濟まない事が出来
 獨り寝の蒲團に夢の多く住み
 やんちやするだけさして居る妻の留守
 すけなくも車掌發車の笛を吹き
 草の實がオーバについて土境をゆき
 あきらめておれぞ見舞は力付け
 叩かせて呉れるお客が来て欲しい
 これからが大事親方猪口をくれ
 薬焚く香寢床の中へ忍びより
 手に餘る若さの洗ひ髪を見る

大阪 童史
 神戸 桃水
 大阪 村樂
 石川 矢咲
 大阪 繁坊
 松山 立々子
 大阪 吼城
 鳥取 耕民
 大阪 碧水
 紀伊 於菟彦
 大阪 菊路
 東京 音吉
 大阪 黒天子
 東京 氷村
 大阪 白柳子
 釜ヶ池 芳秋
 愛知 文醉
 犬山 練屋丁
 大阪 柳次
 福島 狂水

味描出にさへ甚しい懸け離れがあるのから
 川柳の眞の吟味方と進むべき方向をぬめる
 にも「月評」は良い乗であつたのに。

新春川柳會

昭和六年初頭の句會を華々しく開きます
 主幹の講演と共に有意義な一夜を過す事
 が出来る存じます。川柳家はもごより
 川柳を始め作つてみようといふ方々も
 振て御越し下さるやうお待ちします。

日時 一月六日午後六時半
 會場 大阪市南區日本一丁目

交文點北辻東入

日本橋俱樂部

電話南三四二四番

兼題 「初夢」三句 路郎 選

講演 ああ川柳 麻生路郎

會費 金 參拾錢

記念撮影。出席者には肉筆の短冊一葉

宛進呈致します。

歩みつゝ (其三)

水谷 鮎美

結果はどうであらうともその時採つた方
 法はその時としては撰んだ最善の方法であ
 つたのに違ひないそれなのに當初を顧みず
 に結果ばかりを悲觀するのはほんとうの自
 分に生きられない人だ

こんな事を繰返してゐては生涯自分と言
 ふものを見出せないにんげんではある……
 と腕組をして街を歩みつゝおもふた。



ばらの赤さに戀を語らん
 萬引のさほぎ貧苦にあらざりき
 箆笥まで娘わざ／＼泣きに行き
 催促が入かはり來て日が暮れて
 資本家に爭議の夢がつきまごひ
 星も月もないしつこりさ重い下駄
 催促をせぬ氣で貸して内が揉め
 秋風よお前も妾捨てるのか
 喰はむが爲が犬に吠えられ
 賽錢を打つちやるやうに上げて去に
 悲しさも笑顔ですます東西屋
 逃げのびた二人の戀を祈るのみ
 損したが最後相場表も見す
 六尺の懸崖があり病あり
 正月が女給をいつそ悲しませ
 樂屋裏無慘に花輪積んであり
 疑獄まで生んで成金にもなれず
 默讀の俺にちんぎんやが響き
 プロペラの音ばつかりへぐちを云ひ
 末席へ酌が廻れば堅いこも
 留守にして居るさは見えぬ貴名受

大阪 鶴ノ莊 普天
 大阪 憲坊
 鳥取 源太夫
 大阪 沐天
 三重 花子
 大阪 涼哉
 島根 かず子
 大阪 無鬼
 名古屋 草石
 大坂 詩郎
 島根 紫光
 大阪 山月
 大坂 山月
 神戸 碎曉
 大坂 影人
 京都 丁路
 京野 可醉
 鳥取 暢山
 大坂 丸葉
 同 秀葉
 同 狂雨

サラリーマンロード(二)

楊井二南

阪急前：私等の最も親愛なるロケット式
 交通整理者ミスター、タナカは風邪でもひいたのか近頃はそ
 の勇姿を見せません。代りか
 りボスマンは何れも「ひげ」のあるおつかな
 い小父さんですが、何となく物足りない感じ
 があります。「ひげ」はなくともパスを蹴飛ばす
 和製パンクロフト、ミスター、タナカもて
 欲しいものです。

ひげで思ひ出しましたが、こんな事件があ
 ります。銀貨の歸りでした。聞くもなつかし
 い灯し鎮です。車道に一團の群集が、あまたし
 多分に好奇的な私は勿論その野次馬の一人
 になりました。紳士が倒れてゐるので、す
 ひげのあるまがふかたなき紳士であります。
 電車か自動車に觸れたのかも知れませんが、一
 言も發し得ないので、すから病氣であるかも
 知れませんが、兎に角氣の毒な姿でありました。
 群集の中に二人のみめ麗はしきサラリー、カ
 ルがありました。彼女等の好奇心は實に私
 以上であつたらしいので、其の一人は遂に果
 斷にも背廣連の中へ割り込みました。彼女の
 瞳にこの哀れなる紳士の姿が、どう映つたて
 せう。彼女は直ちに今一人の彼女を顧みて囁
 きました。
 「ひげを生やした大きな男やは」
 アラス川何と云ふ淺ましい發音よ。その顔
 その唇がかつた所でありませう。私の豫想
 し得なかつた所でありませう。
 サラリーマンロードを北へ行く彼女達へ
 神よひげなき夫を垂れ賜へ……と私はその
 時祈つてやりました。



川柳
時評

難解を吃る

松丘町 二

或る男が嘗て歌つた詩みたいなものがある。少々長いが再録してみやう。

古川柳の流れ、そしてそのせまらぎの音は

私の故郷の色であり、聲である

それはしみんとつかしく、老年のしづけさと安けさを持つ

けれども私の心は何故か満たれない

私は火のやうな「詩」への戦ひと、そして勝利が必要になつてきた

このふるさととは私の住むところではなかつた

前へ！

愚かしい過去はみな古川柳の水底へ沈めやうか

そして進軍を始めやう

私にはもう今までのやうなもの諍かな心のふるさととはなくなつた

のだ

何の執着もなく離れやう

それは寂しくは思つても、決して悲しみはない。決して――

たとへ可憐な喇叭卒に終らうとも

新しき川柳へ！

明日の川柳へ!!!

過去の私と、ふるさとの川柳とをめぐつて燃え、そして消えて行

つた幾つかの友情へも
私はなつかしく手を振らう
さようなら、古川柳よ

その流れよ

さて古川柳を詩の立場から研究したこの男は云ふ。我々の藝術的良心と詩的精神は、既に古句に學ぶ何物をも残さない筈だ。ましてその糟粕を嘗むる如き眞似は見つこもなくて出来た義理ではない。こ。

それは兎に角として、川柳作家が作家である前に、先づ古句の研究をするのは當然のことであつて、恐らく何人にも、初代川柳選吳陵軒可有編の柳樽を一度や二度讀まぬものはないであらう。更に狂句の實體を知るために天保頃の句を一見するの結構である。併し巖に畏友杏三君が主張した通り、餘りに穿鑿的な研究は、その道の學者や特志の研究家に任せておいてよろしからう。そして我々はその人々の研鑽に成る著述をひもこくここに依つて、川柳作家としてのその方面の常識を養ひ、修

養の糧として行けば、結構と思ふ。この場合には狂句も亦當時の通俗資料として甚だ貴重な役割を演ずること勿論である。

柳樽廿四編遶りまで、特に初編から四五編位までは、名句の鈴なりで、これらを味讀してゆけば、滑稽、穿ち、軽味さいつた所謂古川柳の三大要素は素より、現代のあらゆる既成本格川柳（この名稱に對し私はおさなしく番傘の主張に従はう）の持つ内容が、その表現手法と共に遺憾なく展開されるのである。

もつこも初編にも「役人の子はにぎく」をよく覚え「こいつた狂句も混仕してゐるし、わけのわからぬ駄句も在る。亦當時の時世から云つて當然のこゝ乍ら、江戸詩人は鋭い社會批評のメスも揮はねば、當時の特權支配階級だつた武士に對する階級的反抗の歌も歌つてゐない。もつこも淫黄裏、新五左の名にかく

れて、田舎武士を擲擲冷笑してはゐるが、又居候や下女を輕侮したと同じ筆法で浪人者を嘲罵し皮肉つてはゐるが、それ以外少数の武士に關する句は、俳傳や末番の句なきも共に、寛政改革の際に削除を命ぜられて發表禁止となつた。その禁止に逢うた句をみて、何等の尖鋭さもない多愛ないものである。只當時の江戸人の鋭さ冷たさの半面を、餘すところなく示してゐるのは「未摘花」四卷であらう。これは近頃流行の新しい作家のものするエロミドロミのナンセンス的暴露小説なきより、

されば織細で深刻でヴィヴィッドであることか。

山雨樓氏は「主觀句の研究」なる論文の後段に「心のふるさこ（筆者註、こゝでは柳樽を指す）はいこもにこやかな慈

愛の笑みを湛へて、われ等をその懐の中へ呼び入れて呉れずにはおかない。全くふるさこは招くのだ。この慈愛の前には一

たまりもなく、總てをかなぐり捨て、飛込ますには居られない……恰度夏の子供が眞ツ裸になつて海へ飛び込むやうに……しかも心のふるさこへ歸る心持は、決して都會から敗殘の破れ衣で故郷へ落ち延びる淋しさではなくて、楽しき夏休みの一月餘を父母の膝下へ、郷土の山河へ呼びかける軽い明るい喜びの姿である」云々を述べてゐられるが至言である。

しかしながらそれは何處までも心のふるさこを振り返るのであり、暖い（こ我々は信じてきた）懐を求めて歸省するのであつて、それがよかれあしかれ川柳の（従つて我々にまつては心の）ふるさこであるがための回顧であり、一時的休養のための歸心であつて、云ふまでもなく我々が素裸になつて飛へまねばならぬのは、ふるさこなる柳樽ではなくて、明日への川柳であらねばならぬ。勿論我が山雨樓氏も、この第一線に立つ我らの同志であるのだ。

諸君は古句を詩として分析し検討し批判しつくせば、遂に古句の住む柳樽は、嘔みしめた甘さを否定はしないが、さうしてもヴィイタミンの抜けた干物の味であることに氣付いてゐるであらう。

さらば我々の川柳は——實を云へば、時間空間三人事この諸相流轉の姿を、藝術として再現し物語るには、川柳は餘りに型が小さ過ぎるのだ。この小さい容器へ我々の盛らうとする詩

三三三

の泉は、餘りに豊富すぎるのだ。そこに無理が行き易い。この無理を征伏して生れ出づる惱みを惱む川柳の、そこに尊さこそ詩が約束されるのだ。而も人間こそその周囲のみを見つめてきた川柳が、單に人事の皮相を器用にまこめて、一般大衆からその器用さを喝采されて足るものならば、何ぞ川柳を作るさいふこそは、馬鹿けた努力ではないか。何が皮相だ。この句を見よ。これは一篇の小説、一幕の劇にも相當する内容を持つてゐるのだそれが解らないのは要するに君の感受性が……なきよ云つてみたところで、多くの場合作者の自惚が描く獨りよがりの幻想に過ぎない。例へばこんな句がある。

我を折れと母からの文さつが出る

選者はこれに最大級の讃辭を寄せて、一幕物の力を持つて云つた。併しこんな内容の芝居では、今時の觀衆はてんから寄りつかないのだ。こんなことなら自然界の萬象へ對して、作者の主觀を通して、生命の息吹を宿らせ、言葉の持つ最短詩に創造せんとする俳句の方が、遙かに藝術的なやり甲斐のある仕事ではないか。さいふこそになる。それでいゝのか？……いや／＼我々は我々の立場から、この自然を觀察しやう。改めて人生を見直さう。妾宅のチンが啼いて、當然のやうに弟は借りに來るし、新妻の料理はいつも活字のやうで、太つちよが無事に段梯子を下りましたやうな川柳や、蹴さばされた太陽が涙線に飛び込み、雨がさら／＼と何やらを清算し、餘剩價值がイデオロギミに墮落した式のウルトラ川柳は、いゝ加減願ひ下けにしたい

ものだ。

いさゝか道草が過ぎた。私は私の表題を語るために「川柳雜誌」第七卷から次の諸句を抜き出して認めねばならない。

あるじ寝てゐる朝の藁灰
 鐘の音よ焰のいるよ寒む寒むと
 おい澄める水よ懺悔の髪解かん
 さて戀の絶頂にあるといふさみしさ
 喜劇役者の不機嫌な空だ
 燃え盛る焰一つは色を持つつ
 怒りわが身にもつるゆうつ
 をんなみたれと女らはさげすみぬ
 土に石埋めんとして興がるよ
 青疊の上には俺の夜具だけだ
 弟よ屋根に花まで咲いてゐる
 低能の子の寂しさよ曇る空
 むつつりと怒つた顔も淋しいが
 朝顔の種ばつかりへ犬の喧嘩
 一生をまかす垣根は倒れてゐ
 清水 あふれて鳥のぬぬ山
 早引へしたしみのある阪の土
 ぬら／＼と黄昏れ終へる施療院
 赤くなりきれぬ我なり錦魚浮く
 死んだある若き大工へ

久 那
 帆 郎
 無 なる
 花 情
 春 夫
 山 門
 好 次
 花 情
 八 歩
 海 人
 巨 洋
 無 冠
 好 次
 英 賀
 黒 天
 旭 虹
 九 葉
 砂 城
 愚 寵
 紫 光

お前のかんな屠が舞うてるぞ
 凡そ解り易い名文なんでもものは存在しない如く、餘すところなく説明しつくせるやうな、換言すればいさゝかの陰翳さへ持たぬ名句も亦存在しない。卑近な例だが景色でも食物でも天下に絶唱せられるものには、筆舌に盡さない佳さがある。繪畫、彫刻、音楽等例外なく、勝れたものは難解である。それらを理

解するためには、常にそれ相當の教養を必要とする。大衆文藝や講談でさへ、滋味や深みを持つものは、難解とは云はないまでも、俗耳には敬遠され勝ちだ。成程川柳は、敢て俳句の如く或種の修養を積んだ者のみを對手とする文學だ、なご一見榮は切らない。民衆詩として、その獨自性を許される川柳は、大衆が味方であることに間違はないのだ。但し我々の目標とする大衆は、現代新日本の生活を生活する教養ある大衆を指す。

創作懸賞川柳

第二回募集の言葉

川柳の社會化運動を徹底させるため、本社は曩に創作獎勵の名に於て弘く社會より、より真き作家の、より真き作品を募集したところが別項發表の如く、多數の秀句佳吟を蒐め得たので更にその第二回を募集することにした。奮つて應募せられんことを切望する。

課題「靴下」

選者 麻生路郎氏

句は難解なるのだ。川柳が難解な表現を持つといふことは、詩として藝術として當然のことで、川柳の社會進出にも亦何等の支障がないばかりか却つて大きな力となるのだ。早まつてはいけない。繰返す通り我々の云ふ今日の大衆は、川柳作家と同等の、或はそれ以上の人間の教養を持つてゐる筈だ。この大衆に對つて、いつまでも落語のさげのやうな川柳をつきつけてゐるれば、投げ返されるも

のは輕蔑以外の何物でもない。唯我々が彼等の大衆より優れてゐるのは、その詩的感性こそその現力にあるのだ、小説や戯曲やせめて長詩なら、うはべだけでも比較的わかり易い表現を持つて、讀者に迫ることが出来るが、僅か十七音字の川柳だ。極度に選ばれた條件のみが寄つて生れ出る姿が、難解であるのは亦己むを得ない。

賞

- 一等 貯蓄債券 (拾圓券) 一名
- 二等 同川柳雜誌 (壹年分) 三名
- 三等 川柳雜誌 (壹年分) 三名

句數

「二枚句五以内(但一人にて幾枚投ずるも可)」

用紙

「川柳雜誌」新春號より每號添附の投句用紙に限る

締切

昭和六年三月五日限

發表

昭和六年四月號(四月一日發行)誌上

投句所

大阪市住吉區杭全町六〇三
川柳雜誌社内
創作獎勵懸賞川柳係宛

このまで来て氣のついたことだが、私は今更、私がこゝに用ゐてゐる難解といふ言葉の定義を示さねばならぬだらうか。難解か否かは句の持つ陰翳の多寡に因る。素より句を構成する言葉の晦澁さや素材の珍奇さや、表現の奇矯さを云つてゐるのではない。路郎師の説かる鈍角の句、これは表面淡々たる姿をこつてゐて、その陰翳が縹渺してゐるため、鈍角の句に比して一層難解であるとも云へるのだ。今茲に例として挙げた二十句、その悉くが佳句であるとは云はないが、皆それ／＼に特異なスタイルの内容さを持つて迫るものがある。そこに深ふ陰翳を掴め、朗然たる響を聴け(四八頁の下段へ)

支部の聲

天王寺支部から

丸山 公二

尖銳會當時から物質に雑務に猷身的努力を以て天王寺支部を今日あらしめた豆萩氏と幹事一年制により交替することになりました。川柳をやめよと云ふ肉親をバツクに營業不振の折柄はたして君の足跡を踏むことが出来るかどうかと多少の不安もありませんが、佛法最初の四天王寺近くに拓かれた柳道を我々支部同人等が、たゆみなく開拓して行く抱負こそ我々の持つ大きな喜びなのでありますから、出来得る限り盡す心算です。創立以來御援助を蒙りました先輩及び同好の諸氏に、此際厚く御禮申し上げると共に今後とも倍舊御後援賜はらん事を御願ひします

梅田支部便り

川村 観月 報

毎月一回小集會を開きたいのですが、勤務の都合上やむを得ず實行することが出来ないので、たへず高橋かほる、朝田新水兩氏に選句の勞を煩してゐます。例會句會が出来な



粒々集

○ 朝鮮 蛭子省二

引込線の雀をみる山は眞ッ白
資本家のポケットに餅まきの餅
香水買つて暮の福引をあてる
三晩留守居させられ香水をかぐ
犬を愛す
喧嘩好きの犬に屈辱のない暮

○ 東京 近藤飴ン坊

ねだられる儘にポーナス面白し
盗電に師走の餘日竭きんミス
社頭雪
初詣吾れ魁の雪を蹈む

餌を思ふ鳩に社頭の雪は明け

○ 悼 蘆村翁

出島浮島蘆の芽は新たななる

○ 金澤

安川久流美

冬の陽にこわれた玩具ばかりなり
粟漬のこはだに麥酒なら呑むよ
慌てるならば價値のない地位
この筋が親に別れるふしあはせ
ならば来て見よ文身はなし
米屋だけに笑顔見せて置かう

○ 松山

前田五健

騙された顔で使へ行く舞妓

拍手へ雪が應へる朝の宮元日だ泣くな云ふに女の子あき方の神にも母の好き嫌ひ十八の後ろ姿で縫ひ續けかき船を出てコレハ雪

大連 大島 壽明

爽やかな朝を米飯透きこほり只平和ばかりで此の世暮らされずクリスチャン自分の過去に恥ばかり醫藥より遙かに安い酒の代

神戶 相元 紋太

又一人蒲團の数が殖えた年喧嘩もするがキャラメルも分けて蝮蠶を恐れぬ蝮の連れが殖え手拭石鹼大人の手は大きい隣りへも聴え夫もしても耻ぢ松の上に松あり檜ありてよし

大連 佐々木 三福

霜月の尖つた月に手を組みて

醉覺の水に浮世を嘯みしめる寒風に追はれくゝて四十一一陣の風にまつはる謀反心風塵の中を文明縦に伸び

御影 長崎 柳秀

うたてさはをのが姿を子に見つめ書風呂に一人はよし浪花節外遊へかはる風士を諱く云ひ家中をすね者にする病み續け床あけに子供もなにか持たがり方針を大凡そきめて酒にするレーニンを慕ひ乞食で身を終り晚鐘に襟を合はせる失業者詰問の初手は刑事に聲優しされるなら取れ石屋は軒に置き爪を剪る今宵の妻のなまめかし花嫁の灯には眩しい物ばかり夫婦別あり一家静かなり子が出来てからの養子に癖があり間抜けには口が締らぬやうに出来

くとも作句には精進してゐます。一名阪神黨と呼ばれてゐます。そのグループの人々を一才紹介します。

鮎美 阪神電鐵運輸課に勤務。雨と風呂が好きなので有馬を戀しがつてゐます。それから毎日必ず川柳と演藝の話をしてゐます。

觀月 同課に勤務。いつも黙々としてゐます。時々十錢の萬歳に足を向けます。

ト居 同課に勤務。似顔を書くことが巧みです。よく笑ひよく話します。百姓のことなら何んでも知つてゐます。

冷笑 同課に勤務。この川柳をすつと留守にしてゐます。復活を祈つてゐます。方眠 時折柳樞に名句を發表してゐます。猶一層活躍を祈ります。

鳴玉 魚釣りと野球の選手(二壘守)です。まさる 新人です。この上の向上を希つてゐます。

石竹 退社後阪急沿線豊中の自宅に閑日月を送り川柳に精進してゐます。夕鐘 化粧品店の番頭さんです。

里十九 皆さんご承知のカナメ喫茶店の主かほるさんと共に川柳演藝部の大名題です。



支那の元旦

— 傳説から来た諸行事 —

大 島 濤 明

桃 符

支那の正月氣分を最も濃厚に吾々に味はすものは、桃符三春聯である。桃符はもこ邪氣を拂ひ、惡鬼を防ぐ爲めに桃の枝を門に掛ける習慣が有つたが、年代を經るに従つて之に代ふるに紙に咒の様な文字を書いて之を門に貼る様になつて、遂には一種の鎮守府も見做さるゝ様になつたといふ。そうして其の鎮守府がだん／＼に粧飾的に用ひられるやうになり、色々美しい文字を選び、六朝時代の頃から美辭麗句を連ねた對句を喜ぶの風を生じ、遂に今日のやうな對聯なるものを生んだのである。しかし南支那に行くに、今でも田舎の方では桃の枝を門の上の横木に一本懸けておく習慣が残つてゐる、何にしても桃は支那人には有難いものにされてゐるやうである。

桃符は門柱によつて一定しないが、大抵巾六、七寸、長さ五

六尺の板で作られ、左右の門柱に一對して掛けるもので、板を四段位に仕切つて上に龍と虎とを相對せしめ、次ぎに文武の官吏の繪が相對し、三番目には桃と柳とが對し、一番下の段に平升三級の圖が何れも彩色を以て書いてあるのが多い、板製の桃符は官署とか大家に用ひられ、庶民の家では歡樂紙といつて紙製のものを貼り付けるのである。

△惡神は桃符を褒めて引下り
△桃符まで來ると鬼神は左様なら

春 聯

春聯は對聯ともいふ、正月を祝ふ爲め門の兩側や、入口などに貼る赤い紙にめでたい文句を書いたのがそれである、十二月に入ると文人墨客乃至村夫子先生達ちが之を書いて酒筆料を得る、一年中の書き入れ時が始まる。今では段々とこんな趣味ある商賣は減つて仕舞つて、商人の手で賣買されるのが多く成つて來たが、併し田舎の方ではやはり墨客連中が一管の筆を携へて旅稼ぎに歩くのもまゝ

ある。

紙の色は民間では凡て赤色である。しかし愛に當つて喪に籠る間は重孝に白、輕孝には藍色を用ひ、寺院道觀では大凡そ黄色の紙を用ひる。前清時代の内廷及宗室王公等の邸では、白紙に紅色や藍色で縁取りしたものをを用ひることになつてゐて、民間ではそれを使用することを許されなかつた。

春聯も貼り場所によつていろいろの名稱がある、門心、樞對、橫披、抱柱、春條、斗方などである。

支那の家では室内の炕に對して、土間の壁に沿ふて机が据ゑられてゐる、其の机の寄せてある壁の上に、長さ三尺計りの聯が一枚懸けられ「宣入新春事遂心」とか「合家以聯天下泰平」とかいふ様な文句が書かれてゐるのが、春條といふ春聯である。春聯の文句は一般の家では、宣入新年、財發萬金、一順百順、合家歡樂、大吉大利」とか「一門五福、五福臨門」などで、官衙、豪家では又文句が異つてゐるしかし何れは縁起を喜び、利財を齎すやうな文句に外ならない。

△春聯は幸運ばかり來る如し

福

正月の準備として春聯を貼るに同時に、軒といはず、戸といはず、馬車の前板や、荷車の上までも、所嫌はず四角な赤い紙を斜に貼つて「福」といふ字を書いてゐるのが誰の眼にも付くそれについての傳説に

今から五百年程前、明の太祖が天下を取つた當時、南京地方では妙な謎を掛けてそれを解く事が流行した。或る飄輕者が居て意味有つてしたこゝかごうかは知らぬが、大きな足の持主である女が跣足のままで、腕に大きな西瓜を抱いて居る繪を門に貼り付けた、するに其の意匠が飛び抜けて面白かつたこと見えて

大流行に成つた。或る年の正月十四日、世は元宵節のぞよめきに浮き立つて、われ人共に自慢の燈籠に火を點して興がる中を太祖は假裝して僅かの供を召し連れて、私かに市中の賑ひにまきれ込んで、昔あばれ廻つた市中の有様のなつかしく、ぶらり〜に見物に餘念も無かつた。ふぎ前に言つた跣足女の西瓜を抱いてゐる繪が眼に留まつた。代々宮中の奥深く育つた人ではない太祖は、世俗の事には随分明るい、おもしろい意匠だなご思つて、其れを謎に見立て解いて見る氣に成つた、織る様な人波の中に揉まれながら考へ抜いた揚句、妙な方面に解いて仕舞つた。

大きな足でそして跣足であるのは馬である、自分の皇言の姓は馬氏である、西瓜を懷いてゐるは懷西である、懷西は西に通ずる、淮西といへば淮河(安徽省)の西である、そして皇后の郷里は淮河の西、南宿州である。してみるに此の繪は皇后馬氏を諷したものであり、且つ我が皇室を嘲弄したものであるといふ風に取つて仕舞つた。

氣の短い太祖は矢も楯もたまらず、大急ぎで宮中に還御され當直の侍臣を皆呼び集め、有る丈けの硯と筆こを用意させ、四角に切らせた紙に「福」の字を大きく唯一字限りもなく書かせて市中の寢靜まつた真夜中に西瓜を抱いた妙な繪の貼つてない家の門を選つてべく貼り付けさせた。夜が明けると四方に

役人を遣はし、市中の家々の門を調べられ、福の字の貼つて無
い家をば、悉く叩き起して主人を引致し、何等の取調べもなく
死罪を申し渡したのである、妙な繪を貼つた家々は思ひ掛けな
くお咎めを家つて、福の字を貼られた家は思ひがけなく目出た
い年を迎へるこゝが出来た、それから福の字を文字通りめでた
いものさして正月の門を飾るこゝになつたといふ。

正月は福、福、福に草臥れる

爆

竹

年の暮から正月一がいにかけて絶えず爆竹をやる、殊に正月三日
間は甚しいので近隣にある日本人にはいゝ迷惑である、大連では安
眠妨害の故を以て、夜十二時以後は爆竹を禁することになつてある
爆竹の故事に就ては、神異經といふ書物に據ると、西方の深山の
中に、身の丈が一丈計りで一本足が居て、これに犯かされると寒熱
を病む、其の人を山臊といふ。山臊は竹を火に燃やしてパチパチ
を音を立てると驚いて逃げて仕舞まといふことと書いてある、そこ
で今の人々が紙で爆竹を行つて竹に代用してゐるといふ。又山臊に就
ては神異經に更に説明して「西方の深山中に人が居る、身長丈餘、
裸体で蝦や蟹を捕へる、其の性質少しも人を畏れず、人を見れば宿
れといふ。そして宿めておいて人の作る火を借りて蝦蟹を炙ふり、
人の不在を伺つてその鹽を盗んでつて食へる、名づけて山臊とい
ふ」とある、山臊は山猪とも山鹿ともいふ。荆楚歲時記にも正月一
日鷄鳴に起き、庭前に於て爆竹し以て山臊惡鬼を除く」とある

△せつかちのやうに爆竹鳴り終り

△爆竹の殻が禮着へ飛びかゝり

田家照庭火

北支那の一地方では、元旦の夜庭で枯草の束を立て、焼く習

慣がある、照庭火、こいつて皆んなで其周圍に立つて、そして止
に焼ける落ちんする草束が、さちらの方に倒れるかを注視する
其の倒れた方角の田地は其の年豊作だと言はれてゐる。

燒

鵲

巢

元日に古い鵲の巢を取つて來て焼き、その灰を門内に撒けば盜賊
除けになるといふ。

△燒鵲巢貧乏人もやつて置き

嫁

樹

五更の頃焚火を以て桑や桃や棗その他果樹を照すこ虫が付か
ぬさいはれ、切れ物や斧で其等の果樹の幹を敲く、實のり
がいゝこ言はれてゐる。朝鮮では單果樹の枝の股になつたここ
ろに石を置いて、今年もよく實れよこいふ習慣がある。それを
やはり嫁樹、こいつてゐる。

△嫁樹祭り丑みつ頃に樹と語り

吞

赤

豆

元日赤小豆七粒を呑み、椒酒一杯を服用すれば、病を却ぞけ
邪を避ける。又元日に一家のものが大人も子供も一所に揃つて
東の方を向ひ、赤小豆三粒から七粒までを、菲の汁で飲み下す
こ一年中無病息災で過ごせるこいふ。

△吞赤豆胃は迷惑なことばかり

追記この外傳説や呪ひはいろ／＼あるが、頁數の都合もあ
りこの位にして置く。(永尾氏著より)



詩的研究の第一線に立て

—安西詩兄に答ふ—

竹馬居主人

同病相憐むの情は、遠く地を隔つれば身に較べて一層強くなるものです。或日久振りに貴社中藤里氏から御通信を頂き、將して互々が醫師の厄介になりつゝあるを確めました。然し海中からのペンが「川柳雑誌」十一月號の内容に多く觸れてゐるのは、その勃々たる學究熱の迸りで、深く敬畏の念にかられました。私は其手紙と對照しつゝ、同着した十一月號を讀むてゐますと、兄が十月號拙稿に對し取し且教へて居らるゝ一文を見出したのです。

私はスポーツの雑誌に、スポーツマンシップの事をかきつゝあります。要は相手を尊敬

し、禮義的寛容の態度をもて謙讓の徳を發揮するにありませぬ。腕技には審判者もついて居るのでありますから。此精神は私かごの柳誌の文章に就ても常に抱き、冷靜に省察の料とします。某氏が「蛭子君は川柳の絶對にわからぬ人と信じられやう」と、勝手に大主觀的な嘲笑を投げつけられましたも、一概に喰つて掛る要を認めませぬ。主觀排斥者の聲として、其タイラント振りの矛盾は、寧ろ内兜を見透し得て、人間の復雜性が否なめぬわけ、私の友人には私を川柳人として遇してくれる士があるのですから、一個半個の反對位は苦にならぬ。探つて以て人の聲として精進と

勇氣の糧に、消化するに越した事はないのであります。

兄からは四五回の御通信を頂き、面識こそなけれ、寔に學識豊かな經驗多き濃厚な川柳家と記憶に刻されてゐます、故に私は病中なりと雖も、徒らに感情に走つた筆を弄するものでない事文けを、上述により明瞭にして置きます。それにあの拙稿は私が年來一度も休まず寄稿し、最も親しきを感じてゐる御同人に特に宛てたもので、一般川柳家も考へぬのではありませぬでしたが、夫れが社中の一人たる兄から苦情が出たのであつてみれば、此頃一切あたりを顯慮せず、私は私文け

光耀抄 葭乃選

て進むでゆこうと決めたのですが、聊か驚異の心持で御答せればすまぬ立場に引張り出されてしまひました。廻合せが悪いといふよりは、兄の皮肉なのもかもしれぬ。

「他の學者が古川柳の内から芝居を詠んだもの、源氏物語を川柳にしたもの等々を拾集めて、分類し註解を加へたとて、之に對して柳人が恥なければならぬ義務は、毛頭もないのである」と、いとも大膽に御主張なつたのは拙稿に「或は寧ろ川柳家が古難句に齒が立ち兼ねて、高樓につかれて置く内に學者達が片手間に調理して呉れるのであるならば私共は餘りにも自分の責務に忠實ならざるを恥ぢればならぬ」と書いた。この「恥」が勇氣に觸つたのであるらしい。

犬養總裁の口真似をすれば、蛭子は不肖なりと雖も、昨日や今日馳け出して柳壇にお仲間にして頂いた者でない位は、無論御承知下さつてゐよう。若し兄が私を知り私を教ゆる眞の同情があるならば、私が月々寄稿し來たつたものを一寸留置されて、如何なる立場主張態度を持ちつゝあるか、乃至私の趣味性質環境等にも一瞥位は與へて頂きましたのです、私は川柳に現はれた源語關係の句をごこにも詩味豊富な作品なりとして提供はし

松山 武 子

長らへた母はお餅のかずをよみ
寒椿只一輪の淋みしかり
冬ごもり栗焼く香ひ思ひ出し
消炭にたごへられたも十二月
サイレンの音に都がしのばれる

魚崎 吟 女

しまひこむくせも母親のづりにて
ほがらかにく人妻の子を持たず

大阪 壽 枝 女

髪を結ぶ朝のラヂオのかゝる頃
大阪は按摩の杖も氣ぜわしい
集金はいきなり頭さけて來る
まづしくも素直に生きて働かん
紅葉ちる如くにはたちだいを越し
見てゐるこ氣をなぐさめてくる鳥
遊び場所雀かへてる風の向き

大阪 勝 女

松山 柳 女

正月の小鳥へ錦紗すり餌して
うらゝかさ畑に母の子守唄
黄昏れの街美しく雨に濡れ

大阪 房 子

お難煮へ入齒の祖母のにぎやかさ
弾き初めの聲を繕ふ咳拂
鏡餅父は力を見せて割り
歌留多會はや弟は眼鏡かけ

岐阜 誼 女

休暇さふ日もなく主婦は飯を炊く
お冠果は犬までけつこぼし
たはわれに逢晤もつたない月夜

愛媛 愛 女

さう向いて寝ても同じ齒のいたみ

てゐませんのみか、明かに「確かに名句は少
なく薄ッべらなものが多し」云々とうたつて
あります。常々柳樺中には狂句も交り、駄句
の多分なるをも指摘し、古句泥酔を排斥して
ゐます。それ許りでなく、江戸中心萬能論を
も一蹴してゐます。今更に古句の詩的研究が
必要だと、耳のそばで囁かればならぬ程、
時代にも遅れてはゐない、自信し、且夫れ程
詩に眼を開かない不熱心者でもないつもり
でゐます。故にあの拙稿は古句の詩的検討は
別個として、専ら學究的な川柳家の責務を陳
へてゐるわけです。

随分川柳家中には一般國文學の知識に乏
しいお方々を私は實際に見出します。現に私
がそれとはなくお拜ねした川柳家六名も、か
源語を一度もお讀みになつてゐない。詩人は
學者でない事もわかつてゐますけれど、詩人
だと高唱する以上は、國文學の一通りの素
見位はすべき筈のもので、「大菩薩峠」を讀む
暇に麻雀に夜更しする精力を轉換して!!と
申したとて、此二者を私が惡ざまに排除する
のではありません。以て詩人たるの素養と
しての國文學を知るのは當然の責務と確信
し、「全然無知識であつてはならぬ」と申し
たのが、何にか誤りでありましようか。何ん

無意識にそこまで破るカレンダー
縫ひ上げた布團へ坊の來て 轉び
嬉しくも今日から厄の歳で なし
麻雀にあきピンポンにあきて 春
洗濯屋今日の寒さも洗つてる
大阪 ス エ ノ

燒香の型を和尚に示される
方針を問はれて女給こも云へず
洋装にその挨拶の派手なここ
別荘で病む奥様に仕へてる
妾宅の皮肉肴屋からも聞き
松山 白 梅 女

一曲の所望へ母は地を謠ひ
末の子も入學をする 初日の出
お雑煮へ十八さいふ不具の娘
大阪 よ し 江

下手な字で子の内祝持つて 來る
九文七分私の 足に 小 さ 過 ぎ
母よりも脊高くなつて 腰かゝめ
景氣よくうさんや寒い 顔迎へ
鏡から蒼い吐息がかゝるなり
インキ壺思想發表待つて 居る

大阪 縫 子
年の市安物たびが目立つてる
共同水道さまる間もない朝のうち
もうこれでやめるお酒を半分つぎ
病んだ子へ百兒の本も間に合わず
八せんに入つたご聞けば雨模様
龍田 は つ 女

店番へ小旗ちらく年の暮
童貞さ云ふ三十に恐れたり
つまづいた事にも腹の子を案じ
○ 大阪 霞 乃

元旦の風は眞白に地をすべり
きりくきりくきりくきり姉の羽根
争鬭を忘れず卓を圍む子等
亡き父に(五句)

ウオツチも動かさず父も死んだ
父はあらず壁ばかりなる父の部屋
死出の旅にも日本酒位あるか知ら
今ぞ知るかたくな父慈悲の父
交々に孫がしかへる巻線香
母の三十三回忌に父逝く
父と母同じはちすを疑はず

でも知らぬは末代までの恥です。無論皆さんに學者になつて呉れると言つた處でなれもしますまいが、「恥ぢねばならぬ義務が毛頭ない」と高飛車に出られたのは少し筆が強過ぎはしませぬか。最早人々個々です繰返し論じた處で詮なき業です。

潜越ながら私の頭には、柳多留の句を學究的に、それでしよう、詩的價値の尊い作品はそんなに多くはなからうから、一句も残らず(、これは一句も多くです)。解釋し得るの目を熱願し、その希望の下にタイムを惜しむで兎も角書見にいそしみます。古川柳が詩である以上は、その詩的研究の必要な事は三才の童子も亦知ると極言致して置ます。、こゝう申上げるのが御主旨にも、靚面に叶ふ所だと思ふ。、而て俱に知的穿鑿をやらなくては詩的に進まむとするに目こぼしが、あり、私の柳樟愛をも充たし得なくなりませぬ。私は無學です。殊に文學に縁の薄い學科を専攻したので、古句を通じて始めて文學の一端を知つたもの、柳樟は私にとつては文科大學です。この變則な大學への入學を、お勧めしたのは私の經驗上の歡喜をお願ひしたい、意味に外ならなかつたのです。第三者が古俳句と古川柳を對究し、川柳家は無學であつたと常に書

きます。そう言はれると我が祖先を罵らるゝかの如く思つて、川柳の面目は市井の詩だと喰つてかゝるけれ共、幸にして今日の川柳はそんな狭小なものではなく、人間詩です。プロ詩でありブル詩であります。市井人の詩であり學者の詩であります。後世に及んで昭和の川柳家も、案外無學だと再び繰返されたくもない、研究心にそゝられてならぬのです。研究とは人間丈けがもつ本能の二つなる學問然で、川柳は殊更にレベルを低くして考るべきものではありませぬ。此道は決して「邪道に踏込むだ」ものではないのです。御覽なきさい。近版の「謡曲と川柳」を、何人が抹殺する勇氣をもたるゝでありませうか。、、あると言ふならば餘りに棄せりふ過ぎませぬ。、同書は私の謂ふ所の學究的な二十數年に亘つる心血を注いだ、一博士及一學徒の苦心に成る、男子的な真獻なのであります。尙又私の望む處の研究家が、御社中から三人や四人、五十人もといつたとて、無理でしようから、、生れたとして「其方法を譲り徒らに識者の嘲笑」を招くなどの事のないのは保證致します。世間及世間の出來事を、その膠柱的に狭小に觀察し苦悶されなくてもよい。否あの拙稿を、さうしても根本的に排

斥せれば、お腹の虫が納まらぬとすれば、須らく同じ筆と紙とによる量丈の詩的研究を先づ御發表になつて對抗の陣を張つて頂きたい。言葉が以尺報尺的になりませぬが、私の心からの念望であります。他を責める時は自ら實を示してかゝるのが、紳士的なやり方です。失禮な申分になるかも知れませぬが、「竹馬居雜筆を讀みて」を草された御親切の賜として、二年二年後にでも、立派な權威ある詩的研究文字を堂々と御垂示下さるを、約束的に堅くお願ひして置きます。其間私は私の方法により知的に詩的に相變らず、古句を眺める事を怠れませぬ。斯くしてこそ相互の勵みとなり、只單に議論倒れに終らせたくないと思ひます。若し詩的研究をも他方面の人々にやられたなら、全く恥の上塗りとなるは貴説同様痛思に堪えませぬ。川柳家のやるべき業は川柳家が悉く遂行せれば「恥」だと信じてゐます。安西兄よ！ 第一線にたてよ！ 男子一度び口を開かば、計畫的でなくてはなりません。川柳家、二年寄のには、變態的な口辭があつて、やれ川柳文化圖書館を造れ、やれ川柳資料風俗館を建てよのと、大きな社會問題的な事をヤチナリズム流に説きます。獨り所張つてみる材料にはなるかもし

れませんが、哀むべく悲しむべきは言ふ處の腹は空ッボなので、衝き當りバツタリの、口先き筆先きの怪ダホヲを吹いて、リーダー振るのは困りものでしょう。詩的研究〜とわめく人々が更に何年経つても實現しないのであるならば、爰そ知的穿鑿をやつて居る熱心な笑ふ資格がありましようか。沈黙を破るは研究後の事に屬します。眞の新らし川柳家は寧ろ不言實行の實勢力を尊しと致します

知識慾を満足せしむる事が作家としての研究範圍以外なごとは、私は斷じて思ひませぬ。此點をつきつめて論ずると、結局兄と私とが詩の理解を幾パーセントもつかといふ比較に陥るので避けましよう。只兄が蛭子は一生川柳はわからぬ男だなどと、片づけてしまはれぬを望むでは置きます。

深くはいれば川柳は大きいものとなりません。而て柳壇に菓喰ふ徒としては、グループを強固にしたい念慮にも燃ゆる。それには各自が各様の役目、人は性情が異なるから、に精進してこそ、縦横無碍に川柳光明が輝いてきます。三千風の羈旅の道筋許り迫つて研究して居る俳人もありますが、無用の趣味のように見えても、これも男子一生を捧げての仕事であれば、此用こそやはり人間に何物

かの學問的な幸福をもたらすものなのであります。他人のやつて居る事は、其程度までの理解がなくては同情心は湧きません。古句の知的研究などに彷徨つて居るよりは、「一句よく社會の人々をして畏敬せしむる」との勇猛な大理想は寔に結構なお説であります。然しそれは神棚のものでしょう。即ち兄の一句がせて大阪丈けでも搖るがせて下さるのを待つより外はありませぬ。半白の老生たる私は大地に一步々々足を踏みつけ敢て街感的な壯語も吐かず、行動も致しません。

若し私の陳ぶる處が、ごうしても明瞭を缺くならば、十月號の編輯後記を讀むで下さい。兄の盟主たる路郎君が「研究心の足らぬ柳人にとつて一大痛棒であらう」と言つてくれます。此の柳人とは御社中の事に當りはしません。御膝元でいくらも論議を交換し得る好機がある筈です。私が再び筆を採る要はなからうと察します。又此種の問題を何人がグド〜しく書かれても、私にはモウ答辯をする根氣もありません。餘りに判り過ぎた事柄だと思ふから。(終)

湯崎白濱

白真濱

噴泉のように二人のものもゆる胸
素齋
白真濱 臘月夜の戀もよし
茶利吉
お土産の中へ白真の砂も入れ
若荷
白真濱 キャンプの夢へ月が照り
天五
埋つて居りたい 白真濱の砂
同

千疊敷

千疊敷 二人嬉しく吹かれて居
素齋
涙しぶき女房後ろに小さう立ち
青磁
亞米利加はあの邊だれと杖をあげ
茶利吉

圓月島

圓月島 女波男波の美しき
素齋
圓月が三日月になる 御成道
茶利吉

崎の湯

美しい人魚岩湯に踊つてる
素齋

礦の湯

戀すてふ礦といふ名に鼠なき
楓林

湯崎温泉

浪音になれて温袍は三日立ち
茶利吉

龍口巖

ドンと打つ浪を吐き出す龍の口
天五



近作採稿

ひろし 選

かす汁の御馳走雪さなりにけり
 暮の町神農さんの虎を下け
 處世術お前が見ればおかしかる
 すんなりさかひなの白く淫賣婦
 いなご寒かろかたくつかまり
 もう意見せぬ父さなり淋しけれ
 無花果を採つて與へていゝおぢさん
 米洗ふそばへ鳩下りて来る
 親子揃ふて笑ふ時もあるだらう
 赤い血をじつさねさせてる冬だ
 眼を閉ぢろ暗にもあるぞ赤い色
 床の間ががらんさしてゐる新世帯

大阪 方 眠
 同 同
 同 同
 鳥根 麗 函
 同 同
 大阪 鶴 峯
 同 同
 釜ヶ池 銀 花
 同 同
 東京 雀の子
 同 同
 長野 蛙 鼓

難解史句

三面子

歌俳諧にちなみある難解の詠史柳句を寄
 せませす、讀者語彙の例教示を乞ふ。

盜賊の住み家も古歌の徳て知れ
 白浪の行術を古歌で御捌き
 御仁政初霜の句で繩が解け
 霜の發句で解けたのは繩目なり
 御捌も歌道もきいた鳥の聲
 勅免も又なかの鳥歌なり
 百貫のかたに惜しい此歌なり
 夫婦別有るは櫻と梅の歌
 神詠で寺の言葉をお笑ひ
 かたらん一首は神も御納受
 餘り出来過ぎ叱られる松の歌
 目出度過ぎたで能宜は叱られる
 法の徳牛の涎も太和歌
 牛の涎も和歌となる法の徳
 遊女の譽れ勅撰に名が残る
 後撰集の檜垣
 立つ鳥に筆を残して一首詠み
 裏に書く手に葉は花に寄せる戀
 彼は留め此れは音を出す和歌の浦
 鶯と雀和漢の詠み人なり



釣り錢へにほひ残して魚屋去に	犬山	鍋	人
不景氣よ續けく頑張つてやる	香川	三	汀
空想を冷りささせる時雨なる	大聖寺	一	寛
冬の夜の底にうごめく失業者	名古屋	鳳	石
夜歩きになれて素肌へ冬の風	松山	紫	石
一年生きこで覺えた草津節	大聖寺	溪	鶯
トロツコへまだ人並の力出ず	大阪	村	鹿生
溢柿もなくてはならぬ山の秋	加賀	白	花子
藏に入れば酒の香ひの長閑なる	伊丹	松	好齋
運轉手後氣になる客を乗せ	大阪	千	春
盲た々飛行機をきいて居る	富山	馬	慧
たまぐのカフェー行きを秘す兄	大阪	櫻	園
丁寧にゆつくり書けば猶曲り	長野	道	樂
言譯が理屈さなつた初年兵	大阪	一	久
奉公人染みきつて表彰され	長野	柳	兒
小康を水平線に見るカルテ	釜ヶ池	奈	緒美
初戀の女事務員くびになり	大阪	靜	香

教つた後と迄香の残る窓の梅
 名の高き折つても匂ふ窓の梅
 螺の殻へ御詠歌を百首詰め
 前書も口書も無く思ひきや
 直き歌曲れる水に一首浮き
 直ぐな手に葉が曲つたる水に浮き
 曲水の宴とすれば詩の苦
 双紙洗とすれば曲れる水不明
 達勅の響れ驚と八重櫻
 御用意の雨具無用な歌をよみ
 いそがすはねれさらましをの事か？

清水の歌で色紙を尋れてる
 歌人へ小蔭生爽い袖の下
 春雨の御歌吾妻の御土産
 ぐんじの草紙の意味はほたえ經
 萬葉も詩經も薰る梅屋敷
 さまの板開き古物を歌にやり
 上の句へ玉といふ字を折り給ふ
 五七五の枝葉に分ける桃櫻
 後撰集・年經れば我が黒髪も白河のミツツク
 むまで老ひにけるかな 檜垣の事か？

遊女のはまれ藤原の太夫號
 流れ行く歌壺留めぬ御恨
 皇統を梅で繼穂のよそへ歌
 この花の歌御連枝の義理を折り
 三鳥の一羽はこゝにすみだ川
 沖の鷗では傳授にならぬなり
 座頭一先づ方を置く古今集
 桐の歌書記の船出も一葉船
 腰折れにならぬ古歌あり境論



選 後 寸 評

▼方眠君の「かす汁」の句、雪をあしらつて人情の温みを出して居る。「暮の町」は年の暮の町の意にとられる怖れがある。神農さんの虎は新嘗祭の日なれば日暮の町の意か。「處世術」は平凡。

▼麗幽君の「すんなりと」は冴えた味のある句だ。「いなご」も愛のあるいゝ句である。

▼雀の子君の二句はいづれも革命を思はず句で、脈々として動きつゝある世のドン底をみつめさせるが、まだ完成した句とは云へぬ。思想的にもつと深く掘り上げて欲しい。

▼一寛君の「空想を」は人生のある時を静視させる句だ。

▼麗生君の「トロツコ」は人並の力が労働に不慣れでか、または病後の爲でかはつきりしない。』

▼柳兒君の「奉公人」からは搾取される者の悲哀を見せられる。

▼本誌も第八卷になり、此欄の短評 數ヶ月續けた。どこからかすばらしい作者が現はれそうな氣もする。

▼僕自身いゝ句が出来ぬので、まいつて居るのではあるが、僕をびつくりさせるような佳句をおよせ下さる事を切に願ふ。

▼選は可成り自由に、つとめて新しい傾向のものゝ芽を伸すことに意を用ひて居るつもりである。(ひろし生)

和歌の一ち物みけなして猫を捨
岩城の一帖わらをもて棚を切り
比夏の景かちかんだ手で二首書
さざいの賣へ御詠歌を百首つめ
時雨れけん此笠島に紙合羽
寄るべき御身しからみと詠み給ひ
去りにくい訣は櫻の返歌なり
美しき裏表ある花の歌
亡き魂の歌で古血へ蘇へり
偽りの言葉の花はつけに咲き
(實情)火の中で妻を助ける歌を詠み
身の立消は白灰と詠んだ後
灰にする反古からげつと立つ雅名
燃ゆる修羅草によそへて出殘し

(三十五頁の續き)

川柳塔の人々については他日論ずるこ
ころあらんとして、こゝでは總て遠慮し
た。尙最後に附け加へて置きたいことは
作者以外の何人にも解らぬ句、恐らく作
者自身にさへ解らぬであらやうな句は
實は難解な句でも何でもなくて、單なる
雑音に過ぎないのだ。



火華

出来ない如く、形式が古ければ従つて内容もまた古くなるより仕方がないのだ。
云ふ所の本格川柳とは古い形式へ新しい内容を盛つた積りの手品川柳なのか？

○ 選者とは作家の指導者であり藝術的價値の發見者に承認者であると同時に、選者自らの藝術的價値の創造を選に依つて刺戟促進されるものだ。言葉を換へて云へば、選者は作家を牽揚しながら同時に作家によつて舉揚されるものなのだ。

○ 柳壇へ新進の選者を送ることを批難する者への一矢。

○ 批判は眞理の鍵、進歩の推進力だ。無批判の支配するところ、如何なる結果を招来しつゝあるか？試みにまづ柳壇を見廻して見るがいゝ。徒らに臭い物に蓋をして、膿血を内攻さすことの恐ろしさを知らぬ愚かさ。

○ 「古き革袋に新しき酒を盛る」積りかも知れない。だが柿の様な形式を持つた果物から、吾々は決して林檎の味を味ふことは

○ 成程彼等は嘗て揚言せる如く多數の同伴を得た、併しそれは藝術的價値創造の苦難に對する無智、無力乃至は疲勞困憊の極、或は無批判に盲従し、或は安きにつき、或は落伍したそれであるのだ。

○ 凡そ新興の假面を被つた雑音川柳ほど始末におへぬものはあるまい。まだしも彼等の嗤ふ既成川柳の方が、浸濡となつて人々を微笑させる功德があるだけましであらう。

○ 若し諸君が昭和新冠句が見たかつたら、我々を中間派呼ばばりをして、清算せよなど、言つてる連中の句を見ることだ（柳並木）

○ 番傘社會則を制定して、役員を定め社友を募り、會長、幹事

長を設けて川柳の會社社長の態、だん／＼番傘特有の味を失ひ、事業會社は番傘趣味と背馳する能率増進は番傘趣味と背馳すると思はれるが、こんな事を云ふとまた水府さんに「番傘をそんな風にみられるのが間違つてるんです」とやられるだらう。涙華趣味もつて如何とす（日傘）

○ 京都のある句會で土匪吟、關西での樂屋落句を作つたところ川柳街の良之助君の品評が多かつた由、とに角よかれ悪しかれ人氣男だ。川柳街の幸男君も尻ぬぐひだけで納まらず、所のよさを發輝してほしい（哥）

○ 「葵」をうらみをのんで解散した吉田縁頭君清堂君と「川柳スィムス」を發行、仲間には沸湯を飲まされたのに懲りてこんどは二人だけの水入らず、親會社の重役から制肘を受ける心配もあるまい、ひつと京都柳壇に氣を吐いてほしい。（閑）

○ 關西柳界からまるきり忘れられて居る木村半文錢君、一塵毒舌家のように「氷原」誌上で庶べて居るが、「番傘」にしても一川

柳雜誌」にしても一半文錢君の存在を意に介さぬように柳壇は變つてしまつたのだ。日車半文錢未だ華かなり頃と、餘程の相違なる事をどへられた、こゝ書くともまだ問題にして居ると思ふが、氷原について書く事がないからと知れ（Y）

○ 塊人君の句が「川柳雜誌」に現はれると、別人だらうと騒ぐものがある。御本人は僕の句だよと辯明をよこされる、ところが近頃「ひろし」といふ雅號で句を發表される人がある。本社のひろしは「川柳雜誌」以外には句を發表しないから、他誌のは別人と御承知あつてよろしい。塗音柳壇」のひろしも無論安井ひろしに非ず。（H）

○ 句會で秀逸或ひは五客三才に抜けた句を、選者が短評を加へる例はこれまで時々見聞したが結構なことであると思ふ、そしてこれが初心者に對しては親切な手引きであり、選者としても責任感に忠實な所以である。今迄のやうに一句讀みつ放しでは聞いてゐる方もたよりない場合が多い。辛未の柳界を期してこれが勵行を切望する。（句勞人）

創作懸賞川柳發表

「喜び」

麻生路郎選

一等 神戸市花隈町九六 楊井 二南

三等 大阪市東區農人橋二 櫻井 圓角

喜びへかたくな父ほつみかれ

平生のしまつやに似ぬ娘の荷

二等 大阪市東區鳴野町三〇〇番地 大町 繁雄

三等 神戸市楠町八丁目二五五竹重方 森 十四九

喜びの睡に襖を外したり

よろこびが後れていらぬ嘘をつき

二等 南滿洲開原 橋爪 薫

三等 大阪市此花區上福島南三ノ六六 松盛壽 枝女

佳作

喜びをうつし通して結び上り

我が國の遙かに見えて落つけず
初孫の寫眞八百屋が來ても見せず
喜びの湯氣は屏風の上を越す
喜びの來た顔は悪友見逃がさず
金べば喜ぶやうに金が要り
辭書なんざ引いて居られぬ嬉しさよ
喜びに來たに花嫁立つたあこ
喜べば云はぬばかりの世話を握り
よろこびは言はず友だち手を握り
開通の當座時間を読んで喜ばせ
通過の首だけ出して喜ばせ
喜こんで他人行儀な座になほり
よろこびの小指はキエツト噛みしめり

京都 福田 丁路
大阪 片桐 靈壺
兵庫 坪井 道樂
長庫 長崎 柳秀
函館 北村 白子
九州 尾崎 三叟
東京 綿谷 摩耶
島根 土江 量人
大阪 山崎 雨聲
兵庫 須崎 豆樓
大阪 須崎 雨聲
長野 和野 源秋
大野 高田 柳坊
大阪 水谷 鮎兒
臺南 松田 弘美

心では喜んでゐる叱りやう
喜ばぬ男がこゝに一人あり
就職は靴の堅さも言はぬなり
ケサリマルハハモコモムツガトコロ
落ちぶれてゐるのへ友は提せ來る
母と子の喜び小さく火を圍み
喜びの飽和になれた一人ッ娘
喜びを文のお凸に求めたし
喜びは明日を忘れてゐるもよき
少さくとも國旗に風がある嬉し
妻ですと戸籍調べに言はせられ
喜こんでくれても伯父の意見辭
喜びはバスに居る事忘れさせ
喜びの朝へ光線降るいやうな
喜びの袴がすれるいやうな
結納を大きく寫す金屏風
お祝の電話へ母の立ちたがり
嬉しさは柏の匂ひ中に寝る
安産を喜びきれぬ無口者
もう孫が小使錢をやつていく
喜びの女がなるとびに母の老け
幸福な方にじれつたいたい夫
喜んで貰ふ筈のか叱られる
喜んで呉れる小犬へ感謝の瞳
喜びにあまりに妻の世帯じみ
喜びを隠しきれない髪の艶
喜びが足に傳はり手に流れ
喜びの近所も軽い顔になり
喜びへ母うるたへるばかりなり
壇上の子へ喜びの眼をつむり

春 秋
同 白
同 虚
同 光
同 路
同 ら
同 っ
同 げ
同 車
同 堂
同 二
同 勝
同 勝
同 二
同 華
同 水
今日史
桃水
翠峯
不忘鐘
夕保
佐保
佐保
佐保
秋友
英峯
英賀
英賀
二竹
如空
白雨
吉祥

エール濟給もナインはなみだなり
 父母の喜びとなる過ぎた智慧
 喜びに近所の人も使はれる
 喜んで遊んで居るに迎へが来
 喜びの日の朝風呂は澄んで居る
 話しかけてやれば喜ぶ祖父だつた
 腹の子の話へ更けるのを忘れ
 喜びを讀んで床屋念を入れ
 喜びを密柑二つに見せて居り
 喜びの明日へ太陽まだ落ちず
 恥入る姿態に灯る百燭
 勝旗みんなカメラへ笑ひかけ
 喜びの日には善人ばかりなり
 病院を出て皆無事な人に逢ひ
 嬉しきを見せじと女灯に背き
 喜んでくれてもいと恨み言
 喜びがすぎて表の戸にあたり
 遭難を物語る友の輝ける
 二三日だけは施来で浮き上り
 喜びの品恩人の意志をまげ
 土産物つにお禮三度され
 土氣して褒状うける手がふるえ
 喜びの姑後が愚痴になり
 成功の息子の前で馬鹿になり
 里の母圓滿だけを見て歸り
 出獄は團旗の中で涙ぐみ
 喜ばせ次に無心を吹く氣なり
 よるこんで迎へてくれて泣いちま
 檻を出た猿の如くに喜びぬ

俊一 榮造 溪鶯 普天 卯三 暑治 眞壽夫 秋無草 湯人 哲郎 銀蛇 狂水 佐太郎 文醉 無冠王 亞坊 規士 鐵漿 白音子 笑郎 柳咲 志郎 悌次 宏次 百太郎 福惠 眞治 作茶 津根三

嫁の来る黄昏の家となりにけり
 喜びを泣いて見送る 補回戦
 喜びにはほふ蒲團の柄を見る
 喜ばずつもりでせうと見破られ
 喜びのこの勘定は俺が持と
 七八分背負ふ氣で添ふ戀同志
 喜びの席へ小さく母も出る
 喜びにてれて耳なごかいてふる
 よるこんで下さい伍長勤務です
 當選の感想夫婦して話し
 正に男にて候呱呱々の聲
 嬉しさが刻む大根の音にまで
 よるこびの詞電車で考へる
 喜んでもらふ土産の手のだるさ
 本當の母の此世にあるを聞き
 喜びの灯にある心皆若く
 喜びも先生と居て 氣がひける
 喜びの朝から庭を三度掃き
 喜びについ寝ころんで見る心
 喜びの日の氣取りやに隙が見え
 吉報を記者がもらして行つたきり
 うれしい日恥しい日を寫される
 喜びはブラットフォームから話し
 喜びに酔うてる街を宿の傘
 喜びを薄紫におしつゝみ
 昇級はするし出来たは男の子
 意外にも過去は過去だと喜べられ
 法悦と云ふあきらめのみちを選び
 喜びが胸一ツばいになつたきり

吟女 良之祐 麗巫 徳次郎 骨亭 暢山 白帝子 世紀 丸葉 義七 不然 草珠 明珠 言也 芳村 有石 十太郎 流星 晃卓 東洋鬼 多佳史 露斗 呑壁子 嶺月 嘉門 龜吉 雅太郎 登美坊 左馬

喜びを抱いて氣輕な裾さばき
 喜びを氣まづくうける借があり
 喜びの大鯛小鯛ごうしやう
 喜びへやつげり金が不足をし
 喜びの目に新聞の巾がなし
 喜びを壁に語らん特許權
 明判官罪なきものと仰せられ
 喜んでゐるのが蹴の手を重ね
 嘘ついてまで喜ぶを見たうなり
 喜びの席を騒がす近い火事
 喜びを先祖へ分ける灯をともし
 喜びは父の手になる汁の膳
 喜びであらう數々枕元
 喜びを申せば隠居かしこまり
 當選へ書生の笑ひうつされる
 ろく／＼に喜びもせず眞婦になり
 あれ程に喜んだのをもう忘れ
 うたがいもうけて同志の手い
 食はぬ日もありたり今日も喜ばん
 喜びの島出る舟のぼかざらず
 喜びへ来る挨拶は笑ひこけ
 喜びはインクも青く春になり
 昇給の二人其處らで飲むときめ
 水引へ喜びが乍ら女文字
 代筆にその喜びがあらわれず
 まだ沙汰は受けぬと記者へ笑顔
 よき祖母となりて喜ぶことばかり
 ぬか喜びが昨日の人とは思はれず
 添ひとげた男の顔を見て起きる

青帆 他史郎 變人 集一 日城 草石 錦水 荷村 黒天子 太郎 柳甫 繁坊 眞雄 湖山 柳次 一男 憲坊 樂天子 方眠 紫石 思芥郎 一雄 竹二 山嶺 桂枝 綠之助 誼子 四頁

續川柳家の戸籍調

係 山 雨 樓

- (一) 姓名 (二) 雅號及別號 (三) 出生地 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 職業又は勤務先 (七) 好きな句 (八) 自信の句 (九) 川柳以外の趣味 (一〇) 配偶者及子供の有無 (一一) 嫌ひなものの (一二) 川柳に手を染めた年月

(232)

藤 本 福 造

- (一) 藤本福次 (二) 福造・蛸蛉庵(元は蘭華) (三) 京都市 (四) 京都市姉小路鉄屋町角 (五) 明治十五年三月朔日 (六) 蛸蛉印顔料製造本舗の繪畫用品 (日本畫) 商 (七) 南座は小手をかざして見る處 (樂山) 恰度顔見世なれば (八) 飲む家は後(廻して禮廻り(御發表が新年)知と知りて(九) 近頃とんとなし (一〇) 妻明けて三十七才 長男中學三年、長女小學一年以下男貳名(一一) 昔の高等小學時代、古い様に努力す(一二) 昔の高等小學時代、古い様で、おぼつかしく、しかし中絶せずに續けてゐます、此處暫くは椽の下の力持役で暮したい。

(233)

菱 田 金 剛 坊

- (一) 菱田武雄 (二) 金剛坊(大正六七年頃劍花坊師から貰ひました、柳權寺の隠し號ださうです) 黒田(番外は、番外の黒さだの意味で一時の假面です) 他の文藝は今言ふ範圍のなく以前は色々と言ひましたがそれも今のもの



一 路 集

(募集句)

川上三太郎選

淋しきは酔へない酒こなつゝある
 香まぬ氣へ猿口をれて不覺なり
 酒のかん小指でちよつこつ見る
 ほろ酔へ凄いばかりに月がさし
 酒の香に欺まされて居た頃がど
 酒の事言へば門番あごを撫で
 黙々さへんくつ一人隅で飲み
 父の酒をつこ一口なめてみる
 隣また飲み過ぎたらし聲を聞き
 父の子だくこ酒のませられ
 酒飲めば愚痴ばかり落ちぶれて
 金借りに行けば熱燭やつてゐる
 半生を酒で過して妻がなし
 タクシーに父を乗せたり祝酒
 身の上を酒のさかなにさるる
 デカンショで呑んで別れて一昔
 仲人の出入裏から酒屋来る
 疲れてる體へ酒の小買ひかな

無落葉 双山路 丁山路 鴨山 紅石 草波 竹光 樹白 鹿舟 桂有爲 雨城 薊丸 艸葉 山月 四磨

酌をする妓のひびを不圖見付け
 初雪に隣りも酒を呑むらし
 居酒屋の娘に酔うたつけを受け
 悲しさの涙を酒でぐつこ呑み
 大阪はなんぞこ云へば酒をだし
 飲むなこは云はぬ交番持てまし
 相談がやつこきまつて酒になり
 酒の友別な話で呼びにくる
 兎も角あふらにやなごつこ酒
 悪縁の諦めかねる酒をのみ
 救世車名酒宣傳すれ違ひ
 雄蝶雌蝶も見される酒を注ぎ
 好い日悪い日酒酒を呑み
 禁酒など考へさせる年こなり
 酒城の路火へ桃割一つ消え
 借金で呑んでも酒は酒の味
 いつになく疲れ戻つた酒の味
 酒の味覚えて女給らしくなり

桃水 紫石 らつば 忠二 卯三 今雨 菊路 耕民 笑四 於鬼彦 湖山 柳次 普天 不然 双車 黄蛾 千春

酒からの別れ話へ酒さゞき
 三ヶ日酒酒酒の中に生き
 やけ酒を歌合せしてのんでる
 ポピユラーな慰安酒酒酒酒
 太陽に濟まぬ氣のする酒を呑み
 燒香の煙を汚す酒の息
 このが酒のめるまでは俺の命
 我が心欺く爲の苦がい酒
 不義理重ねて酔ひしてゐる
 子のためにやめたお酒が匂かな
 きめ込んだ酒は稼げる腕で持ち
 女房さのお酒さへも氣もはるゝ
 初めての酒少うし舌へ飲み
 ネクタイにさゝの香りの残る冬
 晚酌に晝間の地震尋ねられ
 分別の酒さば知らぬ妓なり
 朝風呂であへば親分酒の事
 夜業から戻れば酒もつけてあり
 飲まぬ譯言ふて末座へ坐るなり
 あふるればさて心違へる酒さし
 すぐに寝る父の寸酒もさびとて
 悲しさに酒の元氣を借りてゐる
 娘の顔へ養父の酒が冷ふてゐる
 酒だけがきずださ良い腕おれ
 命は惜しいが酒はやめられず
 何のかの云ふては酒のやからなり
 獨身のわけあり酒のくせがあり
 娘今日嬉しい酒を酌がされる
 解決が付くのをお爛待つてゐる

櫻園 碧水 幸太郎 樂道 園角 鯉友 青みつる 没食子 沐天 涼哉 靜香 勝二 水村 たけし 白柳子 夕鐘 同 愚籠 同 憲坊 同 松枝 同 桂枝

酒癖を宴會へ送り出した後
 酒を飲みながらさうやら泣ける
 酒造る唄が夜中に聞えて来
 失業をしてから場を買ふてゐる
 まだ酒の味も知らずに給仕なり
 祝酒今日本當の藝を見せ
 ござせ酒飲みの子だ飲んでやれ
 御酒加減さ云う氣が開けた窓
 目にたつて減つた酒量を氣遣はれ
 失業のせめて酒だけ呑んでくれ
 酒のみのそれゝ癖のあるよし
 勞動の酒でできたへた皮膚の色
 われ死せば思出せば酒を供へよ
 眼鏡はづして酒の世界へ
 酒二合だけの我が家は春さなり
 酒だけは我が意を得る友に會ひ
 酒呑みの事は近所も知つてくれ
 眼くなる酒を女房酌いでくれ
 雪催ひ出先に飲ませるあてがあり
 飲みあかす事も友達甲斐にする
 一も二も酒柄氣をまだ知らず
 まあ酒だ僕は彼女を思つて居
 呑むだけがたのしみ親も妻もし
 舊友の安着晝の酒になり
 支那の酒天井に赤い花が咲き
 ぐつみのむ酒に力がはいつて居
 待つてゐる様にお茶屋の酒が出る
 待たされて酒のにはひの中なる
 酒のよしあし男の舌を借とくる

雲仙 同 櫻果 同 扇花 同 葉留夫 同 吐句坊 同 あきら 同 繁坊 同 麓生 同 新水 同 狂水 同 方眼 同 鮎美 同 明珠

ではありませぬ、(三)岐阜縣今尾町(四)
 大阪市西區立賣堀北通二ノ十四(五)明治
 廿四年三月十四日生(六)會社の厄介者(七)
 東京の中川人形子君が大江正九年の一袋來い、
 蚤來い又夕暮れを惱む胸きん坊氏の「子守
 唄腰を浮かして右左」雉子郎氏の「きりんく
 す半分泣いて風が吹き」等句の總てが、もう
 今のものでありませぬ現在では「くれな
 いを包んで普明日を待ち」東京の春日紅關君
 (は戀名)では昔時の猛者柿沼掬水子君なら
 うと思ふ)が人生觀がトテも嬉しい、然し乍
 ら此技巧もデキに厭きてでせうそれが本當
 です(八)丹前と代へて自分の灯へ座り日
 一日母の喜ぶ灯へ歸り等それも今は過去の
 ものです(九)撞球ヘタの横好?他人の言語
 動作を修養的に研究する事、大体が世話すき
 らしい(一〇)妻がたつた一人有る(一一)機
 嫌取る事が嫌いだから世渡りがヘタ(一二)
 大正五年の秋冬の候?

(288)

若井たけし

(一)若井武(二)たけし又は狂路(三、四)滋賀
 縣蒲生郡八幡町魚屋町中(五)明治三十八年
 七月十九日生(六)商(七、八)一時名句だと思
 つても時日を経過するや倦厭を感じて來る、
 それだけまだ絶對的の名句に出會はないと
 も云へやう(九)陸上競技、ヒンボン、和歌、
 俳句、俚諺、端唄、小唄、音澤、長唄、義太夫、琵琶、
 浪花節等々(一〇)詩を解する者、物色中
 (一一)共同生活、純朴な女、秋風(殊に晩秋に
 吹くもの)(一二)本當に川柳を解し初めたの

は昭和三年の暮頃から。

(267) 丸山公二

(一)丸山勝美(二)公二(三)信州飯田(四)大
阪市天王寺區國分町三(五)明治廿八年四月
一日生(六)クリニーネ業(七)「セロ」の
音にぞつて死に進む故奈良武(八)キンドの
書の暗さを忘れかれ故柳珍堂(父親の短
氣もやがて俺のもの)刀三「嬉しさの三丁程
もつらきけり」馬行「借りる氣で行けば有馬
の夏と聞く」路郎、まだありませう、右の
句は絶えず頭に残つてゐます(八)目下製作
中(九)野球、映畫撞球(一〇)現在(はひとり)

(一)ケジゲット金持の息子(一二)昭和四
年一月、川柳使命會の句會に出席したのが初

(268) 中村山門

(一)中村順一郎(二)山門(三)東京牛込區(四)
東京市京橋區新佃島車町二ノ一(五)明治
三十八年一月九日(六)明治二十年富山縣か
ら草鞋を履き替えて東京へ上り薬劑師から
當時の尖端物俵生を嘗みましたが愚父、自
分はその三男に生れ替つたに長男に押し上げ
られて染物業(七)檜櫓が足が揃つて又悲し、
維根樓、鯛焼けば鯛の臭ひが残るなり路郎。
他に「下手糞ですが久良翁の句みなき(八)
子の瞳パツチリと此の朝明るいな。病葉の行
方に似たる菩提心。等を折々口吟みます(九)
讀書(一〇)妻と子供一人(一一)其時の氣分
で種々變ります(一二)昭和三年五月

禁酒なきしたこそある酒に酔ひ
コツプ酒外に引かる思ひなし
あゝ飲みたいなき思ふ日のあり
心おきなく飲めよ燭身
酒をかりての力又恐し
禁酒會少しは貯めて見る氣なり
酒に惚れ女の居ないさこを撰り
なまじつか店員が居て酔へぬなり
なんの苦味此の世にや酒がある
戀を追ふ者の弱さよ酒の味
失業に死ぬ程飲んで見たくなり
矛盾矛盾酒ばかり飲んでる
酒の番が山吹屋にせまるなり
陶然として朝酒へ感謝する
獨酌のチビリくミ味が出る
いゝ酒にさされて笑つてばか
木枯しゝ麥酒はまり咽喉を過ぎ
女房に死なれて居酒屋さなじみ
酒の香を手に吹きかけて他愛を
仲裁は酒が云つたにしてしよ
飲んだなき醫者何も彼も知んぞ
ふん酒の断え間何かが胸を衝き
灘の酒積んで船出の船子に唄

靈 同 同 同 同 同 同 同 同
靈 同 同 同 同 同 同 同 同
霊 同 同 同 同 同 同 同 同

喜 無 喜 音 吉
由 鬼 路 草 石

初雪

酒呑みの親仁へ女工して稼ぎ
秋の色見せて新酒の舌ざはり
酔つて來たらしいの癖が出る
足先は酒の命ずるまゝ動き
いゝ女房持つて何時もは禁酒
蹠蹠を酒がさせたばあんまりな
酒に托して居れぬ踏切
夕飯だけはぬこ思ひ酒に酒
二合では足りぬ二合の酒を減し
息をつがないコツプ酒怒つてる
雪雁ひ陰を染める酒さなり
鬱憤はそのまゝ腹へ酒を入れ
てのひらを舐る哀しき盗み酒
置時計が氣取つて部屋の青い酒

二 同 同 同 同 同 同 同 同
五 同 同 同 同 同 同 同 同
客 同 同 同 同 同 同 同 同

勝 柳 陽 哲 白 雅 日
二 けし 人 郎 柳 之 日
勝 柳 陽 哲 白 雅 日
二 けし 人 郎 柳 之 日

人三酒一つになつた面白さ
首尾はよし酒は黄いろくなつる
小使の喉酌薄暗いこで濟み
呑んで見て舌がうなづく呑み酒
戀のある嬉しさ酒へ遠く居る

藝人に藝人洒落も云はず飲み
コツプ酒置けば電車を通る影
酒飲みへ時計の針は知らぬこ

天 雅之助 白柳子 日城

初雪に出勤の肩ちがこませ
初雪を顔一ぱいに受けてみる
初雪に子供ばかりの聲がする
初雪が降るよ淋しい枕元

耕 利 雨 武
民 生 町 子

麻生葎乃選

初雪へ犬の今年子踊るやう
手を出せば初雪一つ二つ乗り
初雪に蛇の目の傘が寫される
初雪が坊のかつこに積りけり

喜 無 喜 音 吉
由 鬼 路 草 石

初雪が降つたさ朝寝をかされる
 初雪のニュースに國を見舞ふ
 初雪へ憶ふ戀ざめあさましく
 出嫁へもう初雪の便りが來
 初雪に年賀の客が傘を借り
 初雪の惜しや次ぎく水に解け
 初雪は處女の肌を思はせる
 劍劇の子等に初雪降りかゝり
 初雪にもスキーヤーン勇み立ち
 初雪へ會社ストーブ出してあり
 初雪へつい朝酒の量が過ぎ
 初雪へまだくねむい子を起し
 初雪に子の宿題は涉らず
 先生は積れば都會は酒になり
 初雪を見れば都會は酒になり
 カメラマンよい初雪をり巻いて
 初雪にみんな出ろこは大仰な
 初雪に母は背中をまるうにし
 初雪へ別荘の灯が赫まつき
 初雪に疲れた子供爐傍へ來
 初雪に早起きをするカメラ熱
 初雪が來て刈りにくい稻になり
 雪になる雨さおふくろ腹できめ
 初雪に南天の實の赤々
 初雪の日に訪の客もなし
 豊年の兆にしてはひさい雪
 初雪の何處から來る汽車の屋根
 竹馬に乗つて初雪踏み歩き
 遠山の初雪かくす襦袢干し

寒夕陽 鐘人 雙山 雙山 洋々 志洋 桂舟 樹光 今雨 桂枝 靈壺 靜珠 明香 四磨 松枝 素月 かず子 桃水 卯三 鮎美 櫻果 音吉 柳次 雲山 湖月 涼哉 閑生

初雪に暮れの準備をいらい出し
 初雪につらい別れをおもひ出し
 初雪に丁稚はいやな用があり
 初雪に障子開けさす酒機嫌
 初雪へ酒だ酒だの友がよめ
 初雪へ又日稼の愚痴さなり
 初雪の障子へ孫の指の穴
 初雪へ餅焼く煙の匂ひする
 初雪を見おさめにして床重し
 初雪へ子供揃うて手を叩き
 初雪も知らず吾兒の病み續け
 初雪へ處女の如くに藪柑子
 初雪の窓をベットの父に開け
 初雪へアトリエの窓あいてる
 初雪を集金寒うはいつて來
 初雪にタイヤの跡を太くつけ
 初雪へカメラ慌てお晝過ぎ
 初雪の今朝鏡臺へ寒うるる
 初雪にこても寒うにゐる炬燵
 生きる身の初雪なごにかはれず
 初雪に息子の除障待ちあぐみ
 初雪の降る日に死んだ姉の事
 初雪の朝を寫眞の友誘ひ
 初雪に緋さなつた埋立地
 初雪の雨まじり寄アスファルト
 初雪に火鉢の炭がはせてる
 初雪の便りさ共に蟹が着く
 初雪がもう雨樋に音をたて
 初雪はあつめきなロケーション

鯉友 たけし あきら 吐葉 吐旬坊 扇花 櫻園 千春 黄蛾 司郎 沐天 方眠 菊路 昌城 裸人 哲郎 白雨 暢山 道樂 青水 葉留天 碧水 白帝子 登美坊 不自然 普天 柳兒 没食子



町全杭
 MEMO
 雨 綠

▼芽出度く一九三二年を迎えることになりました。緊縮の一九三〇年は柳界にとつてか
 なるの多事でありましたが吾等が「川柳雜誌」は幸ひにも他の柳社と違ひ常に前進的に勇
 躍をいたしまして八卷の春を迎え得たこと
 は愛讀者並びに寄稿家諸氏の御援助に俟つ
 もの、多かつた事を思ふと欣快に堪へませ
 ん。尙一層皆様今後の御後援を期待いたし従
 來の御交誼を深謝いたします。
 ▼七十餘名の同人、社友、二十八支部に屬す
 る支部同人の方々とが、糸亂れずこれ迄協
 力して御盡力下さつたことが本社にとつて
 今日の大をなすことが出来たのだと思ふと
 益々本年も皆様と共に大飛躍を致したいと
 存じます。
 ▼不景氣の影響は隨所に起り、本誌の社友、
 同人間にも失職や減俸におびやかされた方
 もありますが川柳とはなか／＼縁が切れま
 せん。益々旬作に努力して居られます。中に
 は七月以來無手當で仕事だけはしてゐます
 が失業者同様だから誌代も滞納になつてお

初雪に信心の坂すべる事
 初雪のラヂオ失業へ呼びかける
 初雪を便所へ立つて知る寒さ
 初雪に子の湯たんぽを入れる
 初雪に濡れて新婚宿へつき
 竹馬の子へ初雪の物たらす
 小作日に登つて比叡の雪に遇ひ
 初雪は子等の騒ぎへ雨こなり
 初雪の便りスキーを悦ばせ
 初雪も書きそへ無沙汰勝を詫び

紅 虚 氷 水 柳 紫 石 竹 狂 佐 保 蘭 丸 柳 秀 水 葉

小鳥

緑之助選

慰めてくれる小鳥に靴を脱ぎ
 小鳥もう僕を知つてる首を振り
 (佳)外泊の出来ぬ小鳥を飼てる
 空寒く小鳥も小鳥嘴を寄せ
 小鳥二三羽降りて静かな庭する
 雀の子アンテナに來て朝を啼く
 登み切つた空へ吸ひ込まき小鳥
 電線の上で雀の戀は成り立ち
 電線に並ぶ雀の行儀よし
 よい聲の山鳥か來てる朝の寺
 かたまつて空の高さへ飛ぶ小鳥
 (佳)陽の中へ小鳥の行衛をとり
 文鳥の籠へ小鳥の手が伸びる
 銃音へ小鳥の胸にある動氣
 銃の先小鳥木の實に餘念なし
 (佳)羽ばきの小鳥へ狙ひ定らず

山 月 ら づ ば あ き ら 町 二 勝 二 靈 壺 雲 仙 黄 蟻 松 枝 草 石 琴 人 同 靈 壺 琴 人 白 雨 丸 葉

伊藤緑之助共選

(評) 狙はれてゐるもの小鳥のみならず
 狙ふもの又銃のみに非ず。
 小鳥熱夢でなかつた一番 桃水
 四籠空一ぱいの 聲で鳴き 木偶人
 山雀の熱にこゝにも一人生き 暢山
 (評) 妥協した小鳥も、妥協させた人間も
 みんな悲しい存在だ。
 鳴いて欲し小鳥よ病の床にゐる 夕陽
 (佳) 秋ばきを病に勝て鳴く百舌か 町二
 (評) 感傷に結び易きを然りとせず、百舌
 なき、川柳はかくありたし。
 従妹も小鳥いつでも可愛らし 哲郎
 令嬢は小鳥へ何か笑はされ 紫石
 愛の巢に小鳥空しく笑はれてる らづば
 (佳) 秋の陽に小鳥は戀をなせるよ 音吉
 (評) 平凡なりといへどもその 期りかな
 憂鬱を取る。
 女氣を見せて小鳥の餌が少し 白柳子

りますが一月中旬迄には整理致します、と云つて來られた方もありました。誠に同情に堪へませんが社としてはこんな方には、雑誌を無代贈呈して上げたのは山々ですが、まだそんな時代が來ぬから困つてゐます。
 ▼誌代も出来る限り値下げしたいと思つてゐますが、まだそこまで行かぬので、僅に特輯號の誌代を普通號なみに切り下げ更に投句家の便利と經濟とを考慮して誌代半ヶ年分以上前納者に限り本社特製の投句用箋一冊宛無代贈呈致すことに致しましたから本社の微意のある處を諒として精々用箋を御使用下さいんことを切望いたします。
 ▼本社京阪神支部聯合會を例年の通り十二月七日、日本橋俱樂部で催されました。なかなかの盛會支部幹事のお骨折を、こゝで謝します。會報は各地會報欄を御参照下さい。
 ▼片桐靈壺 杉谷専路、上村村樂の三氏が新に本社社友として入社されました。今後の活躍を祈ります。
 ▼本社では創作獎勵のため懸賞川柳を募集致しました處が好評噴々でその第一回を締切りました。小包で送る數度の應募句の選に路郎先生がさぞ疲れた事と思つて居ります。別項に入賞句並びに佳吟が、發表されてありますから御覽を願ひます。
 ▼伊藤緑之助君が今回新に社友になられた杉谷専路君や三木夕陽君とが協力されて鏡川支部の一大發展を期することになつたとの快報に接しました。今後の大飛躍を祈つて居ります。

もろた小鳥が囀りすぎて 音吉
 開け立てに小鳥の夢へ氣を使ひ 不然
 旅に出る朝を小鳥の啼きつゞけ 鮎美
 夫婦きり小鳥に愛を教へられ 同然
 愛なき夫婦へ小鳥囀る 雨町
 小鳥ならこそ自由にキツス 卯三
 (佳) 摘草へ小鳥盛に呼びかける 卯三
 (評) 宇宙の大氣と、渾然たる清氣を感じ
 小鳥が生きてゐる。

掃除するたんびに小鳥邪魔され 丸葉
 舞ひ込んだ小鳥ゆふて放すなり 櫻果
 師走も知らず小鳥の一羽逃げ 双車
 裏切られ小鳥の聲を浴びて去ぬ たけし
 私語をインコきよこんご聞かぬ 沐天
 (評) たゞ羨望とのみ解する勿れ、與ふる
 者、與へらるる者の影を見よ。

(秀) 小鳥には決つた餌が貰はれる 落葉
 小鳥の死今日も旦那は見えぬし 失名
 秋の陽で死んだ小鳥の墓を掘り 哲郎
 (佳) 早枯の夕陽つれなし小鳥の死 町二
 (秀) 運のない男へ小鳥死んでる 雨町
 (評) 荒削りな卒直な表現が、捨て難い味
 を教へる。

(佳) 籠の鳥啼れ切つた空へ考へる 琴人
 (評) 交錯した小鳥の腦裡よ、空は隅なく
 晴れてゐる
 一籠の狭さで戀もする小鳥 桃水
 小鳥今日巢箱の中に小さくゐる 紫光
 囀れば戀にされてる籠の鳥 没食子
 籠から籠へ小鳥賣られ行く 不然

(佳) 留守なれど小鳥囀る駐在所 晋天
 (評) 長閑な村のスケッチとして囀りが
 よい。

(佳) 稻妻に小鳥の脚が木を離れ 町二
 (評) 繊細なそして偉大な詩だ。

(佳) 疾風に吹く小鳥掻き込まれ 同
 (評) 前の町二氏の句と共に苦闘の姿で、
 それと戦法は異なるが、前者には鋭さが
 あり、この句には秘策がある。

祝砲に小鳥びつくりして逃げる 佐保蘭
 雨よあがれよ小鳥も饑む 英賀夫
 自由を語る小鳥のはゞたき 麗丞
 墓石の新しき小鳥の糞 同

(佳) 不景氣のどん底ゐる十姉妹 明珠
 (評) 十姉妹もそう考へてゐるかも知れ
 ない。

光路選
 失業と別に小鳥を飼つて居る 樹光
 小鳥籠椽にならべていゝ日和 氷村
 令嬢の爪の光を見る小鳥 千春
 桐一葉笠になつてる小鳥 塚春
 春の日の廣さになつて小鳥飛び 狂水
 鳴飽いて小鳥小庭の餌を探し 夕陽
 邪魔くさい世話に小鳥のあひれ來 無名
 掃除するたんびに小鳥邪魔られ 佐保蘭
 小鳥綱もう曉の色をそめ 木偶人
 師走も知らず小鳥の一羽逃げ 双車
 老いて聲出さぬ小鳥も放し兼ね 桂舟
 捕まへた小鳥は逃す氣にもなり 四五磨

▼一時沈滞してゐた登ヶ池支部では、舊冬十
 三日復活會を開催され一流、奈緒美、黒龍
 その他の諸君の骨折で婦人作家も混じり、な
 か／＼の盛會でした。誌友鶴峯君、社からは
 雨町君と私とが出席致しました。今後又々登
 ヶ池支部の力作が見られることを喜んでゐ
 ます。

▼木村晃卓君はまだ病床の身だそうですが
 相變らず、熱心に社のため盡力されてゐます
 相識の私達には、謝と同情の外ありません。
 一日も早く全快を祈ります。

▼桑原京郎君は、支部聯合會に出席を約され
 て居ましたが、突然商用のため欠席され止む
 なく寄贈品を新水君に託されました。その後
 新妻と商賣に一生懸命だそうですね。

▼新に作家になられた山本佐一郎君は、路郎
 先生から「葉光」といふ雅號を貰ひました。
 ▼高田茶撫郎君は健康回復されて、就職以來
 日夜多忙の中から、風見草の編輯に努力され
 てゐますとのこと。

▼光纏抄の選は本號から、麻生茂乃女史をわ
 ずらはすことになり、なりましたから今後婦人作
 家の近作は「光纏抄」と明記して、ごし／＼投
 句されんことをお願ひ致します。

▼安井ひろし君が大阪市港区九條南通 三丁
 目前野實一郎氏方へ轉居されました。
 ▼本號の編輯は路郎先生、ひろし、琴人、山雨
 樓、雨町、愚陀、杏三、公二の諸君と私とで致
 しました。

各地柳壇

いちのあを句を創れ



川柳雜誌社 聯合忘年句會

十二月七日

於日本橋俱樂部

恒例に依る本社京阪神支部聯合句會は近來にない盛會で、九十四名の出席を見た。席題「神主」互選の披露が公二氏によつて始まり中途にして、辨士交替とあつて貴山氏が代るなど、句會のなごやかさを見せたが、次の席題(個人選)に移つてからは物凄く作句の渦となつた。個人選の披露に先つて、路郎主幹から「川柳の一線」と題し、「川柳家は最初一點から發足するやうに、點から線へ、線から圓を築き上げるやうに不撓勵まればならぬ」と川柳家の奮起を促すべく熱辨を振られた。又萬よし氏は東京の無料宿泊所見聞談を一挿話として語られた。當夜は寄贈賞品非常に多く五客以上に呈賞、新進作家の多く

が入賞された事は近來にない嬉しい點であつた。

賞品の寄贈を賜はつた諸氏へ厚く感謝の意を表します(朝田新水記)

- (賞品寄贈芳名) 卷戸硯箱(五) 梅田支部、樂燒箱入(貳) 平野一樂、小形石鹼(五十) 御旅支部、床ノ間置臺(一) 平野支部、置時計(一) 堺支部、ハンカチ二箱(ハンドバッグ(一) 京都支部、短冊帖(二) 天満支部、銚子一對 孟付二箱 銚子一本 孟付(一) 守口支部、短冊掛三個 菓子器(二) 神戸支部、自句短冊(四) 山兩樓氏、カレンダー(一) プロレタリア手帳(一) 五道頓堀支部、川柳手帳(三) 琴人氏、便箋(十) 杏三氏、累卵の遊び(二) 路郎氏、タガール(二) 里十九氏、本立、石鹼(二) 何某實は沐天常用日記(二) 十三、小夜曲川柳會遠藤傑郎畫仙紙(百五十包) 綠雨氏、樂燒箱入(六) 天王

寺支部

(參會者) 路郎先生、綠雨、洋々、麗生、憲太、双車、村樂、豆佛、日江城、童吏、狂司、苦笑、周波、鮎美、櫻果、黄蛾、東洋鬼、夕鐘、竹樂、柳浦英郎、萬よし、まさし、琴人、鶴峯、正統、柏木美技雄、信吾、靈壺、沐天、公二、豆秋、櫻園、金太樓、蒼太、柳英、さだを、宵果、夢裡、靖弘、多郎、無鬼、多聞、夏曉、竹石、格子樓、源坊、飄山哲郎、默平、泉流、桂枝、木馬、觀月、卜居、節子町二、芳村、山抱子、黑天子、卯三、稜人、北人貴山、四五磨、一水、白雨、八念、山雨樓、陽喜亭、春秋、明珠、華水、竹風、かほる、雨町、山月、翠夢、圓角、喜一、二南、愚陀、勝三郎、里十九、あきら、白柳子、雅幽、亂歌、石竹、新水三碧、いわを、ひろし

兼題 麗人 路郎選

麗の本家は西の本願寺 泉流
麗人に似てゐるとかで世に知られ 無鬼
泣き聲も聞かず麗人子を育て 苦笑
エス様を信じ麗人丈高し 明珠
麗人もまたへをそれとなく詠めり 鶴峯
麗人のあれが素顔の美しくさ 方眼
十年を麗人夢のやうに過ぎ 柳笑
麗人のとりこになつて無事にある 日居
麗人の子を抱き、嗚に怯へたり 夕城
麗人へ麗のを、鳴く、囀に於て 卜居
居留地に麗人と歩調あはずなり 麗人の眼にも世間のあわたし 麗人の愛も、う個人的でなし 麗麗人は凸面鏡へ寫して見 春多
水仙を生けて麗人机にお 秋

麗人も三人寄れば笑ひこけ

麗人に子のないことが苦になつて

麗人へ菊はいよ〜白いなり

麗人の掌にすくはれた草の露

麗人も共にゆれたが 眞員車

麗人の理性が強く春を見ず

眞實に笑ひ麗人はつとする

燈人の夢にますしい子が纏ひ

花園に立てば麗人春が高し

麗人のフオーク抄巧がなきすぎる

罪もなき涙の種よ尼とする

み佛の膝へ麗人泣き崩れ

麗人は曾我が家フアンの一人なり

柿の葉は赤く麗人瘦せてゐる

麗人に名古屋は久し振りのとこ

麗人の涙字となり歌となり

麗人へ赤い椿をたおらばや

麗人へ宿のお膳の鹽こんぶ

麗人のそのおしなみに近寄れず

おかしくも麗人やゝを産みにけり

麗人と密柑と火鉢松の内

ネカン見つめて麗人の戀

麗人へ欄間は菊の透し彫り

麗人のいとも憐れに歌を書き

葛青く住んで麗人ギダを弾き

(客)麗人へ氷柱の溶けきらす

(客)麗人の肩へ狐の皮はきれ

(客)よせつけぬ様に麗人歩ひて居

(客)麗人へ男の頭の動くこと

(客)麗人の座れば観音様に似て

木馬 豆秋 櫻果 蒼太 不着子 喜一 卯三 陽氣亭 金太樓 雨町 新水 亂耽 萬よし 多聞 かほる 東洋鬼 鮎美 同 豆佛 同 柳甫 同 琴人 同 琴人 同 愚陀 華水 綠雨 山雨樓 双車

(人)不生産的に麗人培はれ

(地)麗人の蔭で夫のうごくのみ

(天)羊の春なでて麗人氣がまざれ

(軸)麗人の東都をあとに金のかた

兼題 問屋 萬よし 選

國産は問屋の倉に欠伸する

問屋らしい奥行見せて暖簾の字

勘定に入れて問屋は飲ましてる

天水が軒に古びた大問屋

問屋もう尖端を置く居の柄

親譲りの職を問屋はほめて居る

袖下へ問屋同志の智慧があり

冷淡をかこの問屋の金を借り

問屋の土間にびく〜動くひれ

親からの分を問屋は棒を引き

實だめが貯れば問屋取りに来る

ストックを自慢にするも問屋なり

問屋へも廻つても土地での問屋株

見劣りがしても土地での問屋株

運勢を考へながら問屋町

米問屋明日食ふ米は別に買ひ

チベ下駄に小僧出て来る大問屋

タバコ屋の店が明るい問屋筋

工賃へ不服云はさぬ問屋なり

戦争でもして呉れればと問屋いふ

差押へられた問屋の釘の跡

其の上には家賃がはいる問屋なり

値切られて問屋のことも話すなり

塵を越え荷物を越えて問屋街

大阪の色に光つた問屋の戸

朝の荷へ問屋は奥を覗かれる

源坊 日城 靖弘 路郎 苦笑 竹風 瓢山 四五磨 柱枝 櫻園 華郎 哲果 宵平 默人 北人 英居 黃蛾 靈珠 一水 白柳子 さいだを 金太郎 夏水 新曉 觀月 貴山 愚陀 二南

リヤカーの音へ問屋の朝はあけ

問屋まだ暗さの中へ儲けてゐ

寒さも寒し問屋の朝をゆき過ぎる

夜の灯にさく問屋の人の呼吸

紙問屋三俵ばかり放り出し

問屋閑いちんちラザオ鳴つてゐる

不渡りの手形問屋にたまるなり

こんなものあると問屋のまがひも

問屋から来たばつかりいふ埃

物乞へ問屋は稼ぐばかりなり

一銭のこを問屋で値切られる

問屋まで届ける母の手内職

夜業した品が問屋でベケになり

長い名を襲名さして大問屋

卸値にしかかやならぬ知つた仲

あの店のゆけぬを問屋知つて居り

(客)委託とは見えぬ問屋の山を積み

(客)今着いた見えぬ問屋の山を積み

(客)店一戸借りて問屋で候の

(客)店一戸借りて問屋で候の

(客)遣り繰りかす問屋の戸を叩き

(客)問屋今日怪しからぬ値を聞か

(地)小使の問屋で字を買ふ話

(天)改めて問屋宣傳すると決め

席題 豫感 山雨樓 選

電話口やさしい聲に好い豫感

ネクタイを結び直してゐる豫感

病葉の冷たく濡れて知る豫感

怖ろしい感に寝た子を振り返り

朝つから女中茶腕を破る豫感

あきらめてゐたがやつぱり首に

黒天 沐天 石竹 鮎美 琴人 町二 東洋鬼 路郎 日日城 同 山抱子 同 豆秋 同 櫻果 同 夕鐘 同 柳笑 同 公二 同 源坊 同 二南 同 靖弘 同 鶴峯 同 不路子 同 狂司 同 卯三 同 柳笑 同 裸人 同 夕鐘

あんまりな豫感に母は黙(もく)してお
 ローソクの灯のしづけきに豫感
 朝からの豫感重役(しやく)ら呼(よ)び
 運(うん)の来る豫感に觸(ふ)れた初詣
 汽車賃(きしゆちん)のツケを忘(わす)れる胸(むね)さはき
 晴(は)れてゆく空(そら)へ豫感(うすらい)で
 ヲナ電(おなでん)へ昨夜(けさ)の夢(ゆめ)の當(あ)りすぎ
 男(おとこ)の子生(う)まれる豫感(うすらい)きゝあきる
 そんな氣(き)もする。姉(あね)はキチンとあ
 豫感(うすらい)を外(はず)にシゲナルの明滅
 妻(つま)の心(こころ)のアラびまじしは知る
 豫感(うすらい)より一層(いちじよう)ひまじしは知る
 豫感(うすらい)かれる豫感(うすらい)のうちに年(とし)を越(こ)し
 氣(き)になつてならぬ豫感(うすらい)へいいきれ
 女房(にようばう)の豫感(うすらい)は呑(の)んで來(こ)るにきめ
 くしやみする豫感(うすらい)の内に半(はん)分(ぶん)聞き
 女(によ)の顔(かほ)に何(なに)を知る氣(き)ぞ
 ドア(と)冷(ひや)たく豫感(うすらい)のみあせり
 無(な)氣(き)味(あじ)なる豫感(うすらい)へ暮(く)れて燈(あかり)をみる
 豫感(うすらい)を寒(ひや)く出勤簿(しゆくちんぼ)おす
 (客)革命(くわくめい)の豫感(うすらい)に狂(くる)ふ暴(あらし)風(かぜ)雨(あめ)
 (客)豫感(うすらい)がなしく吹(ふ)き雪(ゆき)を衝(つ)いて
 (客)昇(のぼ)り給(たま)はる豫感(うすらい)笑(わら)ふてばかりある
 (客)藥(くすり)取(と)りもしやと思(おも)ふことも
 (客)口(くち)瘻(ろう)の通(と)りに秋(あき)に逝(い)きました
 (人)採(と)用(よう)をして呉(くれ)うそな應(お)答(と)問(もん)
 (地)よきことの今日(けふ)は粥(かじゆ)を煮(に)る
 (天)滅(めつ)りの豫感(うすらい)語(こと)らず夕(ゆふ)の膳(ぜん)

明珠 春秋 碧果 雙平 金太樓 黃蛾 沐天 靈壺 二南 貴山 新水 萬年 亂耽 黏美 かほる 路郎 木馬 同馬 愚陀 同人 同人 若太 町二 豆佛 陽喜亭 公二 町二 豆佛

席題、嘸
 あれ買(か)へよ是(こ)れ買(か)へと財布(ざいふ)嘸(な)く
 嘸(な)きは朝(あ)まを磨(こ)ぎながら
 嘸(な)くにゐる顔(かほ)附(つ)けはつとかれ
 寄合(よしか)の隅(ぐ)に嘸(な)く聲(こゑ)があり
 嘸(な)きを聞きながらすほなれて居(ゐ)す
 嘸(な)きの中に貧(ひん)しい事(こと)を知(し)り
 闇(やみ)の嘸(な)きへついで行く
 誰(たれ)知らぬ嘸(な)き風(かぜ)がきいてゐる
 夜(よ)がふけて嘸(な)く聲(こゑ)を聞きとほる
 懸(か)取りは嘸(な)く聲(こゑ)を聞きとほる
 冷(ひや)やかな嘸(な)きに成(な)るらしい
 人(ひと)目(め)をも憚(おそ)からず女(によ)の嘸(な)き
 嘸(な)いてゐれば金策(きんさく)かと云(い)はれ
 借(か)りに來(こ)て隠(ひ)室(しつ)の小聲(こゑ)氣(き)にかかり
 嘸(な)げば月(つき)も無(な)心(しん)と思(おも)はれず
 嘸(な)がすめば泣(な)き聲(こゑ)聞(き)えて來(こ)る
 情(じやう)熱(ねつ)を捨(す)てるとボストンに嘸(な)やかれ
 満(み)たされぬ氣(き)持(も)サフランに嘸(な)やれ
 嘸(な)きが姑(こ)の氣(き)嫌(きら)害(がい)れたり
 成(な)り立(た)つたときで嘸(な)き聲(こゑ)を出(だ)し
 やりばなく甘(あま)い嘸(な)やきに眼(まな)をふき
 嘸(な)きの端(は)に洩(そ)れ聞(き)く金の嵩(たか)い
 父(ちち)のない子が嘸(な)きに泣(な)いてゐる
 嘸(な)きへ當(あ)付(つけ)で女(によ)が何(なに)か言(い)ひ
 締(し)切(き)つた襖(たね)に女(によ)將(まさ)が路(みち)次(つぎ)の中(なか)
 嘸(な)きは不安(ふあん)の首(くび)を撫(なで)て居(ゐ)る
 黃(わう)昏(こん)を嫁(よめ)の心(こころ)に嘸(な)きぬ
 嘸(な)げば同志(どうし)大(おほ)きな耳(みみ)を貸(か)し

人選
 周波 夕鐘 黃蛾 明珠 明五磨 不路子 柳笑 柳甫 竹風 竹石 櫻果 公夢 翠太 若亭 陽喜亭 艸樂 狐山 雙車 白雨 白柳子 いわね 櫻園 苦笑 ト佛 豆佛 童一 喜支 默平 新水 亂耽

嘸(な)きの庭(にわ)に椿(つばき)が落(お)ちてゐる
 嘸(な)きの耳(みみ)指環(さしわ)を光(ひかり)らせる
 嘸(な)げば彼(かれ)がこちらを向(む)いてゐる
 クリスチャン神(かみ)の嘸(な)き聲(こゑ)がする
 嘸(な)きをふつくり越(こ)しして鼠(ねずみ)逃げ
 嫁(よめ)を貰(もら)ふ話(わ)り越(こ)してに聞(き)れ
 嘸(な)きの別(わか)れたらしい街(まち)ははずれ
 嘸(な)きの疊(たた)見(み)つめたまゝで聞(き)き
 嘸(な)きへロイド眼鏡(めがね)が光(ひかり)つて來(こ)る
 嘸(な)きは大きな聲(こゑ)で笑(わら)つて立(た)ち
 嘸(な)きを漬物(つけもの)部屋(べ)で嘸(な)いて來(こ)る
 嘸(な)きの片(かた)手(て)にバケツ(ばけつ)持(も)つてゐる
 嘸(な)きの氣(き)轉(ま)りかした話(わ)すする
 嘸(な)げば榨油(せきあぶ)の香(かほ)がたかじ
 陽(やう)のなかに嘸(な)く指輪(さしわ)ひかるなり
 嘸(な)きの寒(ひや)むがつてゐるのも聞(き)え
 嘸(な)きへはるかに汽笛(きふく)な聞(き)て居(ゐ)る
 轉(ま)寝(ね)に蠟(ろう)のきやき聞(き)きたり
 嘸(な)のまたゝびきんの毛(け)のふるゝ
 (客)嘸(な)きの二人(ふたり)へ近(ぢか)く水(みづ)がある
 (客)嚙(か)面(めん)へ妻(つま)嘸(な)いて呉(くれ)るなり
 (客)病人(びやうにん)の眼(まなこ)は嘸(な)きへ光(ひかり)るなり
 (客)人生(じんじやう)を柳(やなぎ)流(なが)れに嘸(な)きて
 (客)嘸(な)いて君(きみ)の笑(わら)ひを買(か)ひたがり
 (人)人(ひと)形(かたち)へ嘸(な)くやうに啞(お)ある
 (地)嘸(な)きの中(なか)を葬(おほ)列(れつ)進(ま)むなり
 (天)故郷(こきやう)へ歸(かへ)れと波(なみ)が嘸(な)いた
 (輔)嘸(な)きの一二(いちに)語(ご)を僻(へ)む耳(みみ)が聞(き)き

山雨樓 路郎 狂司 同々 同華 同水 裸人 同同 同月 同美 同幽 同竹 同石 同果 宵二 町二 金太樓 あきら 路郎 靖弘 豆佛 周波 雨選 日日城 喜一

大根がすつげりぬけて肌寒く病上り大根おろしが苦いなり

石竹 夕鐘

大根は庭へ置いとく二三日

同 美 結

花嫁の大根を洗ふ土堤を降り

同 月 結

(人)大根の葉が風呂敷の外に出て

同 月 結

(天)大根へにんまり笑ふ父と母

同 月 結

(天)すつげり大根は丸くまき切

かほる 結 美

(軸)大根へほんまの話續けられ

かほる 結 美

兼題 力 瘡 新 水 選

力瘡女の智慧をかりにくる

石竹 同 居 美

あぶれてる人夫の腕の盛りあがり

ト 同 居 美

力瘡冷へたビールへ腕がのび

同 月 結

力瘡見せて片輪のよく働き

同 月 結

息子には負けない父の力瘡

同 月 結

やはらかい手にたゞかれし力瘡

同 月 結

(人)元結がぶつゝり切れた力瘡

同 月 結

(地)力瘡養父の眼にも頼母し

ト 同 居 美

(天)力瘡ハンマーを高く妻よ子よ

ト 同 居 美

(軸)病む亭主持つて女房の力瘡

新 水 結

兼題 身投げ

かほる 結

蝶六の身投げへみんな笑ふなり

夕 鐘 結

身投げする袂に寒むい風があり

夕 鐘 結

身投げ今よつばご遠い鐘を聞き

ト 同 居 美

その身投げ磯の匂ひのたかくして

ト 同 居 美

川柳 御旅支部例會 (大阪) 雑誌社 十一月三十日 於いし堂 櫻井圓角報

兼題 寢返り 路 耶 選

寢返りが苦痛だと云ふ母は老ひ

路 耶 選

寢返つて見りや天井の低いこと

多 耶 結

二人寝る夜は寢返りも口説なり

翠 夢 結

女房の寢返り嵐ひとしきり

靈 壺 結

寢返りへサンタクロースはつと

同 結

寢返りの患者へ濟まぬ飯を食ひ

同 結

久しぶり寢られぬか父又話し

同 結

寢付かれずブルの惱みこんなの

同 結

(人)寢返りへ看護のものが立ち上り

翠 夢 結

(地)寢返つて夢の正体さがして

み 夢 結

(天)寢返りの序に子をば調べて

ちとせ 結

(軸)寢返りに子が考へを變へさ

路 耶 結

(同)寢返りへ碁碁四角に構へたり

同 結

兼題 額 路 耶 選

親の目に啗巧に見ゆるおでこの子

ちとせ 結

夕飯へおでこ揃へて感謝する

靈 壺 結

相妓の額に皺を見て歸り

圓 角 結

油ぎる額にきつい誘惑が

多 耶 結

金ももう出来た額の艶やかさ

翠 夢 結

(人)おでこでもいゝママの袖に泣

靈 壺 結

(地)青疊額をつけて馬鹿にする

多 耶 結

(軸)こけて来る子に綿入の空

路 耶 選

兼題 大出 路 耶 選

君大學出かと重役に云はれ

翠 夢 結

大擧出まだ身に入らぬ椅子に居る

靈 壺 結

(人)婚席へちよこなんとも大學出

圓 角 結

(地)抜けたよな話をするも大學出

多 耶 結

(天)あげたかへ大學出とはちよこ

靈 壺 結

(軸)ならつてる筈に大學出は困り

路 耶 結

兼題 人 妻 路 耶 選

人妻から女の愛を聞いてゐる

み 夢 結

人妻の仲居と知らずたわむれる

多 耶 結

けうとくも人妻になつた娘に逢ふ

翠 夢 結

(人)人妻は線の堅さが目に付いて

圓 角 結

(地)その戀は人妻だつたことをき

靈 壺 結

(天)人妻のその愚さに惚れてゐる

翠 夢 結

(軸)人妻の顔半ぶんを見せたきり

路 耶 結

(同)人妻のあほらしいほご寄添

同 結

川柳 加古川支部例會 (兵庫縣) 雑誌社 十一月十五日 於松野軒 水田光穂報

兼題 雲

雲行に裾をかりげて大師講

篤 男 結

走り雲やんわり前の雲に溶け

同 結

曇つたり暗れたり嫁を取る日まで

同 結

船頭の云つた通りに雲が伸び

光 穂 結

出奔へ雲のかつた富士が見え

同 結

氣にかゝる雲にアツく糊が煮へ

同 結

雲掴む様だと心配見放され

泰 山 結

地にれんげ雲に雲雀の鳴きつれて

洛 陽 結

船頭に苦手の雲が伸びて来る

美也光 結

川柳 天王寺支部同人句會 大阪

雜誌社 十二月一日 於内藤製作所 丸山公二報

席題 生活

生活があの卒業を待つてゐる床の間の軸生活にかけはなれ生活とは別な態度で暮かこみ一人者生活と別な錢も費り生活に茶碗のかけるのも嬉し生活のことも氣になる戀にして

兼題 花輪

三日間粗品進呈する花輪とむらいを花輪なんぞで賑やかし花輪から抜け出して来た役者なり部々逸が花輪をぬけて聞えて来花輪からちよい女給首を出し喜びは花輪の中に埋もれて葬送の花輪悲しきもの内旅役者花輪の數へくたびれるパトロンは花輪へ小そう名を連れ

兼題 風

生きてると風を音信に聞かされる風の子の腹痛は葬式の夢を見て寝ておればよつぽごきつい風の音腕組の男へきつい風が吹き病みより風の當らぬとこへ起きあてどなく歩く背中に風があり貧しさがつくつく辛い風の夜振り向けば風が落葉をもつて行く風が吹く度に土砂降り音を變へ

裸選 二人 柳精 同 雨町 同 豆秋 選 柳精 同 海人 同 裸人 同 公二 同 雨町 同 武蔵坊 選 海人 同 鶴峯 同 裸人 同 雨町 同 公二 同 豆秋 同

川柳 鶴町句會 (大阪)

雜誌社 關本雅幽報

町内

町内の義理女房の智恵を借り町内に子供ばかりが殖えゆき町内の顔役揃ひ寄附の事金出來て町内のうるさくなりぬ

新年

紋付の袂に残る花名刺新婚えみな美くしい年賀状十八の正月の顔撮つておけ酔ふて出て酔ふて戻つてお正月

川柳雜誌社 聯合句會の日 (神戸)

神戸支部 十二月七日 往路車中にて 日野華水報

汽車辨

驛辨屋顔がかくれる程つんで(人)汽車辨の甘いものちが食さる(地)汽車辨を先生包んで下り行き(天)汽車辨へ五十哩をうたれる(軸)汽車辨へ山の姿が動かない(同)汽車辨の残り親がたしなる

高橋かほる氏宅にて エレベーター 互選 エレベーター二階の足登つて来特實エレベーターのつまりすぎエレベーター二つ並んで見返へるエレベーター未だ撰つてる娘に出合ひエレベーター一ばん上の風が来る

此の人も食堂へ行くエレベーター 同 刀 かほる選 人斬つた刀へ行燈更けてある切つた様に見せる刀に銀をはり舞臺今金の刀を投げた音 同 舞臺今金の刀を心押へてる (地)刀見る無言を女房心得る 春秋 (天)名刀を敵は金にして了ひ 春秋 歸路車中にて 蜜柑 明珠選 長火鉢蜜柑へ思案續けてお 春秋 蜜柑の皮を踏んで下足へ 春秋 (人)意見する方へも蜜柑配られる 春秋 (地)美しい女に蜜柑吸はれける 春秋 (天)オーパーへ蜜柑を入れて酔記 明珠 (軸)熱のある顔へ蜜柑をきいて 明珠 讀まれてる我句へ膝が固くなり妻もあり子もあり明珠道を急きたしなまぬ酒竹風は聞くばかり 同 川柳 加古川支部句會 (兵庫) 雜誌社 十一月二十二日 於光穂居 水田光穂報 柿赤し千切る娘の帯赤し 美也光 柿の葉が鳴る母のわるい日 篤男 柿ころりへ子供のお客様 同 柿一つ冷へた大地に當る音 同 柿を泣かした柿の木でもあり 泰山 柿の木の雀狙はぬ先に逃げ 洛陽 合はし柿嫁のたへたをうなづきぬ 同

樽柿にのぞ冷いやりと秋を吸ひ
光穂

すき焼に丁稚の帯の固たすきて
光穂

込み入った話牛鍋ちとおろし
泰山

すき鍋がたんまり食つて後家淋し
泰山

すき焼へ次男は箸を待たされる
同男

すき焼ばかりつゝいてるいげぬ口
同洛陽

すき焼の酒が頭へ来さうなり
同洛陽

川柳雜誌社 霜月句會(神戸)
神戸支部

十一月廿二日於八宮神社内楠町事務所
日野華水報

當日は他社句會と同日になり出席者少數、し
かし熱心なる作句は平常以上であつた。
出席者—紋太、重陽子、桃水、昭明、明珠、春秋
二南、華水

怪人の空の寒さと別に下り
華内
煙突を下りる男へ警者が待ち
二南
怪人を見上げる傘が動くなり
同

感謝状候の字に角があり
華水
感謝状まだ十年は勤める氣
重陽子
額縁を買ふほごでない感謝状
紋太

容態を聞く肉親の細い聲
桃水
容態を云はればならぬ人に會ひ
春秋
聞く容態へうなづく丈けの母
重陽子
容態を聞けば何時もの妻の聲
同

容態へ火鉢をまるくさわるなり
同
容態を案じる鼻緒ゆるんでる
二南

容態と別に看護婦よく動き
同
寒風の何處かに隙を知る借家
桃水
寒風に素肌の意地が通るなり
二南
當り矢の聲がちぎれる寒い風
春秋
寒風にゴリ、ストツプもと居らず
同
まだやまぬ風に寒さを云ふて臥る
同
寒い風布圍の綿が切れてあり
明珠
古本屋を出れば寒い風が
同
(佳)つばやきや風を勢氣にもなり
二南

お隣りの奥様と會ふ奉仕品
華水
買物の母をいそがす風があり
明珠
買物の包を子供持ちちれがり
桃水
風呂敷を開けば一つ買ひ忘れ
同

兼題 號外 二南 選
號外は今支那人の耳掃除
桃水
號外はやつと主席へ届けられ
南耕
號外へ立とうとせぬ手内職
重陽子
だらうと思つた號外讀んで
紋太
號外にみんな好い顔してゐる
かほる
出前持まだ號外を讀んでゐる
竹風
好い事のない號外へ人は寄り
同
號外を脊廣は下駄をはいて待ち
華水
號外へ男同志の顔を寄せ
同
(佳)號外を墨圖々々讀手へ渡し
紋太
(轉)號外を覗けば人の息がくる
二南

川柳雜誌社 猫柳例會(石川)
小松支部

於山屋寫眞館階上
兼題 柿
上野錦水報
思芥郎選

寫眞說明、十月八日川柳作品展覽會席上撮影
(前列向つて右より)支部幹事上野錦水、
南柳三、猫柳編者梶井井々樓氏、會長辻井柳
鳩先生、魚川柳々子、伊藤思芥郎、八田盜鐘、
(後列)馬場萬魚、寺田白山坊、市原東風、
内田北山人、山香美兎月、小野寺松雪堂、三波
富久雄、野村松水。



お客今更濫いとも言へず
柿落ちて又盆裁の位置を替へ
湯女へ柿をかせてドラ醉ふる
残つては柿は母ちやん落されず
(佳)爪のあと立て、残した濫い柿
(佳)病室へ心ばかりの柿の色
勇よし

銀雨
千華
北山人
千華
猛郎
勇よし

爪先を冷めたく秋の夜を歩き
落葉する音も聞いてる秋の夜
端然と坐れば秋の夜は滅入り
思芥郎

北山人
萬魚
思芥郎

屋根傳ひ瓦くづれた音になり
物置の屋根へ上れば届く柿
北山人

思芥郎
北山人

名書と云ふ事に団体立ち止り
名滿一幅質乏の底を抜け
入選のその日を二科へモテル来る
北山人

柳塙
北山人

(秀)入選の喜び裏に血の涙
(同)拜領名書が語るお家柄
(同)廣重の繪をローマで譽に来る
北山人

逸紅
北山人

勤先母の便りに涙ぐみ
勤先辨當が届く噂の娘
勤先だけでチームが出来てゐる
自家用で社長が来るとドンが鳴り
勤先今日も規則にぶつかり
月掛けの催促が来る勤め先
エプロンを着ると女給その氣持ち
(秀)勤先振るば失業日が浅い
柳塙

柳塙
萬魚
北山人
富久雄
思芥郎
北山人
柳塙

川柳
雜誌社
螢ヶ池支部句會 (大阪)

十二月十三日
第一流報
久しく休會して居りました常支部も此度熱
心なる多數同志の希望により再び活動す
ことになりました。まづ十二月十三日日本社よ
り綠雨、雨町の兩氏及鶴峯氏の參會を仰いで
盛大に復活句會を開きました。

兼題 復活 綠雨 選
復興にバラックがだん／＼消える
復活のために盆裁ほつとかれ
復活の意味で物持は直ぐ推され
復活の街へ来てちと迷ふなり
復活の席へ嬉しい顔揃ひ
復活の希望ばかり聞かされる
復活に空に花火の音がする
復活に母は立つたり坐つたり
復活の微笑へカメラ向けられ
吾が薫を謳歌して知る返り咲き
復活へ皆んな嬉しい顔になり
二度目のランデブー

英三
獨子
俊柳
水馬
鬼子
白眼
白寵
照夫
奈緒美
石松子

少うしは敵もつくつて復活し
復活へたゞ一心に動ける
復活の願ひへ店主考へる
復活の報辱長は緊張し
(佳)復活を誓ひ故郷を後に張る
(同)復活の希望に立ちて療養所
(同)復活の町に變りぬ水の色
(同)復活の結局噂きりになり
(同)復活に苦しみ拔く基礎に立ち
(同)復活に向ふ鉢巻しめ直し
(同)復活はしたが同志の一つかけ
(同)復活は俺もうっかり居れず
(軸)復活に協力一致が強いなり
兼題 運動 雨町 選

雨町
半平
銀花
清美
浪子
浪花
精舟
湖舟
紅峯
鶴薦
愚郎
愚龍
六華
鬼子
詩樓
靜流
清花
道喚

六十七

スタートへ一年生も緊張し運動會來賓席は空いて居り示威運動女子の参加に奇聲あげスパイクの紐しめなほし駆けゆる抜い來たマラソン、ゴーストツブ上過運動費まづ一杯をかたむける運動はやつと廓下の行き戻り運動へ今日の天氣を氣づかはれ体操の甲で平均取れて居る運動もよしが貴耶に此の寒さ運動も散歩ぐらゐと病んでゐる補回戦規程が合ふたホームラン都會詩へ綠化運動ふさはしく運動が過ぎたか顔がちとほてり運動になると作業を命ぜられゴルフをやれば紳士だと言ふプロ運動が流行だけでやれるかい

紅玉 柳俊 長二郎 奈緒美 梨風 白眠 可章 伊勢子 津浪 紫海 杜平 石松子 照夫 虹雨 同 康天 同 水馬 タグシ 六華 理翠 紫海 英均 鶴峯 長二郎 照夫 英坊 雨町

座題 靴 鶴 峯 選
靴と靴ふみ合ひそに踊つて破れ靴今日も感謝で履いてゆきお土産に貰つた靴に愚痴が出る
モザイクへかなりみぞハイヒール除隊兵靴にも淡い名残り新調の靴は人出をよけて行き眠れぬ夜守衛の靴の遠くなり靴音を知つて女中は出迎へる靴音に悪口一寸息を入れ靴の紐を小犬が一才息を出る靴の粗むすぶ手元へ櫛が落ち踏切で立ち止つてる靴の跡ぬかるみ逃げてやる靴は行き生活のつかれを見せ靴がへり編物の妻立ちかける靴の音靴はがれまゝに二年を病んで酔ひざれの靴たよりない歩きぶり新調の靴へ退院日がせまり妻の心の通つて今朝の靴幼な子は靴さかきにも付けて居り回診を廓下の靴の音で知り磨けご／＼靴の光りくれず就職の報らせ懐しい靴で來る靴音に腰を浮せて御用聞き何時までも更け氣が靴は破れたり巡回の際も穿いたらし靴の音此頃の生活靴を遠ざかり給仕もう一人前の靴をはき靴下のやぶれ氣にして初對面

英三 白眠 喜久兒 喜代志 津浪 六華 康夫 石松子 綠雨 杜洋 富久助 長二郎 春柳 紅玉 柳俊 都久路 雨町 愚寵 水馬 照夫 同 一流 同 奈緒美

急用へうまくむすべぬ靴の紐お役所になじみの顔もある靴屋も捨てる氣の靴はけるだは穿き座題 押 五
友といふ顔で半分賣はされる賣り手より娘 断り上手なり押賣の聲が奥まできこえてき押賣をかへしてホツト食べなほし新妻は断りきれず今日も買ひ押賣と同じ正なり帽子なり執拗に物賣る孤兒を叱つた朝押賣へ遂に根直けしてしまひ押賣へ最後の言葉投げて立ち断りもきかず押賣り開きかけ押賣は毛虫のやうにいやがられ押賣は小供へ一つ持たしとき押賣はまわれぬ口で子は返し押賣は人の情を食ふて生きた押賣は不用な品をならべ出し買はず氣の押賣腰を落着ける押賣はまだ／＼買はず氣で座り押賣をからかつて見る日曜日押賣へ威嚴を見せる亭主なりもつともな話をきいて一つ買ひ押賣が隣へ走る留守の妻押賣を買ふてもみたが使はれず押賣へい／＼氣で夜番相手をしお歸りになつて押賣断はられ押賣を大うさんくさうにかぎ押賣へいらぬものは要りませぬ

同 虹雨 同 選 一流 紅美 奈緒美 百萬石 百坊 津浪 英三 鶴峯 タグシ 杜洋 綠雨 喜代志 同 都久路 同 照夫 同 峯月 同 石松子 同 道喚 同 虹雨 同 富久助 同

（秀）反逆の血は沸き血は五月雨
（同）政變へ有象無象の動く心と
（軸）運動へいつそ跳び込む者

話しくも親子の心火箸知る
火箸いじつて桃割の戀
便り主税選
女文字だけそれだけで騒がれる
年賀状に海水浴の禮も書き
其の後は酒もつゝしみ居り候
（軸）十八の手紙感傷的になり
慰めて呉れそんな叔父黙つて居
慰めの言葉も既にきつ馴れて
慰めの瞳へ微笑して返し
水淡の愚痴待たされた事を言ひ
水淡を氣にする基には買けてある
髯邪覓らしく水淡光るなり
（軸）水淡をかむにも見ゆる父の瘦せ

繁坊主税選
博水
紅子元
主税選
木馬
子元
柳甫
波計選
光路選

かほる町二封座吟

十一月廿九日夜

かほる居にて

逢 曳、鳥

逢曳へ煙草屋の灯がとくなり
逢曳へ地蔵の影が長くなり
鳥いま丸いはらの方へ来る
逢曳の眼鏡が曇る霧の中
逢曳のそばで三月月尖つてる
空氣銃へ鳥こつちを向いてゐる

ひかり集（その三）（大阪）

水谷鮎美報

正直は鍛冶屋の音に眼をさまし
正直
卜居

正直はそれを許しませんでした
正直はすこしの事に眠られず
はちまきをこして正直な男にて
正直なことを主人に叱られる
正直な話へお茶が冷へてゐる
正直に云へば愚人だとわかり
正直な丁稚日傘をぢやまにする
雨の晝正直者は米をとぎ

佐々木三福氏を迎えて（鳥取）

十一月二十七日

中島鐵州報

三福氏の郷里は山陰線青谷驛（青谷町）社用
で上京歸途二三日滞在するから逢ひに來な
いかとの御手紙で早速御目にかかつた。初對
面なれど三時間に渉り漫談、再會を約してお
別れした。一日置いて午後來訪を受けた。早
速源太夫君をして同人に急報、鴨山君の斡旋
で會場準備六時から浦吾樓に於て心ばかり
の歡迎會を開催する。

醉 心 地

此の醉をさめよと宅の電話來る
醉心地フト遊 の子を思ひ
醉ふ事のあつて浮世の面白し
醉心地階級も女く口を利き
おとなしく注ぐ女房へ氣の滅入地
譯もなく雅量を見せた酔心地
（軸）湯豆腐が踊るよ秋の雨も宜し
（同）鞭のがれて地酒にほる酔
選後紅裙酒問を斡旋し、三福氏の長唄の勸進
帳、鴨山君の歌澤は何れも素人ばなれの喉に

ヤンヤと云はせて、散會を惜んだ。
此の夕、三福氏は新興川柳に對する意見の一
端を話され非常に得る處があつた。

かほる居偶會

高橋かほる報

其 の 一

見物へ助太刀邪まなごこにゐる
助太刀の口から飛んだ妻ようじ
冥縁と思ひ羽織の影にゐる
相談に羽織をはれて座るなり
盃へ座長は義理を考へし
座長又十九の頃を思ひ出し
右の句を作つてからさア川柳は濟した
これから芝居を……と成り二南氏の近藤勇
私の騎菊でほんまによろしおましたで

其 の 二

幻は春の襖のものなれや
幻の女は裙をひい來る

川柳 蟹ヶ池會（大阪）
維誌社

救世軍 救世軍 豆秋選
救世軍手を上げて空へなにか言ひ
飯を食はせば救世軍も信じよう
救世軍踏切へ来て聲が止み
救世軍こらで話す歌の切り
救世軍あわれな人と呼びかける
カフエーに聞える様に救世軍
心アラの足をとどめる救世軍

新誌友

(五年十二月十九日まで)

「川柳雜誌」前半年分壹圓八十錢以上拂込みの讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勧誘下される様御願申します。御紹介下さる方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい(縁雨)

谷口噴二、石崎千傳、丸島利三郎、西島茂治、尾崎明晴、土居隆磨、西村義則(柳秀)、姫田夕鐘、天野下居(梅田支部)、岡本三木雄、丸矢正一、(山雨樓)野口畔曉(神戸支部)、高道文雄(路郎)、(青山三平)雅幽(紀平涼哉)、山田鳥莊(多聞)、福田鶴峯(縁雨)、古谷愚圖坊(山月)、大橋龜雄(無鬼)綿谷雪、尾崎澤洋人、辻清好、坂本朝一、瀧口語、戸倉誠司、北澤榮次雄、蛭子ます女、酒井喜三、久郷淳二、正木翠舟、吉川啞人、國安厚夫、阿部佐保蘭、倉吉苦笑、幸松四五郎、青木用訂、南喜三郎、奥六造、村上榮造、田中英雄、村野健治、高見柳骨、高永弘吉、原田光果、西村山月、中内松太郎、木山真雄、山崎白水、新井俊郎、藤井義一、廣島三郎、橋本言也、樞野虎春、早川睦造、今川喜一郎、駒田白帝子、星野茂治、藤田治太郎、大窪文芳、高岡道夫、福島義伯、江村繁治、岸上秀三郎、杉岡幸泉、石曾根民郎、金田昭明、寺地卓二、高橋雀、釜本柳精、榎岡兵四郎、鈴木志洋、須山重陽子、阿波泊水(本社事務所)括弧内紹介者

湖舟 同哉 望夫 康華 十六 湖舟 雨選 春柳 好風 梨夫 九品 奈緒美 喜代志 虹雨 湖舟 紅玉 水馬 望 道喚 助六 畫郎 杜洋 長二郎 油濱 一流 失業者救世軍になる氣なり 救世軍を尻目にかけて懐ろ手 (佳)讀美歌になつて提灯唱ひ出し (同)救世軍泣を曲つたらしひし聲 (同)淋しい心を救世軍の太鼓(たこ) (同)救世軍悪んでくれた手先見る (同)救世軍暗に眼鏡が光つてゐ (同)親を泣かしたことも救世軍 名刺 縁 雨 選 名刺をくづる年始なり 松かざりて名刺が残りけり 受付は顔と名刺を見くらべる 名刺とは別に惨めな暮しよう 今日生まれ名刺とサンブル持出。 名刺みながら給仕知らせに來 ウエトレス別な氣持の名刺なり 肉筆の名刺見て居る内に出來 戀をした時の名刺が残つて居 舊友に逢へば肩書のある名刺 小使も名刺は同じ勤め先 貴名受ないしよの様にに入れて行く 雲水の名刺もやはり活字なり 二次會の帽子へ差した花名刺 またと云ふ顔で名刺をながめて居 失戀の怒り名刺を破つてる 新妻へふと目にとまる色名刺 用件に添へて名刺はものだから 故郷にある母へ名刺も入れてやり 名刺受違いたい人の名刺が出

喜久兒 好郎 石松子 水馬 愚寵 ふく助 銀花 畫郎 道喚 杜洋 助六 汕濱 旬郎 獨子 半平 清坊 紅柳 紅薦 あざみ 勇 清 正夫 可章 同樓 同二 長二 同 同 同 同 救世軍の大鼓へ犬が吠えかゝり 寺の門救世軍も雨宿り 無産者に祈ること多し救世軍 救世軍へあなごり切たな窓を閉め パット買ひ釣銭を入れたり慈善鍋 救世軍士官に鍋の番をさせ 鐵路に一寸お待ちこの救世軍 救世軍きいて見る氣がパット起り 寒い町なげ出された様な慈善鍋 信じてる心で辻に立つてゐる 救世軍かとハッピは横に外れ 北風へ救世軍もさけて行き 半鐘へ救世軍の歌つづき 傳道へ夜ふけて歸る救世軍 カフエーの前から救世軍唱ひ 救世軍年末にだけ顔を見せ 救世軍何時もの場所に陣をとり 救世軍来たぞと子は走る 慈善鍋人足絶えてしまひかけ 人通り絶へて士官は鍋おろし 若夫婦慈善鍋かと横にそれ 救世軍人の爲にの頭下げ さんげした後を救世軍歌ひ 救はれて救世軍で旗を持ち 救世軍娘に席を譲るなり 失戀をしたのめ交り救世軍 救世軍ひまな女給も聞いてゐる 救世軍非常線へは無事な顔 救世軍よつぽと歌が好きと見え 救世軍いきなり軍歌から始め



編輯の窓

路 郎 生

▼明けましてお芽出度う。お蔭で本誌も八歳の春を迎えました。お互に柳運長久を祈つて乾盃いたしませう。

▼本誌を創立して川柳の社會化を叫んでから既に滿七箇年の歳月が流れましたが幸ひにして柳人はもとより一般社會に於ても漸くよい意味の川柳とは如何なるものであるかといふアツトラインだけでも知つてくれるやうになつて来たことです。當時反對してゐた柳誌までが今日では自己の聲としてこれを叫んで居ります。當初私の目指したのは大衆に向つての宣傳でありました。殊に宣傳の急先鋒にある操觚業者や教育者に向つて誤られた川柳觀の打破運動を試みたのであります。他の柳誌の如きは當然こゝに落ちて來ることを豫想してゐたので一切それ等の罵聲反聲などには耳を藉さなか

つたのですが果して今日の狀態を招來してゐる事を思ふと非常な喜びを感じます。世俗的の漫罵や物質的の壓迫を物ともせず惡戰苦闘をつけて來たのでありますから少しは酬はれてもいゝだらと思つてゐます。私がかつて發表した三十年計劃の第一期は正に完了したと云つてもいゝでせう。が、これからがいよいよ骨です。更に手綱を弛めず一九三一年辛未柳壇への奮闘を期したいと思つて居ります。相變らず御後援と御鞭鞭を祈つてやみません。

▼本號の編輯については練りに練つて新味を横溢させることに努力いたしました。編輯同人は内生活の多忙を意とせず全力を傾倒して一つに本誌のために盡くしてくれました。▼本號の好讀物としての中堅作家訪問記の如きは、寢耳に水の

來訪と新米記者の奇襲振りに、編輯局が湧返へるナンセンスを生みました。それ等については他日記者自身の口から洩らされるのであります。萬よし君を訪ねた琴人君、別に頼まれもせぬのに記者の腕前を見せるのはこゝ

だとはかりと思つたのでせう。自ら萬よし君をカメラに収めて戻つたまではいいのですが出来上つたのはなかなか、影の薄いものでありましたが、本人はフツカーカスだと云つて力んでゐるといふ始末です、中には社友の勸誘に來られたものと早合點して、その方面ばかり談されて、燃りを戻すのに閉口したのもあれば、こゝぞとばかりに平素抱懷してゐる對人的不平を聞かされた記者もあつたそうですが、そんな露骨な事は書かれしまへんと泣き出しそうになつて歸つて來た記者もあるのです。が、まあ大體に於いて訪問をうけられた人々は雄辯に語られ、意見をたゞきに行つた人々は社會を全うされたので、誌上に於いてその收穫を發表する運びとなりました。心よく語られた方々と、苦心の訪問記者の諸

君に對しては共に感謝していゝと思つて居ります。非常に興味のあるこの催をこれぎりにせず、多士濟々の關西柳壇のことです。當分この調子で續けることにします。一部の人達からの希望もありましたのでこの際「近作柳樽」のカットを私が書いて見ました。改悪でなければ餘

▼月評「卓を圍んで」を十二月號限り打切つたので愛讀者諸君から大變惜しんで來られました。あゝした研究を全然打切つた譯ではなく、二月號あたりから趣向を幾分變へて更に發表するこゝとに於てゐるのです。諸君だけでなく月評會のために十二月に里十九居に會合しなかつただけでも私達はなんだか物足らなさを感してゐるのです。▼「近作柳樽」欄を緊縮することになりました。この方が行間にゆとりが出来て讀み易いやうに思つたからです。それに内容を豊富にさせる便法の一つでもあります。當分この調子で續けることにします。一部の人達からの希望もありましたのでこの際「近作柳樽」のカットを私が書いて見ました。改悪でなければ餘

けものだと思つてゐます。

▼いくら不景氣でも本誌の「ビルディング」ばかりは股賑を極め、今日此頃になつては空室一つ見つからぬ盛況ではあります。少しく柄が落ちたやうな氣もいたしますので、落ち序でに「地下鐵」欄へもぐりかませることにして氣分の轉換を行ひました。いつも云ふことであります。なるべく短かくて氣の利いたものが欲しいのです。事の古典と尖端とはとひません。

▼新設「火華」は云ひたいことを云はせる欄であります。惡氣の内攻は柳人のこゝろを暗くするだらうことを悞れるからであります。誌上匿名は差支ありませんが原稿の一隅へ必ず住所氏名を記載して下さい。この欄の記事についての問合せには一切お答えいたしません。私はこの欄へは顔を出さないことにしました。萬一顔を出すやうなことがありますれば「不朽洞主人」の名を以つていたしますから揣摩臆測は前もつておことはりして置きます。本誌の火華はまだ充

分にスパークしてゐないやうに思はれます。次號あたりから眞の火華が散るのではないかと大いに期待してゐます。

▼柳壇の將來を深思する時本誌の使命の益々重大な事を思ひ、川柳雜誌社基金募集を劃しつゝ、

謹賀新春

昭和六年元旦

愛讀者各位、寄稿家各位、販賣店各位、廣告主各位の變らぬ御愛顧を感謝し限りなき御清福を祈る。

川柳雜誌社

麻生路郎

あります。詳細は次號に譲ります。

▼十一月號で安西杏三君が「竹馬居雜筆を讀みて」を書いたのが、はしなくも蛭子省二氏の不快を買ひました。直ちに反駁論が來ましたが十二月號は誌面の都合で載せられませんでした。

それで本號に掲げました。是非の論は別として、路郎君がゐてあんな原稿を載せるといふことは怪しからんといふ意味も多分に含まれてゐましたので、大變氣の毒に思ひましたが、意見は意見でそこに多少とも讀むべき

價值があれば幾分か或は多量に私の意見と相違してゐても川柳雜誌ではかゝげることにしてゐるのです。若い人なるが故にそれを頭から押へることはよくないといふ考へから從來でも發表方針を採つてゐるのであります。その代り反駁に對しても相當の禮義と誌面の容す限りはこれを掲載して川柳雜誌としての責はふさぐことにしてゐます

この點は充分蛭子氏に限らずごなだでも諒解して下さいてゐるものと思つて居るのであります。ただ私の案じたのは蛭子氏の健康に就いてでありました。不愉快な原稿を讀まされたことによつて一層病勢に變化があつてはその罪は決して輕くないとその

點を非常に怖れたのであります。蛭子氏の古句研究に關する原稿が有益であることは私は認めてゐますが、古句究研に關する非難に對する聲も又聞くべきではなからうかと思ふのであります

▼舊冬十六日の午前二時頃、萬よし老の案内で東京の川上三太郎君の來訪をうけ徹宵飲み明かして川柳を談じました。

▼南紀田邊の下村天五君から、私の句も掲げられてゐると云ふので詩歌中心の「白濱湯崎」を贈られました。編者も同じく柳人の雜貨貞治郎君です。同地は曾遊の地であり兩君共に知識の間なので懐しく纏きました。

▼松本市の石曾根民郎君が「川柳雜誌」を同市へ宣傳するため熱狂的應援をされてゐることを感謝してゐます。野球だけでなく戀では川柳の松本市を現出するだらうと思つて期待してゐます。

投稿規定

▼近作柳樟及課
題吟の句稿は課
葉書又は同型
の厚紙に各題
別紙に認め、
住所氏名雅號
を明記するこ
と。

▼近作柳樟は一
部又は二部の
記すれがを明
記する事。

▼各地會報は半
紙判の原稿紙
に清記のこと。

▼文章は二十字
詰半紙判原稿
紙に認めるこ
と。

▼書體はなるべ
く楷書「川柳
雜誌原稿」を
封筒に朱記す
ること。

▼締切は嚴守さ
れたし。

▼投稿其他につ
き御問合はす
べて返信料封
入のこと。

募 集

第八卷第三號課題

一月五日締切
(各題十句以内)

- ▼罰 大島 濤 明 選
- ▼硯 福田 山雨 樓 選
- ▼藥湯 中澤 濁水 共 選
- 楊 井 二南 共 選

第八卷第四號課題

二月五日締切
(各題十句以内)

- ▼髮 前田 雀郎 選
- ▼指 太田 朝陽 選
- ▼現金 出口 雨町 共 選
- 安西 杏三 共 選

每號募集

- ▼近作柳樟 (一部) 十句以内
- 麻生 路郎 選
- ▼近作柳樟 (二部) 十五句以内
- 安井 ひろし 選
- ◇近作柳樟の一部と二部を同一人で
投句することはお断りします。
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀
廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務
所宛に願ひます。

定 價

一 部 金 參 拾 錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就き
ましては本社へ直接
御一報下さいませ
ば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確
實であります▼誌代受領は送金によつて御告知願ひます▼送本封紙
に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます ▼御希望により集金
郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひますが、但集金郵便
(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には
何月號よりぞ御指が願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して
御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和五年十二月廿五日印刷
昭和六年一月一日發行

第八卷第一號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪市内西成區千本通五丁目七番地 麻生 幸二郎
發行所 大阪市内西成區千本通五丁目七番地 柳雜誌社
電話 大阪三二五一四番
電話 天下茶屋二五七九番
電話 三番地
大阪市内住吉區杭全町六〇三番地
事務所 川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話 天王寺二一六七番

賣 攤 書 店

(大阪) 大賣棚 二盛社書店。(明文堂 其他 市内 各書店)
(東京 仲見世) 玉森堂 (神戶) 米田、後藤、寶文館(函館)
石塚 (京都) 三宅 (松山) 弘文舎

川柳雜誌第八卷第一號（通卷八十四號）附錄 昭和六年一月一日

切取線

大阪市住吉區杭全町六〇二番地

川柳雜誌社 內

郵便はかき

創作懸賞川柳係
獎勵



(内以句五數句)

川柳雜誌【第二回】懸賞川柳投句用紙

住
所

氏
名

(没は反違定規)

川柳雜誌關係人々

贊助員

池澤樂居 川上三太郎 川村花菱 岡田清平 岡本直方 片岡純方 嘉納純二 田中辰秀 長崎柳郎 國枝史郎 藤本卯之助 赤井清一 末弘嚴太郎 伊藤彦造 大島濤明 岡田三面子

社員

西村明珠 石川明葉 池田雪峰 生田翠夢 社友 相森元太 森元東 蛭子省二 篠原春雨 柴谷柴舟 小前出久重 安田久流 窪田銀波 吉田美樓 吉岡清平 川村花菱

道頓堀支部(大阪市)幹事庄 万よし
 天満支部(大阪市)幹事北山 悟郎
 濱寺支部(大阪府)幹事太田 朝陽
 神戸支部(神戸市)幹事楊井 二南
 山口支部(山口縣)幹事柳川 洲馬
 函館支部(函館市)幹事龜井 花童子
 高知支部(高知市)幹事 中澤 濁水
 梅田支部(大阪市)幹事水谷 鮎美
 蟹ヶ池支部(大阪府)幹事植田 湖舟

金澤支部(金澤市)幹事中川めかく子
 田邊支部(和歌山)幹事辻 左馬
 篠川支部(島根縣)幹事伊藤藤之助
 豊橋支部(愛知縣)幹事白井 梅里
 平塚支部(神奈川)幹事酒井 駒人
 加古川支部(兵庫縣)幹事水田 光穂
 京都支部(京都市)幹事桑原 京郎
 鳥取支部(鳥取市)幹事中島 鐵洲
 別府支部(別府市)幹事木村 晃卓

堺支部(堺市)幹事友澤 貴山
 松山支部(松山市)幹事岩本 素人
 守口支部(大阪府)幹事朝田 新水
 御旅支部(大阪市)幹事櫻井 圓角
 高岡支部(富山縣)幹事越田 久水
 天王寺支部(大阪市)幹事丸山 公二
 平野支部(大阪市)幹事熊本 黄蛾
 鶴町支部(大阪市)幹事關本 雅幽
 小松支部(石川縣)幹事上野 錦水
 高知第二支部(高知縣) 長山 元水

友村觀月山 川村靈月山 片岡雙馬車 河野左馬 辻野丸山 永田めかく子 中川九水 長崎柳郎 中野元陽 中野陽子 中野陽子 中野陽子 植野路水 上野路水 桑原路水 松原路水 山本路水 山本路水 山本路水

白井梅雨里 越中蒼太 日野華水 平野竹水 森石秋竹 須崎石路 杉谷專路 同 伊藤綠之助 伊藤素人 岩崎柳路 岩崎柳路 長谷川一徹 長谷川一徹 太田朝陽 龜井花童子 高橋かほる 竹内多聞 麻生路郎 伊藤綠之助 伊藤素人 岩崎柳路 岩崎柳路 長谷川一徹 長谷川一徹 太田朝陽 龜井花童子 高橋かほる 竹内多聞 麻生路郎

編輯局(同人)

橋本緑雨 安井ひろし 松盛町 松盛町 福山 福山 安田 安田 西田 西田 田生 田生 麻生 麻生 住田 住田 田生 田生 麻生 麻生 住田 住田

謹

賀

新

年

昭和至誠團川柳の會(同人)

南海電車

山	柳	木	森	友	阿	土	太	大	山	池	半
田		山	本	淵	形	井	田	塚	田	澤	田
	天	青	黑			万	朝	堅	久	樂	梯
鳥		砂	天	貴	一	年	陽	坊	太	居	次
莊	全	郎	子	山	杉	青	陽	坊	郎		
廣	漆	河	谷	新	川	道	上	紀	内	木	神
田	島	内	口	井	戸	田	田	平	村	山	代
										さ	黄
路	万	瓢	海	游	一	骨	籬	涼	樹	だ	
風	兩	山	耳	水	壺	皮	下	哉	光	を	土
竹	吉	三	松	畑	後	津	水	柳	須	管	大
内	田	輪	島	井	藤	田	本		田		場
			格			將		天		吞	
多	一	夏	子	白	竹	吉	無		三		山
聞	稻	曉	樓	夕	石	郎	人	郎	吾	風	彦

賀 正

川 柳 鳥 取 支 部
雜誌社

川端柳社同人

鳥取市川端二丁目 谷本清 水
 同 堤 一 風
 同 中島鐵 洲
 同 上村のぼる
 鳥取市新茶屋 藏田暢山
 鳥取市立川四丁目 山下源太夫
 鳥取市川端二丁目 増田耕民
 鳥取市桶屋町 杉谷湖山
 鳥取市立川二丁目 永井伯山
 鳥取市縣廳前 澤井舌長
 鳥取市新茶屋 早川聽松

賀 正

川 柳 御 旅 支 部
雜誌社

(二一三五東電)方井櫻目丁二橋人農區東

大阪市東區粉川町一六 生田翠夢
 同 生田みつる
 大阪市東區粉川町一八ライオン工場 片桐靈壺
 同 高木習々
 大阪市東區淡路町三丁目 梅村路鳥
 大阪市東區和泉町二丁目 松田多郎
 大阪市東區島町二丁目 福田飛佐志
 大阪市東區農人橋二丁目 櫻井圓角

謹賀新年

川柳雜誌社

梅田支部同人

水谷鮎美
大阪市此花區龜甲町二の七九

川村觀月
大阪市西淀川區大和田町六三四
壺坂實藏方

大坂市港區高尾町一の三七
仁昇堂方

姬田夕鐘

天野卜居
大阪市住吉區喜連町二一九六

藤原鳴玉
大阪市港區石田布屋町三の一四五
徳丸清秀方

森石竹
大阪府豊能郡麻田村字箕輪六一五

永田里十九
大阪市南區疊屋町六

賀正

賀正

尾崎海洋人
西區南堀江下通二

釜本柳精
天王寺區大道四ノ一八

瀧口武藏坊
住吉區阪南町西三ノ五三
永瀨方

中野裸人
浪速區惠美順町二ノ三二

福田鶴峯
天王寺區北河堀町六二

須崎豆秋
天王寺區大道三
内藤製作所

丸山公二
天王寺區國分町三

賀正

賀正

川柳雜誌社
鶴町支部

西村山月
港區鶴町三ノ一九八

古谷愚圖坊
港區鶴町三ノ一九八

青山一龍
港區鶴町四ノ一九二

角田のぶを
港區鶴町一ノ二四

松下小柳子
港區三軒家西二ノ六

元吉木馬
港區鶴町一ノ六

妹尾變人
港區鶴町四ノ一六四

關本雅幽
港區鶴町三ノ一二〇

關本雅幽

關本雅幽

關本雅幽

關本雅幽

關本雅幽

關本雅幽

賀正

一月元旦

本年も相變らずに御風交

函館市

神尾三休
龜井花童子

賀正上野錦水

石川縣小松町本折町

賀正

極寒零下三十餘度支那放浪の旅

より遙かに柳友諸兄の御健在を

祈ります

同人 岩崎柳路

川柳雜誌社 平野支部

熊本黃峨

大阪市住吉區平野本町二丁目四番地

藤岡櫻果

大阪市住吉區平野梅ヶ枝町六丁目四番地

賀正

西村明珠
小原鬼笑
野口國雄
赤松千春
喜多竹風
日野華水
楊井二南

神戸市花隈町九六

川柳雜誌社神戸支部

加古川支部

賀正
金川美也光
山本洛陽
宮田泰山
水田光穂
水田篤男

大阪醫科大學

賀正長崎柳秀

南海電車

賀正池澤樂居

大阪府下高師ノ濱

謹賀新年

阿部閑生

大阪市外豊中
千歳通二丁目

賀正中澤濁水

高知市本與力町

賀正窪田銀波樓

金澤市裏古寺町
電話二七九〇番

(愛宕川神社)

賀正富士野鞍馬

東京王子堀ノ内一三四

▼僕にとつてはあまりよくない正月を迎え
えました。諸君の御健康を祝福します

▼住みなれた安堂守橋を立ち退いて、雲

雀丘に寄食一ヶ月。只今は左に寄寓當

分落ち着いて居るつもりです。

大阪市港區九條通三丁目

前野貫一郎方

安井ひろし

月刊「風見草」一ヶ月金拾銭

賀正聖城川柳社

發行所 石川縣大聖寺町魚町
一四地高田茶撫郎方

北門の古き柳誌「みちのく」

代表 小林不浪人

發行所 青森縣黒石町みちのく吟社

自宅 青森市浦町橋本二八三

謹賀新年

一月元旦

大島 濤明

大連市西公園一四五

今村 吉朗

賀正 阪崎 串二

清水 虛白

賀正 出口 雨町

大阪市外阪急沿線
小會根村

賀正 伊藤 愚陀

大阪市東區仁右衛門町
五〇八ノ上

新川柳 拍子木 一部十錢
研究誌 見本贈呈

菊版に廻つた新年號を御覽下さい

神戸市西出町一五六

發行所 拍子木川柳社

謹賀新年

縁談先ノ調査
資産信用調査
家出人ノ所在探査
素行動靜秘密調査

大阪市東區北濱一丁目

赤埴探偵社

赤埴 秀吉

電話本局三三七一番

(秘密嚴守) (調査正速)

財産隱匿。特許侵害
等ノ探偵。地方出張
探査ノ依頼ニ應ズ
營業八年中無休

賀正庄 万よし

大阪市道頓堀新戎橋

賀正 岩本素人
岩本武子

松山市港町大正通

川柳雜誌社
京都支部
賀正 桑原京郎
茶來聽風鈴

川原阿佐緒
產多麻里亞

賀正橋本綠雨

舊二一柳子
大阪市住吉區杭全町六〇三
電話天王寺一六七番

川柳雜誌社
平塚支部
賀正酒井駒人

神奈川縣平塚町旭座前

月刊「たまむし」一部 金拾錢
賀正 たまむし吟社

大阪市東淀川區中津濱通一ノ二〇二

月刊「猫柳」一部 金拾錢
賀正 芦城川柳社

石川縣小松町中町四六

賀正 螢 池 支 部

茨木奈緒美 石田好郎 裕康 流 硯中 助 西尾久 細川平 時本九品 龜井愚龍 武川喜代志 高木平六 玉村芳秋 田中紫浪 都築紅玉 植田湖舟 上久保十德 藤本可章 藤田杜洋 福島よし 坂口喜久 宮崎詩樓 三谷梨風 森石松子 森生六華 杉村銀花

(イロハ順)

南海電車

賀正 竹内多聞

大阪市住吉區住の江

賀正 澤井朱唇子

大阪市北區空心中一丁目四二
電話北七二六一番

忌中に付欠
禮致します

浅井冷々子

松山市外観谷

賀正 松丘町二

大阪市東成區別所町五〇二

賀正 山本靜香

大阪市南區上本町二丁目一六

賀正 一柳憲坊

大阪市東區下味原町八七

賀正 福田山雨樓

大阪市浪速區湊町保線事務所
戎一〇〇三

賀正 河野双車

大阪市東成區鳴野町
三〇〇ノ五〇三

賀正 廣瀨無鬼

大阪市東區今橋二關西土地

川柳雜誌社簸川支部

賀正 伊藤綠之助

島根縣簸川郡高松村

賀正 松盛琴人

大阪市此花區上福島南三丁目六六

賀正 池田雪峰

三重縣飯南郡柳田村豊原

賀正 高橋かほる

大阪市南區北炭屋町二〇一
電話南五九六番

賀正 森田輝翠

大阪市天王寺區細工谷町五八

賀正 久田狂水

福島縣石城郡磐崎村

賀正 竹田芦穂

大阪市港區八條通二丁目

賀正 山本丹路

凡々子改め
大阪市南區鹽町一丁目五一

賀正 大野了念

明石市相生町二丁目

<p>賀正</p> <p>篠原憲太</p> <p>大阪市東成區鳴野町三〇〇</p>	<p>賀正</p> <p>岡崎房子</p> <p>大阪市北區澤上江町二丁目十五番地</p>	<p>賀正</p> <p>岡崎桂枝</p> <p>大阪市北區澤上江町二丁目十五番地</p>	<p>賀正</p> <p>三好計加</p> <p>愛媛縣道後湯之町</p>	<p>賀正</p> <p>宮城啞亭</p> <p>鐵傘堂</p> <p>京都府宮津町</p> <p>電話九</p>	<p>賀正</p> <p>前田五健</p> <p>松山市真砂町</p>
<p>賀正</p> <p>西田艸樂</p> <p>大阪市東區岡山町三七四</p>	<p>賀正</p> <p>谷口靖弘</p> <p>大阪市西區北堀江御池通二丁目三七よしや</p>	<p>賀正</p> <p>岡田陽喜亭</p> <p>鬼灯川柳社</p> <p>大阪市東區鎗屋町二ノ二六</p> <p>電話東三二二二番</p>	<p>賀正</p> <p>辻左馬</p> <p>川柳雜誌社 田邊支部</p> <p>和歌山縣田邊町中屋敷町</p>	<p>賀正</p> <p>杉谷專路</p> <p>島根縣簸川郡田岐村</p>	<p>賀正</p> <p>大久保大夢子</p> <p>大阪市住吉區阿部野筋二丁目三五</p>
<p>賀正</p> <p>木村晃卓</p> <p>川柳雜誌社別府支部</p> <p>別府市下野口</p>	<p>賀正</p> <p>前野貫一郎</p> <p>大阪市港區九條通三丁目</p>	<p>賀正</p> <p>住田亂耽</p> <p>兵庫縣魚崎町五九二八ノ二</p>	<p>賀正</p> <p>遠藤燦郎</p> <p>阪急線 十三</p>	<p>賀正</p> <p>北山梧郎</p> <p>川柳雜誌社天滿支部</p> <p>大阪市北區天神橋七丁目電停前</p>	<p>賀正</p> <p>三條東洋鬼</p> <p>神戸市榮町五丁目二八</p>

賀 正

和 漢 洋 醫 院

大阪市南區長堀橋一丁目
電 話 南 四 一 八 八 番

醫學博士 長 谷 川 茂 一

私宅 大阪市東區大手通一丁目

道アラから

公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石なきのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が来た。こゝは我々讀書子にまつては有難いことだ。安い本をもつて安く讀む方法としては古本を買へばいゝ。古本も六つても虫食本のこゝではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道アラの次に公立社の棚をのぞくこゝを一つの趣味としておすゝめしたい。(路郎生)

謹賀新年

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ道入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

樂

燒

謹んで新年を祝します

樂燒に藝術家の魂を烙き
つけることは興趣の深い
ここに存じます就きま
しては

記念品として
贈物として
即興作品として
皆様に御揮毫をおすゝめ
致します

▲路郎先生の樂燒揮毫作品頒布を一
樂です引受いたします御希望の方は
御申込み下さい

大阪市住吉區平野流町

翠香園

窯元

一 樂

謹賀新年

色紙、短冊の

御用は

大阪市東區安土町堺筋西

書畫用品
風流雅品商

和正堂

電話本町二一六番
振替大阪九一七五番

優 質 廉 價 ト ラ 印 ム ー リ ッ ク 靴

需要益々

激増す

トラ印靴クリームのモツ
ト一たる優質廉價は愈々
不斷の研究と大量製産に
より遺憾なく發揮し急速
の需要は時々刻々本品に
集注す今や白熱的需要的
激増を見る本品に依りて
靴の美を甦し給はらん事
を御奨め申します

ボツクス、カーフ製革靴ニハ瓶入ヲ御使
用アレ

キツド、カンガル製革靴ニハ罐入ヲ御使
用アレ

賀 正

カ ナ メ 喫 茶 店

心ブラにお出での節

は是非お立寄を

緊縮時代に最も適合

した

カナメ喫茶店へ

柳人は特に歓迎いた

します。

南區疊屋町周防町

東入南側

カナメ喫茶店

柳 人

永田里十九經營

弊社の工場

謹賀新年

設備

輪轉機 數臺の印刷機械、活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、活字豊富にしてルビ付活字最も多く新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり

營業種目

新聞雜誌印刷、圖書出版引受、紙型鉛版活字製造販賣各種製版印刷、其他附隨事業一切

藤本兄弟社印刷所

大阪市東區農人橋二丁目

電話東一七〇番七七〇番
振替大阪八二八四番

清 酒

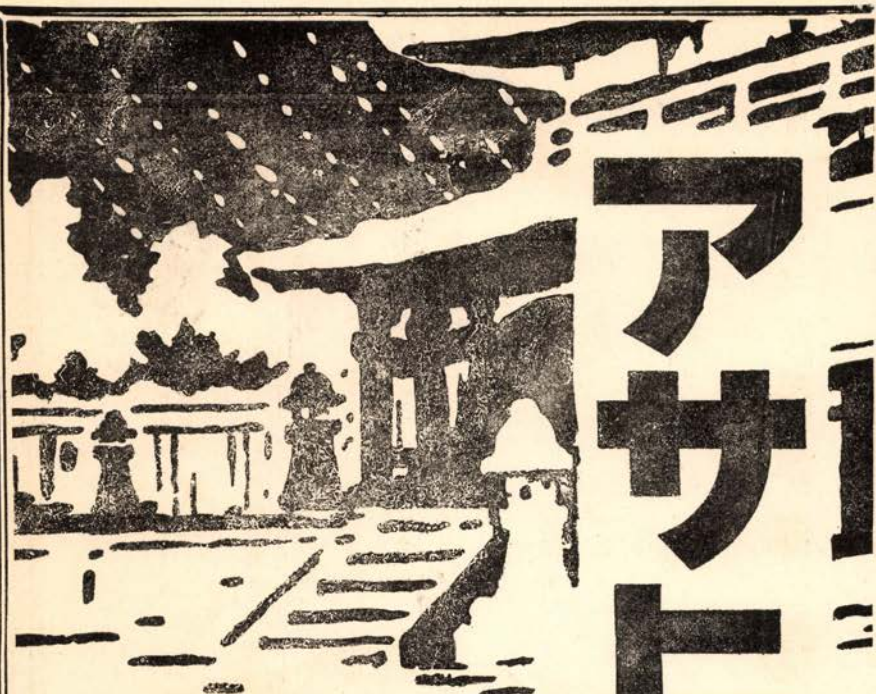
白 鶴 禮 讚

白鶴をチントンシャンミ提けて来る
 午後六時白鶴が待ち妻が待ち
 百事意の如く白鶴呑んでる
 白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
 腰掛へ白鶴狭う飲むままさ
 來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
 白鶴が縁ここはなりぬ君こ僕
 白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀





アサヒビール

清涼
飲料

リボンジトロン

本率も倍旧の

御愛飲希上候

元旦

大日本麥酒株式會社

にきびとり

美顔水

心ある家庭

には是非常備せられたき皮膚衛生薬

(一) ニキビ、吹出物

婦人に因り男子方でも、ニキビや吹出物の多いのは其よいもので御座いませんが、この薬は頑固なニキビや吹出物にも確かな効能があり、すので、信用を博して居ります。

(二) 蚤、蚊、南京虫

その他毒のある虫にされた時、この薬を附けますと、不愉快な痒さや痒さが止まり、された跡が

(三) 皮膚を美しくす

新ういふ薬ですから、常用すればニキビ吹出物を防ぐに勿論、皮膚次第に整きこんだ様に綺麗になり、顔の美しさを増しますので、心ある御家庭に常備せられて居ります。



發賣元
東大
桃谷順天館

大正十三年三月三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和五年十二月廿五日印刷本 昭和六年一月一日發行

川柳雜誌

(第八十四號)

定價金三拾錢